変わらぬ日常と人欠片

かるら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
変わらぬ日常と人欠片

【Ｎコード】
Ｎ０１３６Ｋ

【作者名】
かるら

【あらすじ】
学生たちとその他の日常生活。様々な人との繋がり、『人欠片（ひとかけら）』の学園物語。第三章から本編と考えて下さい。――相変わらず、変わらない、いつでも、いつだって、いつであろうと、いつも通り。――非日常ですら繰り返せば日常になる、それがたとえ奇異日常だとしても。（評価及び感想をお待ちしております！　無知からのスタートだったので、文が乱れていますが、ご了承ください。）

第一章　◆一頁◆

私立太刀守高校の屋上に寝転び、空に浮かぶ流れる雲を眺めながら僕――御柳宵太は溜息を吐いた。

「相変わらず、変わらないなあ。」

そんな独り言を呟き、また一つ溜息を吐く。

「宵太、私が死んじゃってから毎日つまらなそうだね。幽霊になった私が言うのも変だけれど、元気を出してよ。」

ふわふわと浮いている、半透明な制服姿の女子生徒――木薙芙和が僕の顔を覗き込みながら言う。

「だって僕は芙和のことが大好きだったんだよ？それなのにさ、芙和が急に死んで、頭が変になりそうだよ。」

「ごめんね、宵太。突然のことだったから私もびっくり。でもね、これだけは言わせて。私も宵太のこと大好きだよ……」

徐々に薄れていく芙和の姿。
僕が触れようとしても、幽霊に触れることなど不可能なのだ。
ただただ、空振るだけ。

「芙和！まだ消えるなよ！本当に居なくなったら僕はどうすれば――」

――芙和が宵太から渡されたノートを閉じ、顔を上げた。
もちろん幽霊でも半透明でもない、実体のある人間だ。
ちなみに今は放課後で、生徒会室に二人でいる。
つまり、宵太たちは生徒会役員ということだ。

「なんで小説の中では、私が死んでいる設定なの？」

「え？その方が物語として作り易かったからさ。確かに、少し後ろめたかったけれど、なかなか良い感じに仕上がっただろ？」

「私の性格が全然違うじゃない。私はもっとクールなのだけれど。幽霊になったとするのなら、こう言うでしょうね。『死んでも死に切れなかった私より、生きても生き切れない宵太が死ねば良かったのにね』ってね。」

妖艶な微笑を浮かべながら、囁くように芙和が言った。

「まるで僕を殺しそうな台詞だな……」

「私に殺されるのなら本望でしょう？」

「僕を殺してあの世で暮らそう、って感じかな？」

「違うわよ。宵太を殺して私が生き返るの。閻魔様を騙すぐらい私には簡単なことよ。」

「そんなのは本望じゃない！横暴だ！閻魔様を騙せるなら僕を殺さなくても良いじゃないか！」

「宵太にも地獄を見せてあげたいのよ。」

「普通に怖いって！つーか、その言い方だと芙和は地獄行きだったんだな。」

「私としたことが失言をしてしまったようね。そんな宵太に生き地獄を見せてあげる。」

「そっちもそっちで怖いって！」

これでも、宵太たちのいつも通りの会話なのだ。
相変わらず、変わらずに楽しく話している。

「まあ冗談はさておき、なんで小説なんて書いたの？宵太って作家でも目指していたっけ？」

「ああ、ただなんとなく書いただけだよ。でも、やっぱり飽きちゃったね。意外と大変なんだよ、小説を書くのってさ。書くのは時間かかるのに、読むのはあっという間だろ？まるで不当な扱いを受けている気分だよ。」

芙和から返されたノートを鞄に戻しながら宵太は答える。

「それは仕方ないよね。『創るのは難し、壊すのは易し』って言葉もあるしね。それでも作家が書くのってやっぱり書くのが好きだからなのかな？なんだか、まるで病気みたいだよね。」

「病気って……ひどい言い方だなあ。芙和は小説が嫌いなのか？」

「そんなことないよ？どちらかと言えば好きな方だしね。いろいろな人の考え方が伝わるものだと思うし、それに文字だけで人物像を

描けるなんてすごく魅力的だと思わない？」

「まあ、確かにね。読んでいる側の想像力次第でキャラが見えてくるのは、小説ならではだよな。」

宵太たちがそんなことを話していると、扉がガチャリと音を立てて開き、男子生徒と女子生徒が、それぞれ一人ずつ入ってきた。

「お、いたいた。何も言わないで先に行くなよ、宵太ん。寂しくて泣きそうになったぞ。ところで、木薙と仲良く何を話していたんだ？」

入ってきた男子生徒――――柊近馬（ひいらぎ ちかま）が冗談を交えながら笑顔で聞いてきた。

どうでもいいことなのだが、笑顔がとても似合っている。

「今後の経済状況と、日本の行く末をちょっとね。芙和はなかなか興味深い意見を出してくれて、かなり参考になったよ。」

「宵太んたちは凄いな！そんな社会的な話をするなんて俺には真似出来ないぞ！」

「柊くん、騙されないで下さい！御柳くんがそんな頭の良い話を出来るわけがないんですよ。微生物程度の大きさの脳しかないんですから。きっと、御柳くんは芙和に襲い掛かろうとしていたんですよ！危ないところでした！」

近馬と入ってきた、もう一人の女子生徒――――綾杉依奈（あやすぎ いな）が敵意剥き出しの眼で宵太を睨みながら言う。

「あれ？声がするのに依奈の姿が見えないぞ？」

「うちはここにいます！馬鹿にしないで下さい！」

キョロキョロと辺りを見渡す振りをする宵太の前で、依奈はぴょんぴょんと跳びはねている。

「あ、いたいた。小さすぎて見えにくいんだよ。牛乳を飲め！そして、その貧相な身体を成長させな！」

「ひどいです、御柳くん！うちだってちゃんと成長しているんですよ！信用できないと言うのなら触ってみますか？」

依奈は問題発言をしながら宵太をもう一度睨み上げた。
そんな依奈を背後から近馬が抑える。
これはこれで、いつも通りの光景だ。
ちなみにだが、近馬と依奈は付き合っているわけではないので、あしからず。

「綾杉、落ち着けよ。宵太んの言葉にいちいち反応していたら身が持たないぞ。」

「うぅ……だってだって、御柳くんがいじめるんですもん。小さい小さいって、うちが気にしていることを言うんですもん。」

「大丈夫だぞ、綾杉。小さいなんて関係ないぞ。綾杉が小さくても、みんなは綾杉が大好きだからな。」

「あ…あの…この体勢で言われちゃうと、さすがにどきどきしちゃいます……」

”この体勢”とは、近馬が背後から腕を回し、まるで依奈を抱きしめているかのような、そんな体勢だ。

「ん？ああ、そうだな。放した方が良いよな。」

「あの……ちょっと待って下さい……」

依奈が近馬の腕を掴みながら、小さな声で呟いた。
そして少し間を空け、小さな声のまま言葉を続けた。

「……もうちょっと……あと、もうちょっとだけ、このままがいいです。」

「ん？まあ、綾杉がそう言うなら、俺はそうするぞ。」

もう一度言っておこう。
ちなみにだが、近馬と依奈は付き合っているわけではないので、あしからず。

第一章　◇二頁◇

「それにしてもさ、近馬と依奈は仲が良すぎないか？なんで付き合ってもいないのに、そんな風にいられるんだ？」

依奈を膝の上に乗せた、というよりは、”乗せさせられた”近馬を見ながら宵太は聞いてみた。

近馬から返ってくる答えはいつも一緒なのだけれど。

「んー、なんとなく、だ。」

これである。

理由など無いということなのだろうが、それにしても仲が良すぎるという感じは否めない。

「何、宵太？近馬くんに嫉妬しているの？見苦しいから、苦し紛れに死になさい。」

「苦しむことが前提かよ！それに、僕は別に近馬に嫉妬なんかしていないからな。」

「あれ？違うの？あ、なるほど、そういうことね。つまり、依奈に嫉妬しているんだよね？近馬くんが取られちゃったから。まさか宵太が同性愛者だとは思わなかったな。私もさすがにびっくり。」

「何故、そうなるんだ？僕が同性愛者なら芙和とは付き合っていないだろう！それに、本当にびっくりしているなら少しでもそれらしい表情をしろよな。」

「む……私、怒っちゃったもんね。むかむかむかー。宵太ー、覚悟しなさいー。」

「芙和、無表情のままですよ。言葉にも抑揚が無いし。」

「がおー。」

またしても、抑揚の無い口調で言う。
まあ、これでもというか、これが芙和の照れ隠しでもあるのだけれど。
と、宵太と芙和が遊んでいる間に、いつの間にかもう一人増えて扉の前に立っていた。

「御柳先輩と木薙先輩、そして柊先輩と依奈先輩……まさか！そうか、これから”ちゅー”とかしちゃうわけですね！あはっ、これは空気と同化するが如く静観しないと！」

おおよそ、静観する人には見えないぐらいのテンションの高さで妄想を繰り広げる後輩男子――――比名麦冷（ひなむぎ ひえる）がそこにはいた。

「冷や麦、そこに隠れていることぐらい僕らにはわかっているんだ。速やかに出てきなさい。」

冷や麦とはあだ名である。
宵太限定で呼んでいるあだ名だ。
他の人に浸透しなかっただけのことなのだが……
それについては宵太も少し残念そうだった。

「まさか！さすがは御柳先輩だ！自分が何処にいるか御見通しとは

恐れ入った！これでは、こっそり御柳先輩たちを見れないな。それでは、次からは堂々と見させていただこうかな。」

御見通しとか言っているが、最初から隠れてなどいなかった。今だって、堂々と見ていたのだ。

「相変わらず、変わらないな。冷や麦は妄想僻のある変態だよな。」

「自分、感激しましたよ！御柳先輩に褒めてもらえるなんて夢でしか見たことなかったですから！」

「夢では見ていたのかよ……出演料でも払ってもらおうかな。」

「お金では払えないですけれど……身体で払いましょうか？」

「いや、遠慮しておくよ……」

冗談でもやめてほしい台詞だ。

いや、冷の場合は冗談じゃないから更に質が悪い。

相手が誰であろうと本気で言っているのだ。

人間だろうと、それ以外の存在であろうと、嘘を言わない。

嘘のようで、嘘でないから質が悪い。

「冷くん、何を妄想していたかは敢えて問いませんが、いきなり登場するのはいい加減やめてほしいです！」

「依奈先輩に嫌われたくはないから、自重することを誓おう。自分は依奈先輩が大好きだからな！」

「あうぅ……そこまで素直に言われると反応に困ります。」

「あはは、綾杉、照れるなよ。顔が真っ赤だぞ。」

「ち、違いますもん！近馬くんに抱きしめられているからですもん！」

「ん？そうなのか？あはは、それは俺が照れるな。」

もう一度言っておいた方がいいかな？

ちなみにだが、近馬と依奈は付き合っているわけではないので、あしからず。

「残念だったな、冷や麦。どうやら付け入る隙は無いみたいだな。」

「御柳先輩、何か勘違いをしているのですか？自分、恋愛感情で言っていたわけではないですから。ほら、依奈先輩って小さくて可愛らしいから、それでですよ。」

”愛情”じゃなく、”愛玩”ということか。

それにしても、依奈は後輩にまで『小さい』と言われるなんて気の毒だ。

ちなみに、冷の身長は依奈より少し高い程度しかない。

「宵太、どうやら勘違いをしていたのは宵太の方みたいだね。死にたくなるぐらい恥ずかしいでしょう？だから、死になさい。」

「どうやら芙和は僕に死んでほしいらしいな。だったら、僕は意地でも生きてやるからな！」

「えー、それは困っちゃうな。私が宵太名義で加入しておいた生命

保険が無駄になっちゃうよ。」

「保険金目当てで僕を殺すな！僕はミステリー世界の被害者じゃない！」

「勘違いしないでよね。宵太の為なんだから。だからヒステリーにならないでよね。」

「嘘だ、信じられない！僕の知っている芙和は、今この状況ではそんな台詞は言わない！まさか、偽者なのか？」

まあ、宵太と二人きりで誰にも邪魔されない状況ならば話は違ってくるのだけれど。

「しくしくしく。悲しくて涙が止まらない。まさか、宵太に信用されていないなんて……なんてね、お芝居はここまでよ。私が偽者だとよく気付いたなー。」

またしても、抑揚の無い口調、そして無表情で言う芙和。

「まさか、本当に偽者だったとは！」

もちろん、偽者なわけがない。
これは、ただの遊びなのだ。
本当に、相変わらず、変わらない、いつも通りの光景だ。

「ところで、冷後輩。今日は幼なじみのあいつはどうしたんだ？いつもなら、仲良く一緒に来るじゃないか。」

「幼なじみと言っても学年はあっちが一つ上、つまり柊先輩たちと

同じ学年ですよ？それに、自分はそこまで仲良くしているつもりも、するつもりもないですから。」

「へえ、そんなことをよく言えるねぇ。あたしが一緒にいなければ何も出来なかったあの頃の冷は何処に消えたのかな？ああ、なるほどね。今、あたしの目の前にいる冷は幽霊ということか。それならば、あたしが呪われる前に成仏させてあげようじゃないか。この――釘バットでね！」

いつの間にか冷の背後に立っていた女子生徒――――天里（あまり）美恵留（みえる）が一体何処から取り出したのか、釘バットを構えた。
美恵留が手に持っている釘バットには、達筆な字で『悲しの天使、ミカエル』と書かれている。
どうやら、自身の名前を皮肉った言葉らしい。

「や、やめろ、美恵留！自分は生きて――――」

「発言権を拒否する！幽霊に人権は無い！」

第一章　◆三頁◆

まあ、何と言うか、冷は美恵留からの攻撃を受けずにすんだ。
理由としては、これもこれでいつも通りだからだ。
結局、宵太たちの周りはいつでも、いつだって、いつであろうと、いつも通りなのだ。

「だいたい、幼なじみとはいえ、あたしはあんたの先輩なんだから、”美恵留”って呼び捨てにするのいい加減やめなよね！」

「そうは言っても、自分が美恵留のことを、”美恵留先輩”とか、”天里先輩”って呼んだら違和感があると思わないか？」

「くっ……確かにね。仕方ないから幼なじみということで許してあげる。はあ、また今回もあたしの釘バットの出番はなかったねぇ。」

美恵留は、まるで芸術作品でも見つめるような、そんな目で釘バットを眺めながら悔しそうに言った。
まあ、確かに芸術作品と言えるのかもしれない。
今時見かけないからな、釘バットなんて。

———私立太刀守高校の生徒会役員に三年生はいない。
三年生に進級すると同時に、生徒会役員から抜けることになるのだ。
だから、今は生徒会長の近馬を中心に、宵太たち二年生と、一年生の冷が務めている。
そして、生徒会役員以外の生徒は、全生徒例外無く部活に所属している。

逆に言えば部活をやりたい生徒は、生徒会役員にはなれないのだ。そして、その制度から必然的に帰宅部が存在しない珍しい学校なのである。

「じゃあ、全員集まったってことでそろそろ始めるか。まずは今年度の各部活などの予算だけれど――――」

と、”生徒会長”である近馬が話し始めた。

といっても、”書記”の芙和は会議の内容を書き留めながらも、”副会長”である宵太で遊んでいる。

宵太と同じく、”副会長”の依奈は、近馬の膝の上で髪の毛で遊ばれつつも、おやつを食べている。

”会計”の冷は暗算をしているのか、妄想をしているのか――――おそらく、後者だろう。

”庶務”の美恵留は愛用する釘バットに見蕩れたままだ。

まるで仕事をしているようには見えない、普段と変わらない光景なのだが、これでも学校側から一目置かれる程優秀な働きをしているのだ。

「――――という感じで俺がまとめてみたんだが、依奈と宵太ん、どうだ？予算が多い、又は少ないと思う部活はあるか？」

「僕としては運動部関係の方に偏りすぎなんじゃないかと思う。近年は文化部の方が優秀な成績を出しているから、もう一度見直した方がいいと思う。」

「うちもそう思いますね。特に茶道部や書道部、華道部といった、日本伝統の部活を主に力を入れてあげた方がいいと思います。」

といったように、表面上はそう見えなくとも真面目に話しているの

だ。
近馬が二人の意見を取り入れ、再度予算案を出した。
「自分に少し面白い提案があるのですが。」
それを見た冷が口を開き、言葉を続けた。
どうやら、ちゃんと会議に参加していたらしい。
「今年の各部活の予算なんですが、毎年のように生徒会の一存で決めてしまうのも、なんだか不公平な気がします。なので、どうでしょうか？”各部活が競い合い、それぞれの希望する予算を奪い合う”というのは？もちろん、競技に関しては不公平の無いようなものを考えなくてはいけませんが。」
「まあ、なかなか面白い案だと僕は思うけれど、どうなんだ？それの方が苦情とかありそうだけれど。それに不正とか出た場合の対処もあるだろうし。」
「あたしは賛成だねぇ。不正をするような人がいれば、あたしが直々に裁いてあげようじゃないか。」
普段は会議に消極的な美恵留が生き生きとした表情で発言した。
まあ、美恵留は会議などよりも、活動的な活動の方が得意なのだ。
「うちも賛成ですね。それぞれの部活の目標なども明確になりますし。」
「私としては、部活紹介も兼ねて行えば、一年生も入り易くなって良いと思うの。各部活の熱意とかも伝わり易いだろうしね。」

「木薙のその意見も取り入れるのもいいな。もう少し話し合って問題点などを無くせば、俺は良い案だと思うぞ。とりあえず、その方向でやってみるか。」

――その後、冷の提案は採用されることとなった。
どうやら、少し大規模な企画になるらしい。
話がまとまり、とりあえず今日のところは解散となった。
外は四月にしてはまだ寒く、夕日が眩しく町を照らしていた。
宵太は芙和と、近馬は依奈と、冷は美恵留と、といった組み合わせでそれぞれ帰っていった。

「宵太、手を繋いでも良いかな？」

「もちろん、良いよ。」

しばらく歩いてから、芙和が差し出した手を宵太は当然のように握った。
芙和は宵太と二人だけになると、普段とは性格というか、接し方が変わる。
それはもう、はっきりと。

「ねえ、宵太の小説の中みたいに、私が死んじゃったら、宵太はどうする？」

「そりゃあ、悲しくて僕は生きるのも嫌になっちゃうかもなあ。少なくとも、いつも通りじゃいられないよ。」

「でもね、宵太。もし、そうなっちゃった時は、私としては宵太には生き続けてほしい。そうじゃないと、それこそ死んでも死に切れないもん。」

「わかったよ。でも、この話は終わり。だって芙和は生きているし、死んだ時のことなんて考えたくもないからね。」

「うん、そうだね。私もずっと宵太の側に居たいもん。」

芙和は宵太の手を優しく握り直しながら言った。

そんな話をしていると、背後から一人のおっさんが話しかけてきた。

「やあやあ。宵太くんに芙和ちゃんは今日も仲が良いなあ。帰り道に夕日に照らされて、お互いの愛の在りか、在り方を確かめ合う。いやあ、青春真っ只中だね。良いねぇ、素晴らしいねぇ、青春。ぼくの青春は約十年前に、いや、約七十年前と言った方がいいのかな？まあ、どちらでも構わないんだけれど終わっちゃっているからね、とても懐かしく思えるよ。そんな宵太くんたちみたいな将来のある学生諸君の貴重な時間を浪費する趣味の無いぼくにとって、今の宵太くんたちに話し掛けるかどうか迷ってしまったけれど、話しかけずにはいられなかったよ。何故ならぼくはキミたちを気に入っているからね。ぼくの話を聞いて信じてくれるだけじゃ留まらず、協力までしてくれるからね。で、その協力のことなんだけれど、ぼくの曾孫である『美恵留ちゃん』は元気かな？直接確かめられないのはやっぱりつらいけれど、宵太くんたちが教えてくれることでぼくは安心できるんだよ。」

それは、まくし立てるように喋る三十代前半の男――――天里天（あまり そら）だった。

第一章　◇四頁◇

振り返った宵太と芙和に、ひらひらと手を振りながら天は近付いていった。
ちなみにだが、芙和は天を見たと同時に繋いでいた手を離していた。

「おっさんは相変わらず、変わらないな。背後からいきなり話しかける癖を直さないと、いつまで経っても芙和から苦手に思われるぞ。つーか、嫌われ始めているんじゃないか？」

「あれれ？ぼくって芙和ちゃんに嫌われていたのかい？がっかりだなあ。ぼくは芙和ちゃんのこと好きなんだけれどねぇ。おっと、そんな目で睨まないでくれよ、芙和ちゃん。ぼくの軽口なんかそこら辺に流しちゃってくれればそれで良いのに。」

「え？天さんを流しても良いんですか？島流しを望んでいるということで良いんですよね？」

「ぼくはそんなこと言ってないんだけれどなあ。それに、ぼくは既に島流し以上の経験をしているんだからさ。時代流し、かな？芙和ちゃんたちには話しているんだから、そういった冗談にならない冗談は止めてくれよ。ぼくでも少しは傷付いちゃうんだからね？」

「天さんは一度、本当の意味で滅多刺しにされた方が良いと、私は思いますよ。」

「まったく、芙和ちゃんは怖くて恐くて仕方がないなあ。それが芙和ちゃんの良いところでもあるとぼくは思うのだけれど、それが通

じる相手が少ないっていうのは悲しいよね。」

「私は大事な人さえ理解してくれれば、それでいいですから。」

「それはつまり宵太くんとかかな？あはは、図星のようだね。可愛い顔が真っ赤になっちゃって更に可愛いねぇ。宵太くんの背中に隠れちゃうところなんて、ますます可愛いじゃないか。まあ、芙和ちゃんで遊ぶのもそろそろ止めにしないと今度は宵太くんに怒られちゃうね。じゃあ、本題に入ろうか。もう一度聞くことになるけれど、ぼくの曾孫である美恵留ちゃんは元気にしているかい？」

天の言葉の通り、自分の背中に隠れている赤面した芙和を横目に見て、宵太は天の方に目を向けた。

「芙和の可愛らしい反応を見れたことで、今のやり取りは許すけれど、本題に入るまでが長すぎるよ。何が『将来のある学生諸君の貴重な時間を浪費する趣味の無い』だよ。おっさんの台詞は一回一回が長すぎるんだよ。十分に浪費していることを少しは自覚してくれ。」

「それは悪かったね。それなら前言撤回しようかな。『ぼくは将来のある学生諸君の貴重な時間を浪費する趣味しか無い！』で、どうだろうか？」

「悪趣味すぎるだろ！」

天里天という人間は、かなり饒舌多弁な人間なのだ。
呼吸無しで一文を読み上げているように喋る。

「まあ、本題に戻すけれど、僕から見れば天里は元気だよ。むしろ、

元気すぎるぐらいに暴れているよ。」

主に冷や麦相手にな、と宵太は付け加えた。
それを聞いて満足そうに天は頷き、笑顔で何処かへ歩いていった。
聞きたいことを聞いたらすぐに別れる、それが天の主義なのだ。
だらだらと話すのは本題に入る前だけ、本題の後は何も話さない。
饒舌多弁な天だからこそ、区切りはしっかりと区別する。

「いつまで怒っているんだ？おっさんは帰ったんだから機嫌直してくれよ、芙和。」

「……怒ってないもん。」

明らかに機嫌の悪い芙和の手を引きながら、宵太が困ったような顔で言う。

「僕としてはいつでも甘えてくれて構わないんだけれど、芙和はどうして、そこまでして拒むんだ？」

「何度も言っているでしょう？……恥ずかしいの。」

「何度も聞いているけれど、それを聞く度に思うんだ。その台詞を言っている時の芙和って、超絶可愛いんだよね。」

「……ばーか。」

照れつつも宵太の隣に並び、引かれていた手を繋ぎ直し歩く芙和。
まだ軽くだが顔は赤かったが、機嫌はどうやら直ったらしい。
その後は芙和を無事に家へと送り、宵太は自分の家へと向かっていった。

宵太の家は芙和とは逆方向なのだが、ほぼ毎日宵太は芙和を家へ送ってから帰っている。
同じく近馬も依奈を送ってから帰っている。
しつこいようだが、近馬と依奈は付き合っていないので、あしからず！

「ただいま。」

宵太が家へ着き、気の無い声でいつも通り帰宅の挨拶をしながら玄関の扉を開けた。

「おかえり、宵兄ー！」

直後、女の子———御柳黄泉（みやなぎ よみ）が抱き着きながら兄である宵太を迎えた。
宵太はいつも通り黄泉を抱えたまま靴を脱ぎ居間へと向かい、黄泉をソファに座らせた。
そして、手を洗ってから居間へ戻り、黄泉の隣に座った。

「ねぇねぇ、宵兄ー。こっち向いてー。」

「どうした？」

ちゅう。

「はい、『おかえり』のちゅー。」

「相変わらず、変わらないな。つーか、そろそろ変われよ……小学生高学年の女の子が兄の唇にちゅーとか、ロリ向けの漫画ぐらいでしか見ないって。だいたい、恥ずかしくないのか？」

「よみは恥ずかしくないもんねー。宵兄には彼女がいるけれど、それもよみには関係無いもんねー。」

にっこりとまるで悪意の欠片も無いような無邪気な笑顔で黄泉は答えた。

宵太は溜息を吐きながら、

「相変わらず、変わらないな。」

と、もう一度呟いた。

「やれやれ、弟くんは妹ちゃんに愛されているというのに、いつまで経ってもそれを理解しようとしないのぅ。まったく、罰当たりな奴じゃのぅ。」

壁に寄り掛かる着物姿の女性――――御柳夜凪（みやなぎ やなぎ）が古めかしい口調で言った。

「生憎、僕には黄泉の愛情を受けきる程の器量は持ち合わせていないんだ。つーか、夜凪はただ単に僕に嫉妬しているだけなんだろ？」

「ち、違うわ！儂は別に妹ちゃんにもっと好かれたいとか、思っておらんもん！」

これ以上に無いくらいわかりやすい反応だった。

別に黄泉は夜凪のこともそれなりに好きではあるのだが、宵太に対するそれに比べると、どうしても劣ってしまうのだ。

「よみは夜凪ちゃんのことも好きだよー。だから宵兄に嫉妬しちゃ

だめだよー。」

「そう言うんじゃったら、弟くんだけじゃ無く、儂にも抱き着いてくれるか？」

「んー、それとこれとは別だよー。」

黄泉は見せ付けるように、宵太に再び抱き着いた。

「ずるいぞ、弟くんばっかり！儂にも抱き着いてくれたって良いじゃろう！」

「夜凪ちゃんは大人なんだからわがまま言っちゃだめー。よみはまだ子供だから良いんだもんねー。」

「相変わらず、変わらないな……」

宵太は溜息を吐きつつ、もう一度呟いた。

第一章　◆五頁◆

「妹ちゃん、儂にもちゅーしてくれぬかのぅ？弟くんだけずるいんじゃよ。」

「よみに追いつけたら良いよー。」

居間の中でとたとたと走り回る黄泉と夜凪。
宵太はそんな二人を見て、いつも通りの変わらない光景に溜息を吐いた。

「僕は部屋に行っているからな。」

聞こえているかは定かでは無かったが、それだけ伝えて宵太は自分の部屋に向かった。
ちなみに、二階の一番奥の部屋だ。

「御柳宵太、キミはどうやら充実した一日を送れているようだね。キミの顔が教えてくれているよ。」

宵太が部屋に入ると、開け放した窓の外の大きな木の枝に腰掛ける女性――東雲斗乃（しのめとの）がニッコリと笑いながら話しかけてきた。
灰色のような長い銀髪をなびかせてはいるが、どこか中性的な雰囲気がある女性だ。

「斗乃さん、それって不法侵入とかになりませんか？」

「ここは誰の所有地でもないからね、心配ないさ。そこら辺は浮浪

者のボクだからこそ弁えているのさ。」

手を延ばしては手頃な枝を結び遊びながら、斗乃は言葉を続ける。

「あくまでボクの予想だが、御柳宵太、キミの充実の要因は下の階で走り回っているお茶目な姉妹のおかげなのかな？それとも、学校の友達のおかげなのかな？」

「どちらとも、もしくはどちらでもないと言えますね。充実というよりは疲れた感じですし。」

「そんなことを言ってはだめだな。キミはどうして、否定的、被害的、悲愴的になるのさ？ボクから見れば、御柳宵太、キミの姿は幸せにしか見えないよ。」

ニッコリと話す斗乃。
優しい笑顔と、優しい言葉で、優しく接する彼女は、先程自分でも言っていたが浮浪者だ。
定住しない旅人、自由奔放な常識人、それが東雲斗乃。
二十歳近い女性の生き方としてはかなり珍しいだろう。
いや、人の生き方に珍しいも何も無いのだけれど。

「ところで、斗乃さん。今日は僕に何かご用でもありましたか？」

「用って程じゃあないさ。ただね、御柳宵太、キミと将棋を指したくなっただけさ。ボクの相手をしてくれるかな？」

「もちろん、お願いします。」

では、と言って斗乃は着ているコートから折り畳み式の将棋盤と駒

を取り出した。
ちなみに、何故か男性用コートだ。
理由は『性別という固定概念は嫌い、服装くらいボク好みでいいじゃないか。』というもの。

「対局、よろしくね。」

「僕の方こそ、よろしくお願いします。」

窓際のスペースに置き、窓の内と外で指し合うという妙な光景だ。
しかし、斗乃は決して家へは上がろうとはしない。
浮浪者とはいえ身なりは綺麗なのだが、頑なに拒否し続けるのだ。

「ところで、」

第二局目を開始したところで斗乃が口を開いた。
対局といっても遊びのようなものだ、問題はないだろう。
ちなみに、第一局目は斗乃の勝利だった。

「木薙芙和、彼女とはどうなのかな？」

「芙和とは仲良く過ごしていますよ。今日なんて、おっさんのおかげで可愛らしい芙和を見れましたよ。」

「そうか、聞く必要も無かったな。キミの顔が教えてくれているからね。」

パチン、と小気味良い音を立てて駒を指していく。

「斗乃さんは何かありますか？日常の変化とか。」

「ボクには何も無いさ。良くも悪くも、ね。キミたちみたいに日常を過ごしてはいないからさ。だからボクには、何も無い。」

「そうですか。」

その後はお互いに無言で駒を指し続けた。
第三局目を終えた時点で、斗乃の三連勝。

「またボクの勝ちだね。御柳宵太、キミとまた対局できる日を楽しみに待っているさ。」

「僕の方こそ楽しみにしています。僕が斗乃さんに勝つまでは違う場所に行かないで下さいね。」

「ボクは気ままな浮浪者さ。不確かな約束は出来ないけれど、キミたちのことは気に入っているのさ。だから、とりあえずは了解と言っておくさ。」

斗乃はニッコリと笑いながらそう言って、コートに将棋盤を仕舞うと木から飛び降り、どこかへ去っていった。

「宵兄、助けてー！」

「待つんじゃ、妹ちゃん！」

部屋の扉を勢いよく開きながら、下の階で追いかけっこをしていたはずの姉妹が入ってきた。
黄泉はそのままの勢いで、宵太に抱き着きベッドに倒れ、その上から夜凪が抱き着いた。

「な…何？僕に何か用か？」

「夜凪ちゃんが襲い掛かってきたんだもん。だから宵兄助けてー。」

「ほらほら、妹ちゃん。捕まえたのじゃからちゅーするのじゃ！」

「うぅ……宵兄ー……」

「してやればいいじゃないか。僕には平気でするんだから、夜凪にも出来るだろ？」

二人に乗られながらも、普通に会話する宵太。
言ってしまえば、これですらいつも通りだ。

「もう…しょうがないなー。」

ちゅう。

黄泉は振り返って夜凪の頬に唇を付けた。

「……って、ほっぺかい！儂には口にしてくれぬのか？」

「しないよー。」

「そんな無邪気な笑顔で答えられると、何も言えぬのぅ……」

「それよりも僕の上から早く降りてくれ！」

仲が良すぎる程、仲の良い兄弟姉妹だ。

特に夜凪と黄泉は異常な程だ。
それが宵太としては悩みの種でもあるのだが。
「あ、そういえばね宵兄にお客さんが来てるのー。」
「こんな時間に誰だ？」
「芙和ちゃんじゃったぞ。」
「なんだと！」
宵太はすぐさま玄関に走って行った。
「あ……嘘じゃったのに。」
もちろん夜凪の声が宵太に聞こえるわけが無かった。
「お、御柳先輩、夕食時かもしれないと思いましたが、杞憂でしたか？」
玄関に居たのは、一つ下の後輩、比名麦冷だった。
「あれ？冷や麦？芙和じゃないのか？」
「そんな……自分より木薙先輩の方が嬉しいだろうけれど、あからさまにがっかりされると傷つきますよ。」
「弟くん、さっきのは嘘じゃからな。」
「もう、宵兄慌てすぎだよー。」

階段を下りてくる二人を見て、どうやら状況を理解した宵太。
とりあえず姉妹には頬を引っ張り制裁を加えた宵太。

「宵兄、放してよー。よみは嘘言ってないのにー。」

「無駄じゃよ、妹ちゃん。弟くんは儂らが手を組んどるのを御見通しなのじゃ。」

「宵兄は超能力者だったのかー。レベル7なのかなー？」

「そうじゃとしても、『絶対可憐』にはなれないじゃろうな。」

「宵兄は男の子だもんねー。」

頬を引っ張られながらも反省の様子が見られない姉妹だ。

第一章　◇六頁◇

「……御柳先輩！おかっぱロリ少女な妹さんと、和服撫子お姉様がいるなんて、羨ましすぎますよ！その上、超絶ツンデレ彼女までいるなんて……恵まれすぎじゃないですか！」

冷は宵太と、宵太に頬を引っ張られ続けている姉妹を見て興奮しながら言った。

「いや、兄弟は数に入れたらだめだろ……」

「何を言っているんですか？この世の中には、”そういった”のを趣味とする人だっているんです！自分だってそうですから。」

「冷や麦は天里がいるだろ？」

「み、美恵留は嫌ですよ！自分はまだ死にたくないですから！」

「天里は何者扱いなんだ？」

「快楽思考殺人者ですね。」

「超危険人物じゃないか！まあ、確かに釘バットだしな……あれ？つーか、冷や麦はなんで家に来たんだ？」

ようやく宵太は本題に話を戻した。
おそらく、忘れかけていたんだろう。
しかも、冷でさえも。

「あ、えっと……そうそう、”仕事”ですよ。呼び出されたので迎えに来たんですよ。」

「相変わらず、変わらずに急だな。だいたい用があるのなら、本人が直接来ればいいんだよなあ。」

「あの…それが……」

「ざーんねん、今日は来ちゃっているんだよーん。生意気なこと言うねぇ、宵太。てめぇらには義務があるんだから文句を言うんじゃねぇよ。それとも俺様七士様の言うことが聞けねぇのかなあ？」

宵太の発言に反応したかのように扉が開き、長身の男性―――緋鳥（ひとり）七士（ななし）が入ってきた。

見た目こそは誠実そのものの神主だが、中身は傍若無人の極悪非道。

「うわ……本人登場かよ……」

「御柳先輩、伝え忘れて申し訳ない……」

「いいから早く行くぜ。こんなところで話しても時間の無駄、生きる無駄だ。現場に行かなきゃ意味が無ぇ、生きる意味も無ぇ。」

そういうと七士は、二人の襟首を掴み引きずっていった。

「七士殿は素敵じゃのぅ。」

「夜凪ちゃんってああいうのが好きなのー？」

「儂は俺様男が大好物じゃ！」

「じゃあ、デートにお誘いすればいいのにー。誘わないのー？」

「誘えないんじゃよ。儂、乙女じゃから恥ずかしくて……」

「あはっ、夜凪ちゃん可愛いー。」

三人の姿を見送りながら、和む二人だった。
一方、七士に引きずられ現場へ到着した宵太と冷は、先に着いていた近馬と会った。

「宵太んと冷後輩、どうした？なんだか雰囲気が暗いぞ？」

「近馬、気にしないでくれ……」

「どうして自分まで……」

「ん？緋鳥ん、何かしたのか？」

「んあ？気にするな、ただの俺様式教育だ。ところで、今日はてめぇら男共三人だ。女の子がいなくて華が無ぇが、まあ我慢しな。今日の相手は男じゃなきゃ意味が無ぇからな。」

と、そこで、なんとか立ち直った宵太が質問をした。

「七士さん、それってどういう意味だ？」

「つまり、だ。今日てめぇらが相手をするのは、”そういう奴”ってことだ。」

「答えになってない気がするけれど、僕たち三人の内の一人だけでも良いってこと？」

「さて、それは知らねぇ。女の子じゃ意味が無ぇってのは確かだが、”奴”にも好みがあるだろうからな。」

一見、にこにこと笑顔で答えているように見えるが、実はそうではない。
にやにやと嫌な笑顔なのだ。

「自分、なんとなくわかりました。今日の相手は女の子、そして鍵は恋ですね？」

「さすがだな、冷。まあ、その通りだ。俺様が出向けば一発一撃で終わるが、生憎だがロリコン趣味は無ぇんだ。だから、てめぇらでよろしく頼んだぜ。」

それだけ言うと、七士は持参した枕を持って何処かへ行った。
寝心地の良いところを探しに行ったのだろう。

「宵太ん、冷後輩、とりあえず行くか。その娘が居るのはこの先の廃墟らしいから。」

「柊先輩は楽しそうですよね。それに比べて御柳先輩は……」

「僕には不向きな気がする……」

「毎回のように同じ台詞を言いますが、そろそろ慣れましょうよ。」

渋る宵太を連れながら、近馬を先頭に廃墟へと入っていった。

『だ、誰？私を消す人なの？』

廃墟の中に居たのは、白装束を纏った女の子だった。

ただし――――半透明の幽霊だ。

「俺たちはある人から頼まれてキミの悩みを解決しに来ただけだ。」

『私の悩み？う、嘘よ！そうやって私に近付いて消すんでしょう！』

そう、宵太たちの”仕事”とは、幽霊を相手するというもの。

とある事から七士の仕事を手伝う羽目になったのだ。

「俺たちはそんなことはしないよ。だから、お願いだから、キミの悩みを聞かせてくれないか？」

近馬が笑顔で幽霊に言った。

こういう時は近馬が一番適している。

自然体で話せるし、自然体で笑顔になれる。

『あ、あなたたちの名前は？』

三人で顔を見合わせ、お互いに許可をとる。

名前を教えて危なくなるケースも少なくないからだ。

「俺は柊近馬だ。」

「僕は御柳宵太。」

「自分は比名麦冷です。」

『わ、私は…生前の名前は、零六式（ぜろりくしき）です。』

幽霊――――もとい、式は少し躊躇いながらも名乗った。
これで少しは距離が縮まっただろう。

「そうか、零六式か。キミはどうしてこんなところで、悩み続けているんだ？」

『待っているんです……』

「誰を？」

『ラブレターの相手です。ここで待ち合わせをしているんです。その人が来るまでは離れられないんです……』

「そうか、待ち合わせをしていた時に……それは悲しいな。その人の名前は知っている？」

『知りません。名前が書いてなかったので……』

「隣に座っても良いかな？」

『……はい。』

近馬は式との距離を順調に縮めていく。
そんな近馬を見ながら、宵太と冷が小声で会話する。

「御柳先輩、柊先輩は先程から普通に話してますが、恐怖が無いん

ですか？」

「まあ、近馬だからな。近馬は人との距離を縮めるのが上手いから。」

「自分なんて先程から衝動を抑えるので精一杯です……」

冷は自分を腕で抱えながら言った。

式は幽霊ということもあって、儚げな雰囲気が漂う純粋無垢な少女に見える。

しかも歳は中学生か高校生ぐらいなのだろう。

妄想僻で変態な冷の好みにぴったり合っているのだ。

「冷や麦は変態だな……」

「お褒めの言葉、光栄です！」

「勘違いするな、褒めていない！」

二人はどうやら手伝う気は無いらしい。

第一章　◆七頁◆

「今からいくつか質問するけれど、答えたくなかったら答えなくて良いからな、零六式。」

『式でいいです……』

「ん？」

『呼び方、式って呼んでほしいです。』

「そうか、わかった。式のその姿は何歳の時の姿だ？」

『十五歳、私が死んだ当時の年齢です。中学卒業直後の出来事だったので……』

「じゃあ、俺の歳とは一つか二つ違いだな。でも、時代によっては式の方が年上になるのかな？」

『私の時間はもう止まっていますから、永遠の十五歳ですよ。だから、近馬さんの方が年上ですね。』

くすくすと小さく笑いながら式は自虐気味に言った。

だんだんと心を開きつつあるのだろう。

「この廃墟って当時は何が建っていたんだ？結構な広さはあるし、待ち合わせにも選べるような場所なんだろ？」

『図書館、私立図書館です。私がよく通っていた場所でしたから、ここを選んでくれたんだと思います。』

「図書館か。本が好きなのか？」

『はい、特に小説は大好きです。自分の頭の中で、読んでいる場面を想像するんです。』

その当時を思い出しながら喋っているのだろう。
表情が懐かしさに浸っている。

『ファンタジーはわくわくしますし、ホラーはぞくぞくします。そして――私が一番好きだったのは恋愛小説……どきどきするんです。恋愛経験なんて少なかったですし、デート経験も無かったです。告白なんて夢にも思わなかった……』

「……式？」

近馬が式の顔を覗き込むと、涙を浮かべていた。
決して流れることの無い涙を。
幽霊は表情はあっても、涙や汗を流すことは出来ない。
思いの塊、想いの塊、念いの塊、つまり記憶の塊だからだ。

『涙を流せないのに泣くなんて変ですよね……こういう時に幽霊だってことを実感できます。』

「式は泣けるんだから良いじゃないか。”心が在る”って証拠なんだ。それが、たとえ記憶の中の心でもな。」

『近馬さんは優しいですね。私なんかの為に勿体ないですよ……』

「質問の続きは泣き止んでからな。」
近馬は式の頭に自分の手を乗せた。
もちろん、幽霊に実態は無いのだから乗せる真似事だ。

「良いですね、あれ。」
離れたところに宵太と一緒に座っている、というか単にサボっている冷が呟いた。

「自分もやりたいですよ。御柳先輩相手にやっても良いですか？」

「断固拒否だ。それよりも冷や麦、近馬を見ていてくれ。僕は周りを探索してくるから。」

「了解です。何か探し物ですか？」

「まあ、ちょっとね。」

曖昧の返事をして宵太は外に出ていった。
冷は宵太に言われた通り、近馬から目を反らすまいとじっと見つめた。
これは憑依されないようにする為でもある。
極めて稀にだが有り得ることなのだ。
それは、幽霊側が無意識に起こす場合もある。
だが、基本的に離れたところから見なくても良いので、単にサボっているのと同じである。

『もう大丈夫です、泣き止みましたから。次の質問はなんですか？』

「式はどうしてこの廃墟に留まり続けているんだ？”相手を待っている”と言ったが、本当の理由はなんだ？」

『え……？それは、どういう……』

「先程、式は泣いたよな？それは悲しかったからだ。でもそれは、”待っても来なかったから”じゃないのか？」

『それは……』

「ああ、ごめんな。答えたくなかったら答えなくて良いからな。質問を変えようか？」

『確かに、近馬さんの言う通りです。相手の人は閉館時間間際になっても来てくれませんでした……私は裏切られた、そう思うと自然に身体が動き、自殺してしまったんです……』

事故でも事件でもなく、自殺。
式はいわゆる地縛霊というもの。
その地に縛られ動けぬ霊。
自ら成仏することはなく、負の溜まり場の原因にもなり易い。
だから七士の仕事なのだ。

「もし、俺がその相手の代わりをした場合は式はどう思う？真似事みたいなものだから、やっぱり怒るか？」

『そんなことされたら……泣いてしまいます……』

「泣く？」

『はい……嬉しくて、泣いてしまいます……』

既に涙を浮かべ、しかし、それでも嬉しそうに笑っていた。
とても儚げで、純粋で、無垢で、それでも普通の少女と変わらない笑顔だった。

「では、俺と一緒にここから出よう。この———図書館から。」

『はい……』

式と共に、近馬は先程通った出入口に向かう。
式が地縛霊から解放されていれば、出ることが出来るからだ。

『……手を握っても良いですか？』

「もちろんだ。」

『暖かい……』

もちろん、握る真似事だが、それでも式は嬉しそうだった。

「ほら、出口だぞ。」

『私、今とても幸せな気分です。』

「そうか、良かったな。俺は式が悪霊にならなくて良かったぞ。」

「近馬、ご苦労だったな。後は俺様の仕事だ。ほら、早く出てこいよ。」

近馬は外に出ると同時に、七士に引っ張り出されて転んだ。
続いて七士は式のことも引っ張り出した。
真似事でなく、まるで実体が在るかのような扱いで。

『え？き、きゃあ！』

「どうやら地縛霊からは解放されたみたいだな。んんん？ほぅ、なるほどねぇ。近馬よう、てめぇは本当にお人好しだなあ。このお嬢さんがてめぇに、ねぇ。」

くくく、と嫌な笑い声を出しながら七士が近馬に言い放った。
近馬は疑問符を浮かべた表情で式の方を見た。
式は目のやり場に困っている感じだった。

「まったく、面倒だな。地縛霊からは解放されたらしいが、近馬に”取り憑いている”ぜ。まあ、憑依とは違うから問題は特に無いがな。近馬、てめぇが責任持って面倒見ろよな。」

「そんな、捨て犬を飼うように言うなよ、緋鳥ん。面倒見るって何をするんだ？」

「何ってそりゃあ……悪霊にならないようにだよ。後は出来るだけ早く成仏させてやれよ。じゃあ、またな。」

それだけを言って七士は帰ってしまった。
自分勝手、身勝手、手前勝手、どれも意味は同じだが全部当てはまる、それが緋鳥七士だ。
それでも、やるべき事はやるのだが。

『近馬さん、ごめんなさい。本来なら成仏すべきなのに……』

「そんなこと気にしなくていいぞ。」

『近馬さん、優しいですね。私、少し積極的になろうと思います。』

「し、式？」

唇を重ねる真似事をしながら式はこう言った。

『どうやら私、近馬さんに惚れてしまいました……』

第一章　◇八頁◇

「ひ、ひ、ひ、柊先輩！な、何をしているんですか！そりゃあ、今回の件については柊先輩に終始任せてしまいましたが、それでもそのご褒美は羨ましいです！恨めしいです！こうなったら自分が幽霊と化して柊先輩を呪ってやります！」

廃墟から出てきた冷が、今にも襲い掛かりそうな勢いで言い放った。

「冷後輩、落ち着け！ちゅーしたように見えるだけで感触は無いんだからな！」

『近馬さんの唇、柔らかいですね……』

「お、おい、式―――」

「ほらあああ！こうなったら……自分が柊先輩とちゅーして、間接的にでもその娘の唇を奪います！」

「冷や麦、阿呆な事を言っていないで早く帰るぞ。」

近馬に本当に向かっていこうとする冷の襟首を掴みながら、いつの間にか戻って来た宵太が言った。

「み、御柳先輩、放してください！自分もご褒美が欲しいです！」

「僕たちはサボっていたんだから仕方ないだろ。それよりも、僕はもう寝たいんだ。だから早く帰るぞ。」

とても眠たそうに欠伸をしながら宵太は言う。
冷も落ち着きを取り戻し、渋々と頷いた。
「宵太ん、助かったぞ。ありがとうな。」
「もし、依奈が見ていたら泣き出すけれどな……」
「ん？何か言ったか？」
「いや、なんでもないよ。それよりも、これ。」
すると、宵太は手に持っていた紙を近馬に渡した。
随分と汚れていて、書いてある字も読めない程だった。
「宵太ん、これはなんだ？」
「あの廃墟の周りを探索している時に見つけた紙だ。かなり古いものだし、汚れているけれど、一部だけは読めた。」
示された場所を見るとこう書かれていた。
”――――式――――ごめん――――”
「僕の推測だけれど、これは、ろり式に会いに来るはずだった人の手紙だよ。」
『あの……”ろり式”とは？』
「ん？ああ、キミのあだ名だよ。勝手に付けさせてもらったけれど

嫌かな？」
まるで、ロリ度を求めるような公式の名称みたいだ。
いったい、何を足して、何を引いて、何を掛けて、何を割るのだろうか……
『いえ、気に入りましたよ。ろり式、可愛らしいじゃないですか。』
「御柳先輩のセンスは凄いですね。自分も初めてあだ名で呼ばれた時も驚きましたよ。」
少し皮肉混じりに冷が言った。
それについて宵太は何か言おうとしたが、話を戻すのを優先した。
「で、おそらく、ろり式が自殺したことを知ったその人が、敷地内に埋めたんだろう。それを僕が見つけたってことだ。」
『あの……ありがとうございます。私、その人に裏切られたのだとずっと思っていたので……これで、少しは気が晴れました。』
「僕たちは、お礼を言われるような事をしたわけじゃないから。」
”お礼を言われるような事をしたわけじゃない”
宵太の言う通りだ。
これらは全て、幽霊を成仏させようとしたこと。
式の為と言っても、それは偽善でしかないのだ。
悪霊になる可能性を持つ霊を事前に成仏させる、これが七士の仕事で、宵太たちが手伝う仕事なのである。
「柊先輩、そういえば、ろりちゃんはどうして一緒にいるんですか

？」

廃墟を後にして、三人と一霊で帰る途中に冷が、宵太の付けたあだ名に便乗するような形で聞いた。

「どうやら式は、俺に取り憑いたらしいぞ。」

「近馬、それって平気なのか？」

「緋鳥んは憑依とは違うから問題無いって言っていたぞ。」

「いや、そうじゃなくて。生活の事だよ。普通の人には見えないから、そこは問題無いだろうけれど、僕らには見えているんだよ？つまり、依奈がどういう反応をするかだな。」

「何故、綾杉が関係してくるんだ？説明が必要なのは、木薙も美恵留んも同じ事だろう？」

「わからないなら身を持って知れば良いよ。あと、風呂とかトイレにまで入られたら困るんじゃないか？」

宵太が式の方を見ながら言うと、あたふたしながらも式が答えた。

『私だってその時は少し離れますよ……取り憑いているといっても、ぴったり離れないわけではないですから。』

「幽霊とはいえ、女の子と同棲生活か。俺もいろいろと覚悟しないとな。」

「自分なら願ってもない事ですよ。代わってほしいぐらいです！ろ

りちゃんどうですか？自分のところに来ないですか？」

『嫌ですよ、だって……私は、近馬さんに惚れてしまいましたから……』

さすがに今回は唇を重ねる真似事は無かったが、それでも見ている方が照れてしまうぐらいの台詞だ。

「そんな台詞、僕も芙和に言われたいな……」

「自分は先ず相手がいないですよ……」

現実を知っている二人は落ち込んでしまった。
彼女がいても言ってくれないであろう宵太。
彼女がそもそもいない冷。
そして、一人と一霊のロリ少女から迫られる近馬。
落ち込むのも無理はない。

「では、自分はここで。また明日、よろしくお願いします。」

家が別方向の冷と別れ、宵太と近馬、そして式だけになった。
すると、近馬が不意に呟いた。

「俺たちはあとどのくらい手伝えば許されるのかな？」

「それは、わからないよ。僕たちがやったことは、そもそも許されることかどうかもわからないし。」

『あの……どういうことですか？”許される”って何にですか？』

話している内容がわからなかった式は、思わず二人に聞いてしまった。

「それは……答えられない。いつか話すかもしれないけれど、今は話せない。だから、今後この話題を式から出すのもだめだぞ。」

「この話は、僕たちの罪と罰みたいなものだよ。今回だって、ろり式を救ったわけでも、助けたわけでもないんだ。むしろ、”僕たちが救われたい、助かりたい”ってだけなんだよ。」

『よく、わからないですが、私もこれ以上聞かないようにします。それよりも、近馬さん。近馬さんのご家族は？』

重たい雰囲気に耐え兼ね、式は話題を変えた。
それに伴い、宵太と近馬も雰囲気を変えるように努めた。

「俺以外の家族は海外にいるぞ。といっても、俺には兄弟がいないから両親だけな。」

『では、一人暮らしなのですか？』

「そうだぞ。住んでいるのは実家だから、家賃とかはないし、生活費は貰っているから苦労は無いけれどな。」

「だから、みんなで近馬の家に集まったりするんだよな。」

『なんだか、楽しみです。楽しくて私、成仏しちゃうかも。』

式は自虐気味に冗談を言いながら、くすくすと小さく笑った。

～後日談～　その一

～御柳家の場合～

「宵兄、おかえりー！はい、おかえりの――――」

「妹ちゃん、させないぞ！」

宵太が帰ると、例の如く黄泉が抱き着こうとしたが、夜凪によって阻止された。

「弟くん、ご飯も風呂も用意してあるからの。どちらを先に済ます？」

「それとも……よみにするー？」

「僕はお風呂に入って寝るよ。なんだか今日は疲れたからね。」

宵太は怠そうに歩きながら、着替えを取りに部屋に向かっていった。

「宵兄がよみを無視したー……よみ、悲しいなー。」

「弟くんは疲れているんじゃよ。儂が一緒におるから安心せい。」

「じゃあ、今日は夜凪ちゃんと寝ても良いー？」

「もちろんじゃよ！」

まったく、仲の良い姉妹だ。
そして、自分の部屋に戻った宵太はというと……

「くー……」

かなり疲れていたらしく、眠ってしまっていた。

〜近馬と式の場合〜

『わはー！ここが近馬さんのご自宅ですか。綺麗なお家ですね。』

「そうか？まあ、俺一人しか住んでいないからな。気が付いた時に掃除していれば、散らかることはほぼ無いぞ。」

近馬が風呂に入っている間に、式は家中を見て周り感動していた。
まあ、無理もないだろう。
正確な時間はわからないが、ずっとあの廃墟に一人で、ずっと独りだったのだから。

『これからは、私も一緒ですからね。といっても、何も出来ないですけれど……』

自虐的に笑いながら式は明るく言った。

「まあ、幽霊だからな。でも、気にするな。掃除なら綾杉がたまに来て手伝ってくれるからな。」

『綾杉…さん？その方はどのようなお人なのですか？』

「友達だぞ。他にも木薙や美恵留んも紹介しなきゃだな。明日、学

校に行ったら紹介するぞ。」

『学校……わはー！学校は楽しみですね！私、勉強は大好きなんです。』

ふわふわと浮きながら、式は満面の笑みを浮かべていた。
廃墟で初めて見た時とは比べものにならない程、明るくなっている。
ちなみに、ここまで早く式が心を開いているのは、単に近馬が相手だったからというわけではない。
実は七士が事前に、少しずつ人間に慣れさせていたのだ。
そうでなければ、人で非ず者が人間とこんなにも早くに打ち解けるのは不可能だ。
それが、たとえ近馬でも。

「もう今日は遅いし、早く寝ないとな。そういえば、式は眠るのか？」

『幽霊だって眠りますよ。あの……近馬さんの隣で寝ても良いでしょうか？』

勇気を出して聞いたのだろう。
耳まで真っ赤になっていた。

「まあ、別にいいんだが……狭くても良いのか？」

『大丈夫ですよ。それに、私は幽霊ですから近馬さんの邪魔にもなりません。隣にいさせてもらうだけで良いのです……』

「……まあ、いっか。」

特に気にしない様子で近馬は式と一緒に寝室へ向かっていった。

～冷と美恵留の場合～

「よくよく考えたら、今回の仕事に自分は必要無かったんじゃないか？……まあ、今更気にしても仕方ないな。」

欠伸混じりに独り言を呟き、自室のベットに倒れ込んだ。

すると、携帯の着信音が鳴った。

メールだ。

〔おかえり、お疲れのようだねぇ。今からあたしの部屋においで！〕

それは隣に住む美恵留からだった。

冷と美恵留の部屋は窓を挟んですぐ隣だ。

もともとは、美恵留は別の部屋だったのだが、いつの間にかそこになっていた。

冷は窓を開けて、美恵留の部屋に跳び移った。

「ようこそ、痴漢くん。それとも変質者さんかな？」

「自分、眠いんだけれど。何か用なの？」

「そんな不機嫌にならないでよ、冷。そんなに、今の挨拶が気に入らなかったのかい？」

「いや、別に痴漢の方は良いけれどさ。変質者に成り下がった覚えは無いから。」

「冷、良いことを教えてあげるよ。痴漢は冤罪なんだよ。」

「え、冤罪だと！そんな……全世界中の男性が怖くて電車に乗れなくなるじゃないか！」

「それぐらい、罪なことなのさ。まあ、冗談はこの辺にして、こっちにおいでよ。」

そう言うと、美恵留はベットに正座して手招きをした。
冷はそれに素直に従いベットに座る。
ぽんぽん、と自分の膝を叩きながら美恵留が言う。

「疲れている冷に、あたしからのサービスだよ。ひざ枕してあげる。」

「うわー、恥ずかしいことを平気でやるね。でも、美恵留の膝ってすごく柔らかくて自分好みだからお言葉に甘えさせて頂きます。」

「冷もなかなか恥ずかしい台詞を言うじゃないか。———ひゃあ！くすぐったいじゃないか！」

「そんなこと言われても……目の前に綺麗な生足を出されたら、くすぐりたくもなるさ。」

美恵留の今の服は寝易いように、Tシャツ一枚にショートパンツだ。
美恵留らしいラフな服装だ。

「そんなことを、さらっと言うな！あたしだって少しは照れるじゃないか！」

「……」

「寝ちゃった…のか？まったく、仕方ないねぇ。このまま寝かせてやるか。」

冷の頭をひと撫でして、器用に膝をずらして枕を置き、布団を掛けてそのまま美恵留も一緒に寝ることにした。

〜芙和の場合〜

芙和は宵太宛にメールを打っていた。

〔お疲れ様。もう寝ちゃっているかな？明日も宵太に会えるのを楽しみにしているからね。〕

「送信、と。よし、私も寝ようかな。明日のお弁当は何にしようかな……宵太の好きな卵焼きは絶対入れなきゃなあ。」

そんなことを呟きながら、芙和は瞼を閉じて眠った。

〜依奈の場合〜

「ひいっ！た、た、体重が増えたです！はあ……もう、学校でおやつは食べません！」

一人で何かを決意していた。

ちなみに、増えたといっても大して変化は無いのだが……

〜天の場合〜

「お、今日は随分と月が綺麗じゃないか。これは良いことがありそ

うだなあ。それにしても、今日の芙和ちゃんは可愛かったなあ。ロリコン趣味の無いぼくでも思うぐらいだったよ。でも――――」

以下略。

独り言でも長く喋るのであった。

〜斗乃の場合〜

パチン。

「御柳宵太はここの手が未だ甘いな。もう少し全体を見れるようになれば、ボクも苦戦しそうだな。」

一人で宵太との対局を思い出しながら、ニッコリと楽しそうに月明かりを頼りに駒を動かしていた。

パチン。

小気味良い音が夜の静けさによく響いていた。

「ここも甘いな。」

〜七士の場合〜

「……」

七士は既に寝ていました。

第二章　◆一頁◆

ここは私立太刀守高校の屋上。
学校の屋上なんてものは、大概の場合は閉鎖されているし、この太刀守高校も一年前までは閉鎖されていた。
しかし、古くなって壊れていた南京錠を偶然見つけた宵太が、新しいものに取り替え、自分たちだけが出入りできるようにしたのだ。
その屋上に、近馬と依奈、そして幽霊の式がいた。

「――――と、いうわけで、仕事の結果が今の状況だぞ。」

どうやら式について説明していたらしい。

「柊くんが幽霊とはいえ女の子と同棲ですか……羨ましいですね。」

「綾杉も冷後輩と同じことを言うんだな。そんなに、式と暮らしたいのか？」

「ち、違いますよ！冷くんと同じにしないでください！うちは柊くんと暮らしたいんですから！」

「あれ、そうなのか？でも、どうして俺なんかと暮らしたいんだ？」

「あうぅ……それは……」

まさかの切り返しに言葉に詰まってしまった依奈。
柊近馬という男は、なかなかどうして鈍感な男なのだ。

『あなたが綾杉依奈さんですか。私は、零六式と申します。これからは、よろしくお世話になります。』

見兼ねた式が、ぺこりと頭を下げ、一礼をしながら丁寧に挨拶をした。

「よ、よろしくお願いしますです。」

それに対し依奈も慌てて一礼を返した。

すると、近馬の携帯が鳴り出した。

宵太からの電話だった。

「はろはろー？宵太ん、どうした？――あはは、わかったよ。早く行くから怒らないでくれって。――了解だ。じゃあねん。」

通話を終えると、近馬は依奈の手を握って走り出した。

「ち、近馬くん、どうしたんですか？いきなり握られたら、びっくりですよ！」

「宵太んが『会議を始められないから、早く依奈と来い！』って言うからさ。だから急がないとな。」

「近馬くん！こ、転びそうです！」

「ん？仕方ないな。綾杉、スカートをちゃんと押さえてろよ。」

「え？どういう――きゃ！」

近馬はそう言うと、依奈を抱えて走り出した。
しかも、お姫様抱っこで。
ちなみに、式は浮いているので余裕でついて来れている。
生徒会室は校舎の最上階に在るので、五分とかからずに着いた。

「ふぅ……到着だぞ、綾杉。大丈夫か？」

全速力で走ってきたのにも関わらずに近馬は、いつもと変わらない様子で腕の中にいる依奈に聞いた。

「だ、大丈夫ですけど、心臓がどきどきです……」

「ん？俺のか？まあ、走って来たから仕方ないさ。」

「……そうですね。」

依奈としては、自分の心臓のことを言っていたのだが、近馬には全く伝わっていなかった。
生徒会室の扉を開き中に入ると、既に宵太と芙和、そして冷と美恵留がいた。

「遅いぞ、近馬。早く会議を始めてくれないと、芙和が僕の命を狙い続けるんだ！」

「御柳くんが命を落とせば、狙われる心配も無くなりますよ。」

「……相変わらず、変わらずに依奈の声はするのに姿が見えないな。」

「うちは目の前にいます！今、目が合ったじゃないですか！」

「だから、宵太んの言葉に毎回反応するなよ、綾杉。ほら、こっちにおいで。」

いつものように、依奈を後ろから抱き上げた近馬は、自分の席に座り、自分の膝の上に依奈を乗せた。
すると、美恵留が近馬の後ろでふわふわと浮いている式を見ながら口を開いた。

「冷の言っていたことは本当らしいねぇ。柊も罪な奴だねぇ。綾杉ちゃんだけじゃなく、幽霊の零六ちゃんまでも、か。」

「なんで、綾杉と式を関連付けるんだ？なあ、綾杉はなんでかわかるか？」

「は、早く会議を始めましょうよ！昨日の続きの、部活予算案をまとめないとです！」

耳まで真っ赤にした依奈が、会議の始まりを促した。
近馬はわけがわからないという表情だったが、それに従うことにした。

「部活紹介も兼ねてやるということで、この企画は早めにやらないといけないんだが、競技内容はどうする？地味すぎては部活紹介にならないし、派手すぎては企画が通らないからな。」

「そうですよね。おそらく、自分以外の一年生は特待生でない限り部活には未だ所属していないはずです。ですから、各部活の紹介も出来て、更に予算争奪できる内容にしないと。」

「まあ、そうだねぇ。冷はあたしが生徒会に連れ込んだわけだからねぇ。競技内容は真剣勝負の格闘大会なんてどうかな？」

「却下だろ。運動部と文化部で差が出るだろうし、何よりも危ないって。僕としては文武両道ってことで学力試験が良いと思う。そうすれば一石三鳥になるぜ！」

「宵太って馬鹿なんだね。それだと地味すぎるでしょう？近馬くんの話を聞いていなかったの？宵太って馬鹿なんだね。」

「二回も言うこと無いだろ！僕は傷付いたぞ！」

「何？その傷を癒してほしいとでも言うの？私にお願いをする時は、『わん！』と吠えてからにしてよね。」

「わん！」

「……宵太って馬鹿なんだね。」

「騙されたー！」

いつも通りの流れで宵太と芙和が遊び始めてしまったが、そんなことは気にせずに他の四人で話を進めていた。

「うちが思うに、評価をするのは一年生及び先生方なので、例年通りに部活紹介をして評価を参考に予算提示。それに納得しない部活同士で争奪というのはどうですか？」

「依奈先輩、競技内容はどうするんですか？その方法にしたって結局は公平なものを考えないと。」

「さっき御柳くんが言っていた学力試験の結果で良いと思うんです。文武両道、ですよ。」

「なるほどな。部活紹介は予算が掛かっているから例年より派手で良いものになるだろうし、学力試験も予算の為に良い結果を出そうとするってことか。俺は良いと思うぞ。」

「あたしも賛成だよ。さっきは格闘大会なんて言ったけれど、そんなのは無理だってわかっているよ。実際にやったら、あたしが乱入しちゃうもんね。」

「そういう意味でかよ！美恵留はもう少し、いや、もっと女の子らしくなれ！」

「冷に言われたくないよ。あんたはもっと変態になりな！」

「言われなくてもなるさ！」

なんとも妙な言い合いだった。
そんな異様な光景を見ていた式が近馬に質問した。

『あの……会議の続きはやらなくて良いのでしょうか？』

「まあ、ほぼ決まったし、後は俺と綾杉でまとめれば大丈夫だぞ。それに、ああいうのを見ているのが好きなんだ。」

宵太と芙和、冷と美恵留の様子を見ながら近馬が嬉しそうに、そう答えた。

第二章　◇二頁◇

「柊くん、一応うちなりに考えたのですが、これでどうです？」
依奈が企画の概要をまとめた資料を近馬に渡すと、近馬は依奈の頭を撫でながら答えた。

「うん、良いと思うぞ。さすがは綾杉だな。」

「えへへ、褒めてもらえると嬉しいです。それでですね、この企画って部活紹介や学力試験などの恒例行事の中で行うので、当日までは内密にした方が良いと思うのです。その方が純粋に熱意や、やる気などがわかるので。」

「そうだな、そうしよう。部活の予算目当てで何かを向上させるなんて考え方が不純すぎだよな。俺の考えはまだ未熟だったな、反省だ。やっぱり、綾杉がいてくれて助かるぞ。」

そう言われると依奈は満足そうな表情で、近馬に寄り掛かるように座り直した。

（依奈さんが羨ましい……私はそんなことできないもんな……）

その後ろで式はそんなことを思っていた———
ようやく、企画の目処が立ったので会議が終わった。
宵太と芙和、冷と美恵留の戯れ合いも終わったようで、六人と一霊で雑談を始めた。
話題はやはりというか、式についてだ。

「ねえ、宵太？零六さんは幽霊なんだよね？それなのにどうして記憶が蓄積されているの？」

「それは、あれだよ。地縛霊の時はその土地を、今現在は近馬の身体を媒体にして、ってことじゃないのかな？」

「『じゃないのかな？』って曖昧な答えだね。そんな無知で無恥な宵太に鞭を振るって、鞭打ち症にしてあげる。」

「芙和、それって駄洒落か？全く面白くないよ。」

「これはお洒落だよ、言葉のお洒落。なんだか、妖艶な響きだと思わない？」

「どこら辺がだ？」

「自分にはわかりますよ、木薙先輩！言葉の中に”むち”という響きが計四回もあるところですよね？むちむちむちむち……なんだか、とても良い響きじゃないですか！」

宵太が頭に疑問符を浮かべていると、冷が身を乗り出しながら興奮気味に言った。

「……私はそんな変態みたいな意味で言ったわけじゃないのだけれどね。」

「大丈夫ですよ、木薙先輩。人は少なからず変態なんですから。人間が変態だからこそ、変態という言葉が生まれたのですよ！」

「冷後輩、暴走しすぎだぞ。木薙を変態呼ばわりし続けていると、宵太んは内心で喜んでいるかもしれないが、綾杉が許さないだろうからな。」

「それは困ります！では、御柳先輩と二人だけで、後日この話題で盛り上がりましょう。」

「いや、僕はそんなこと考えていないからな！それよりも、話を戻せよ。脱線しすぎだ。」

宵太が仕切直し、再び式の話題となった。

「式ちゃんは柊くんのことが、その……好きだから取り憑いたんですよね？」

『はい、そうですよ。新しい心残りが出来たので、成仏することが出来なくなってしまったのです。同時に、心残りの対象が変わったので、幽霊としての分類も変わりました。』

「ちなみに、今は何です？」

『背後霊、だと思います。まるで、ストーカーみたいですよね。』

くすくすと、やはり自虐的に言った。
式はどうも自虐的に話す傾向がある。
といっても、後ろ向きな自虐ではないので周りの雰囲気が乱れることは無いのだが。

「ろりちゃん、ストーカーなら自分にしてほしいです。自分は喜んでそれに応えますよ！」

「冷は少し黙りな。そうだねぇ、”脳梗塞”にでもなっていたら良いんじゃない？」

「天里、それだと冷や麦が死んじゃうじゃないか！黙る以前に永眠だぞ！」

「いやいや、御柳先輩、落ち着いてください。」

宵太を制止した冷がそのまま言葉を続けた。

「”脳拘束”なんて、かなり高レベルな緊縛プレイじゃないですか。自分は是非ともやっていただきたいですよ。」

「”脳拘束”じゃない！”脳梗塞”だよ！”脳拘束”だとしても、それをやってほしいだなんて冷や麦は変態すぎる！」

冷はかなり間違った勘違いをしていた。

もし、”脳拘束”なんてものがあるのなら、どうやるのだろうか？

「またしても褒めていただき光栄だ！御柳先輩は自分を褒め殺す気ですか？どうせなら拷問していただきたいな。」

「僕には冷や麦を止めることは出来ないのか……」

「御柳、あたしに任せなよ。冷を黙らせるのは得意だからねぇ。」

「頼むから暴力は無しにしてくれよ、天里。」

「わかっているよ。あたしが冷の頭を撫でさえすれば、この子は静

かになるんだよ。」

「そんなことが――」

「ごろにゃあん。」

「有り得るのかよ！」

まるで猫のようになった冷を見て、宵太は思わず漫才のようなツッコミをしてしまった。

これは美恵留がやるからこそ効果がある行為なのだ。

幼い頃から培われたものなのだろう。

すると、それを見ていた式がくすくすと笑いながら言った。

『みなさん、とても仲が良いんですね……私、みなさんが羨ましいです。私もこんな風に話せたらな、って思います。』

「式ちゃんも、そのうち溶け込めますよ。先ずはうちがお話相手になりますよ！」

依奈はそう言うと、式の手を優しく”握った”。

『……あれ？依奈さん、どうして私の手を”握れる”んですか？』

「綾杉は緋鳥んと同じで幽霊に触れられるんだ。理由はよくわからないけれどな。」

式の疑問を近馬が代わりに答えた。

それを聞くと式は流れることの無い涙を目に浮かべながら、嗚咽を漏らし始めた。

『う…れ…しい……嬉しいです……』

「えっと……うちはどうすれば良いです？どうして式ちゃんは泣いているんです？」

「綾杉、自分が思ったことをやれば良いさ。」

戸惑う依奈に近馬がそう言うと、依奈は少し思考した末に式をそっと優しく抱きしめた。

『人がこんなにも温かいなんて……触れることがこんなにも嬉しいなんて……死んでから気付くなんて遅いですよね。』

「遅いとか早いとかじゃないぞ。式自信が気付いたことが大事だと俺は思う。」

「うちもそう思いますよ。式ちゃんだってこれから学べるんですから。」

しばらく、式の涙が収まるまで依奈は抱きしめ続けた。
そんな二人の姿を見て、不謹慎なことを呟く人間が一人いた。

「女の子同士が抱き合う姿もなかなか……いや、でも、やっぱり柊先輩と関わっている時の方が……」

言うまでもなく比名麦冷だ。
その言葉を聞き取れたのが美恵留だけなのは、幸か不幸かどちらなのだろうか。
どちらにしても、後で何かされることは間違いないだろう。

第二章　◆三頁◆

――――ここで少し、零六式について話しておこう。
よくよく考えてみればおかしな話なのだ。
名前も顔も知らない相手から告白され、それを待っていても来なかったからという理由で自殺。
はたして、”そんなこと”が理由になるのだろうか？
実際に理由になってしまっているのだから、答えはわかりきっているのだが、それでも疑問だ。
つまり、式にとってはそれでも理由になるものだった、ということなのだ。
それでは何故、式にとってそれが自殺の理由になったのか、それを話しておこうと思う。

式はごく普通の、ごく一般的な、ごくありふれた家庭に生まれた。
そんな普通で一般的でありふれているはずの式には、一つだけ大きな問題があった。
それは、”他人からの異常な拒絶”だ。
ここでの”他人”とは、”血の繋がりの無い人々”ではなく、”自分以外の、まさしく他人”なのだ。
物心が付いた頃には式自身も理解していた。
しかし、式が理解していたのは、”これが当たり前なんだ、私だけが特別なわけじゃない”と、歪んでしまった理解だった。
少なくとも育児放棄をされているわけではないのだが、それでも式はずっと独りだった。
孤独であるが故に本を読みあさり、本から人との繋がりを見出だそうとしていた。
学校にも通い、そして学校を好きになった。

式自身には、やはり関わろうとしないが、目の前で変わっていく光景がとても好きだった。
生徒同士や教師同士、または生徒と教師の関わりを見ているだけで、式は満足していた。
もはや慣れきってしまっていたのだ。
自分自身に無関心の世界に。

その考えが災いしてしまったのが、言うまでもなく中学卒業直後。
式は告白されたのだ。
いや、告白されてしまったのだ。
あれ程無関心にされ続けていた世界に、関わられてしまった。
式はその関わりを素直に喜び、相手のことを待っていた。
待ち続けていた。
それなのに相手は来なかった。
来れなかった理由はあるだろうが、そんなものは式には関係が無い。
”裏切り”。
式はそう感じた。
限りない絶望感、虚無感、拒絶感、堕落感、果てしない程の負の感情が溢れた。

―――関わりを断とう。

式はそれだけを思うと、迷わずに自殺した。
しかし、それでも式の思いや想いや念い、それらが図書館跡の廃墟へと溜まり、留まり、地縛霊として存在していた。

「成仏できずにここに居憑いている幽霊ってのは、てめぇか？へぇ、なるほどねぇ。お嬢さんも随分と苦労していたみたいだな。とりあえず俺様と話でもするか？」

仕事でやってきた七士は、廃墟に入ると誠実な神主そのものの表情で式に話しかけた。
誠実な神主そのものなのは表情だけなのだが。
『嫌です……来ないでください……私は誰とも関わりたくないのです……あなたも私を消しに来たのでしょう？』
式は完全に拒絶していた。
おそらく、七士が来る以前にも、式を成仏させようとする人物が来ていたということだろう。
「あん？何を言っているんだ？俺様がてめぇを成仏させる？ふざけたことを言うんじゃねぇよ。俺様はてめぇと話をしに来ただけだ。そんなめんどくせぇことは俺様はやらねぇよ。」
『で、でも……私は幽霊で……成仏させるべきだって……この前の人は言っていました……』
「知るかよ。俺様は俺様のやり方があるんだ。幽霊と成仏をイコールなんかで結ぶのは馬鹿げた考えだぜ。そんなことはどうでも良いから、俺様と話せ。」
『で、でも――――』
「うるせぇなあ。俺様が話せって言ったんだから、俺様と話せば良いんだよ。わかったなら頷け。それとも文句でもあるのか？」
先程とは打って変わって、誠実さの欠片も無いような、そんな悪魔的微笑を浮かべて言った。
そんな七士の言葉に式は頷くしかなかった。

そして、式は七士に自分の全てを話した。
警戒心はあったのだが、それを上回る程の七士の包容力に圧倒されていた。

「なるほどな、それだけわかれば十分だ。よし、そのうちここに三人の人間を連れてくる。ただし、最初は警戒を忘れるなよ。俺様が連れてくる奴らと違うのを受け入れたら大変だ。先ずは疑え、そして名前を聞け。」

『名前……ですか？』

「そうだ。名前を聞けばおそらくわかるだろう。糞真面目な変人と、無気力な阿呆と、馬鹿正直な変態が来るからな。」

『それだけを聞くと、嫌なイメージしかないですよ……』

「それなりにまともな奴らだから安心しろ。俺様がてめぇをここから出してやる手助けをしてやるから覚悟しておけ。有無を言わせねぇ、選択権も無ぇ。俺様に従えばそれで良いんだ、わかったか？」

『え……あ……はい。』

「よし、それで良い。また会う時までに悪霊になったりするんじゃねぇぞ。そうなった時が、てめぇを消す時だと思ってろ。」

七士はそれだけを言うと廃墟から立ち去った。
式はしばらく七士の行った方向を見つめていた。

『なんだか……不思議な人……信じても大丈夫なのかな？』

式の心配はすぐに消えた。
何故なら七士が去った数時間後には、近馬と外に出ていたのだから。
つまり、七士は仕事を頼みに行く直前に式との距離を縮め、やり易くしていたということだ。
そうでなくては、いくら近馬だとしてもあんなに早くは打ち解けられないのだ。
七士の予定通りに事は運び、そして見事に収まった。
しかし、この事は誰も知らないし、誰も知る必要が無い。
式の生い立ちを知ったところで何かが変わるわけでもないし、七士の仕事ぶりを知ったところで何も変わらないからだ。
そう、いつも通りで良いのだ。
知る必要の無いことは、いずれ知るその時まで知らないままで良い。
今現在、笑っていられるのなら知る必要が無いのだ――――

『依奈さん、もう大丈夫ですよ。ありがとうございました。』

「うちで良ければいつでもどうぞ。」

「依奈もちょうど人肌が恋しいしな。」

「御柳くんは黙っていてください！」

「依奈、安心して。私が抱きしめてあげるからね。宵太なんて放っておいてさ。」

「僕も人肌が恋しいんだけれどね。芙和に抱きしめてほしいな。」

「宵太には黄泉ちゃんがいるでしょう？家に帰って好きなだけ抱きしめてもらいなさい。」

「僕は妹に抱きしめられて喜ぶようなシスコンじゃないからな！」

『私、今がとても幸せすぎて、思わず成仏してしまいそうです。』

式はくすくすと自虐気味に笑っていた。

第二章　◇四頁◇

「御柳先輩、自分が代わりに黄泉ちゃんに抱きしめてもらいたいです！是非代わってください！」

「その清々しさにいっそのこと承諾しそうになるのだけれど、絶対に嫌だからな！冷や麦からは犯罪的な匂いがする！」

「そんな、ひどいですよ。犯罪的だなんて言い過ぎです。自分はロリ少女をこれ以上ないくらいに可愛がるだけです！」

「その発言が犯罪的でないのなら、僕はこの世界で安心して生活できないな。」

「冷のことはあたしが思う存分抱きしめてあげるよ。ありがたいと思いな。」

「美恵留に抱きしめられたら、自分は昇天しちゃうぞ！」

「そうかそうか、嬉しいのか。じゃあ覚悟しなよ。蕩けるぐらい抱きしめてあげるからねぇ。」

「違う違う！嬉しくて昇天するわけじゃない！自分が死んじゃうってことだ！未だ『全国ロリ化計画』を達成していないというのに！」

『未練があるのなら私みたいになれるかもしれないですよ？保証は出来ませんが……』

「ろりちゃん、笑い事じゃないからね！美恵留は本気で危ないんだ！柊先輩、助けてください！」

「俺に振るなよ、冷後輩。俺から言えることは一つだ。”やるなら死なない程度に”、だな。」

「死刑宣告に近い言葉ですね！」

じりじりと部屋の角に追い詰められていく冷。
その目の前には釘バットを携えた美恵留。

「冷、おとなしくしな。無駄な抵抗は受け付けないよ。」

「美恵――――」

ぎゅっ。

「――――留、ってあれ？」

美恵留は釘バットを手放し、冷のことを優しく抱きしめた。
その意外な行動に冷はどうしていいかわからず、ただただ戸惑うだけだった。

「あむ。」

「ひゃうわあ！」

耳を甘噛みされた冷は、変な悲鳴をあげてしまった。
しかし、行動に違和感を感じたのか、美恵留の額に触れてみた。

「美恵留！すごい熱じゃないか！ずっと我慢していたのか？早く保健室に連れていかなきゃ！御柳先輩、まだ保健室って開いていますよね？」

「たぶんな。放課後といっても、今は部活も活発には動けないから五分五分って感じだけれど、まだ開いていると思う。」

「では、美恵留を連れていってきます！」

真剣な顔をした冷がそう言うと、美恵留を抱えて———

「ふにゃ！」

———潰された。

冷の小さい身体では、長身の美恵留を抱えきれなかった。

結果、宵太と近馬が一緒に抱えて保健室まで連れていった。

「すみません、まだ居ますか？」

保健室の前に着くと、冷がノックをしながら聞いた。

すると中から声が返ってきた。

「俺様はもう帰りたいから居ない。自分たちでどうにかしやがれ。」

「美恵留がすごい熱で———」

「なら、許す。早く入りな。」

「……失礼します。」

保健室に入ると、前日に会ったばかりの人間が不機嫌そうに冷たちを見ていた。
ただ、少し違うのは服装だ。
前日は神主のような正装をしていたが、今はスーツに白衣を羽織っている。
そう、緋鳥七士だ。
七士は私立太刀守高校の保健教務員でもあるのだ。

「美恵留が熱を出すなんて珍しいんじゃねぇか？何か心当たりとかはあるか？」

七士が軽く診察し、冷の方を見た。

「心当たりは……そういえば、昨日は布団を掛けずに寝ちゃったから、それで熱が出たのかも知れないです。」

「なんで、てめぇが美恵留の寝てる時の状況を知っているんだ？まさか、忍び込みやがったのか？冷なら有り得るな。」

「違いますよ、緋鳥先生。昨日は美恵留の隣で寝ていたんです。自分はいつの間にか寝ていたみたいで……」

「は？てめぇらって、そういう関係だったのか？」

「違いますよ、緋鳥先生。何もやっていないですから。自分と美恵留はただの幼なじみみたいな関係です。」

「俺様から見ればそうは見えねぇけれどな。まあ、とりあえずベットでしばらく寝ていれば良くなるだろ。あとはてめぇらでやってくれ。俺様は帰る。」

言いながら七士は荷物を片付けて、早々と帰っていった。

「近馬、とりあえず僕たちは生徒会室に戻ろうか。芙和と依奈とろり式を残したままだしな。」

「そうだな、美恵留んは冷後輩がいれば十分だろうし。式も長時間離れているのはつらいと言っていたしな。」

「それは、たぶん別の理由だと思うけれど……まあ、それでも待たせるよりは全然良いからな。冷や麦、あとは任せても平気か？」

「……あ、大丈夫ですよ。御柳先輩、柊先輩、ありがとうございました。」

宵太と近馬が生徒会室に戻り、保健室には冷と美恵留だけが残った。寝ている美恵留の頭を優しく撫でながら、冷が小さく呟いた。

「幼なじみって複雑だよ……」

その言葉に反応するかのように、美恵留がうっすらと目を開けた。

「むぅ……ん……あれ？冷？どうしてあたしは寝ているの？」

「美恵留が熱で倒れたんだよ。熱があるなら早く言えよな。」

「冷に言ったら冷が責任を感じちゃうでしょう？そんなこと、あたしには出来ないよ。」

熱の為か、いつもより優しい口調の美恵留が冷に優しく笑った。

それに応えるように、また頭を撫でる冷。

「気遣うなんて、らしくないな。美恵留はいつの間に優しさを覚えたんだ？」

「あたしも変わったってことだよ。気遣う優しさがあるのも当然じゃないか。」

「どうして？」

「冷のことが大切だからだよ。あたしにとって、掛け替えのない存在だからねぇ。」

「そんなこと言って……まだ熱があるんじゃないか？」

「どうだろうねぇ……確かめてくれるかい？」

「しかたないなあ。」

横になっている美恵留の額に、自分の額を当てようと冷が近づいていく。

二人の顔が徐々に近づいていく。

そして、お互いの顔が触れ合――――

ガラッ！

「美恵留ちゃん、熱は大丈夫ですか？そろそろ下校時刻なので帰らないとですよ。」

「歩くのがつらいなら宵太が送ってくれるみたい。背中に乗せてね。

」

「送っていくとは言ったが、そんな屈辱的なことは言っていないぞ！僕の背中に乗って良いのは芙和だけだ！」

「あれ？嬉しいことを聞いちゃったな。それなら今日は宵太の背中に乗せてもらおうっと。」

勢いよく扉が開いて、宵太たちが入ってきた。
その瞬間に美恵留が冷のことを突き飛ばしたので、冷は隣のベットに倒れている。
誤解されないように突き飛ばしたのだが、威力が強すぎたのか、冷は面白い姿勢になって倒れていた。

第二章　◆五頁◆

『美恵留さん、熱は下がりましたか？他に悪いところなどはありませんか？』

「大丈夫だよ、零六ちゃん。心配してくれてありがとうねぇ。あたしも歩いて帰れるから、御柳は木薙ちゃんと帰りなよ。」

「本当に大丈夫か？冷や麦だけだと少し心配なんだけれど。」

「御柳先輩、自分だって意識のある人間なら支えることが出来ますよ。」

「いや、体調が悪いことを良いことに天里を暗がりに連れ込んで……」

「み、御柳先輩！さすがにそこまでは――――」

「亡き者にしちゃいそうだからさ、って思ったんだけれど、冷や麦でもそこまでしないよな。」

「……そ、そうですよ！殺人なんて犯罪的行為はしませんよ！やるとしても軽くロリ少女で遊ぶくらいです！」

「『ロリ少女で』ってなんだよ！」

「口を滑らせてしまいました。」

「滑ってもそんな言葉は出ないよ！」

宵太と冷が話している内に、美恵留は帰る準備を終えていた。

「美恵留ちゃん、本当に大丈夫です？無理しないでください。」

「綾杉ちゃんもありがとうねぇ。あたしは大丈夫だから綾杉ちゃんは柊との時間を大切にしなさいよ。」

「ふぇ！なななな、何を言うんですか、美恵留ちゃん！そ、そんなの当たり前ですもん！って、違くて……あれ？違わないな……と、とにかく、お大事にです！」

「綾杉ちゃんは可愛いねぇ。柊、大事にしてあげなよ。」

顔を真っ赤にした依奈の頭を撫でながら、美恵留は少し離れた近馬に言った。

「『大事に』って、俺がいつ綾杉を乱暴に扱ったんだ？あ、あれか？今日、生徒会室に向かう時に綾杉をお姫様抱っこしたのが悪かったのか？」

「ひ、柊くん！そんな、みんなの前で……あ！でもでも、お姫様抱っこは嬉しかったですからね！」

「綾杉、どうした？態度がおかしいし赤くなっているし……まさか、綾杉も熱を出したのか？」

そう言いながら近馬は依奈のおでこに触れた。

「ひゃう！ひ、柊くん、いきなりはびっくりです……あ、うぅ。ふ、芙和あ。うちはどうすれば良いですかあ？」

「ぐっじょぶだよ、依奈！」

「そ、そんなあ……どきどきが限界ですもん……」

「熱はないみたいだな。綾杉、大丈夫か？」

「だ、大丈夫ですよ！かかかかか、帰りまひょうか！」

「あっはははは！『帰りまひょうか』だってさ！あはははは！依奈は何処の商人だよ！江戸時代か？あっはははは！」

「噛んじゃっただけですもん！御柳くんはいちいちむかつきますね！」

「依奈の反応が面白すぎるからな。特に近馬との関わりは。それにしても……『帰りまひょうか』って……まひょ……くっくっくっ……まひょうか……くっ……あっはははは！」

「宵太、笑いすぎでしょ。お仕置きね。」

ぺしっ。

「痛ッ。芙和に叩かれた……親父には会ったこともないのに……」

宵太は叩かれた頭を押さえながら、某機動戦士アニメの名台詞を改造して言った。

「宵太ん、それはリアルすぎて笑えないぞ。」

「あ、そうか。僕としたことがミスったな。」

『宵太さん、どういうことですか？』

「ろり式にはまだ話していなかったけれど、僕って父親と会ったことがないんだ。まあ、今更会ったとしても本物かわからないから気にしていないけれどさ。」

『ですが、やはり周りのみなさんは気にしてしまいますよね……私も聞いといて、どう反応して良いのかわからないですから。』

「近馬以外はまだ慣れないみたいだからな。まあ、仕方ないさ。」

「俺も慣れているわけではないけれどな。とりあえず、この雰囲気をどうにかしないとな。綾杉、大丈夫か？」

「柊くん……少しの間だけでも良いので、傍にいてもらえますか？」

「ん？あ……ああ、そうだな。わかった。綾杉が落ち着くまで良いぞ。」

「……ありがとうございます。」

依奈は近馬の腕をぎゅっと握ったまま俯いていた。

式は不思議そうに覗き込んだが、近馬が無言で制止したので依奈を後ろから抱きしめた。

「式ちゃんもありがとうです。」

依奈が触れられるということは、式からも触れることが出来る。
唯一と言っていい程の存在を大事にする為にこれを選んだのだろう。

「宵太……そういう話はしないでよ……悪いとは思いつつ……
…同情しちゃうでしょ……」

「芙和、ごめんね。そういうつもりじゃなかったんだよ。僕の方が
不謹慎だったよ。」

「宵太には私がいる。近馬くんがいる。依奈も比名麦くんも美恵留
さんもいるから……だから、そんな悲しいことは言わないでね？」

「そうだね……まったく芙和は可愛いなあ！」

「ちょ、宵太あ！」

芙和の優しさを嬉しく思った宵太は、耐え切れなくなって思わず抱
きしめた。
芙和は抵抗していたが、しばらくするとおとなしく抱きしめられて
いた。
照れながら抵抗しながらも、おとなしく抱きしめられているところ
辺りが、芙和の可愛いところだ。

「ふむぅ……御柳先輩と木薙先輩、柊先輩と依奈先輩とろりちゃ
ん。うん、なんだか羨ましい光景だな。自分もあんな感じを味わい
たいな。」

「それなら、こうしてあげるよ。」
冷が呟いていると、急に美恵留が後ろから抱きしめてきた。
「み、美恵留？また熱でも出てるのか？」
微妙に上擦った声で冷が美恵留に話しかけた。
すると、美恵留は冷の耳元で囁くように答えた。
「単にこうしてあげたくなっただけ……あたしじゃ嫌？」
「そんなわけないだろ！いや、でも……む、胸が……」
「まったく冷は……この変態め！」
「ぐえぇ！」
美恵留は抱きしめた腕をそのまま首を絞める形に変えた。
冷は強く絞められているわけではないのだが、そうであるかのような反応をしているのは、若干の照れ隠しも含まれているからだろう。
「あむ。」
「ひゃうわあ！」
腕を緩めて、またしても耳への甘噛み攻撃。
やはり、まだ熱があるのかもしれない。
「み、美恵留！今日は帰ったらおとなしく寝なさい！」

「冷があたしに命令とは生意気だねぇ。お仕置きしなきゃだねぇ。あむあむ。」

「うっひゃわあ！」

後ろからの攻撃に太刀打ちできずにされるがままの冷。
楽しそうに見えるのは気のせいではないだろう。

「おい、てめぇら……いい加減に帰りやがれよ。」

帰ったはずの七士がいつの間にか入口に立って、不機嫌そうにそう言った。

第二章　◇六頁◇

「あれ？七士先生は帰ったんじゃないんですか？」
宵太に抱きしめられていた芙和が、少し体を離しながら聞いた。
「帰ろうと思ったんだが、近馬と式に話をしておかねぇといけなくてな。今後に関わることだから断るなよ。といっても俺様に逆らえれば、の話だがな。」
にやにや笑いをしながら近馬の方を向く七士。
近馬の方は何も変わらぬ様子でいつものまま答えた。
「別に断る理由も無いからな、もちろん話を聞くぞ。宵太ん、そして木薙、そういうことだから綾杉をよろしくな。」
「任せとけ。寄り道程度の距離だから、そんなに畏まって言う程でもないしな。」
「依奈に欲情して宵太が襲い掛からないように、私が責任を持って送り届けるから安心して。いざとなったら必殺技まで出すから。」
「芙和の必殺技？かなり見てみたいな！」
「宵太程度の人間なら瞬きしている間に事は済んでいるからね。」
「なんだと！僕が見れないんじゃ意味が無いじゃないか！ちなみに、どんな必殺技なんだ？」

「目潰し。」

「瞬きしている間どころの話じゃないぞ！下手したら一生見えない、失明しちゃうじゃないか！」

「私がそんな下手なことをするわけないでしょう？確実に失明させるからね。」

「余計に不安だよ！」

抱きしめから解放された途端にこれだ。
いや、いつもより僅かにだが激しくなっている。
おそらく芙和の照れ隠しがいつもより強いからだろう。

「といっても、僕はロリコンではないから依奈に欲情することはまず無いから安心だな。小中学生に出す手は、僕には生えていないんだ。」

「うちは高校生、御柳くんと同い年だと何度言えばわかるんですか？そんなに御柳くんの記憶力がお粗末だとは、さすがのうちでも思っていませんでした。いくら御柳くんでも、小説を一冊読み終えるまでには登場人物の名前を覚え切るぐらいの記憶力はあると思っていましたが、それも過大評価だったみたいですね。御柳くんはきっとシリーズ全巻を読み終えても登場人物の女の子しか覚えられないんでしょうね。」

「それだったら、僕は女の子しか登場しない小説を読めば全員覚えられるんだな。」

「それはそれで、御柳くんの変態性が伺えますけれどね。」

「自分ならそういう小説を持っていますよ。女の子だけの恋愛小説。要するに女の子同士の恋愛小説ですね。」

変態という言葉に食いついてきた冷が、目を輝かせながら話に入ってきた。

「……ちなみに、冷や麦みたいのはどういう分類なんだ？」

「冷くんは存在自体が変態なので、今更変態かどうか話すのは無意味ですよ。」

呆れ顔で冷を指差しながら聞く宵太に、当たり前のことのように依奈が説明した。

「まあ、とりあえず僕がロリコンでないことを理解すればそれで良いんだ。」

「それなら宵太はシスコンなの？」

「だから僕はシスコンじゃない！どうして、そうまでして僕に特殊な性癖を持たせたがるんだ？」

「ほら、宵太ってキャラが弱いから。」

「そんな……僕って目立たないのか……」

わかり易い落ち込み方をした宵太の肩に軽く手を乗せながら、芙和が優しい口調で囁いた。

「だから宵太にキャラを強めてもらおうと思って。右手にレーザーガンでも付けてみる？」

「僕は何処の宇宙海賊だ！あんな肌にピッタリの服なんて着ないからな！」

「もし宵太がそんなキャラになったら私は全身をメタリ化しないといけなくなるね。」

「海外のメタルバンド信者になるのか？まあ、芙和の長くて綺麗な髪の毛なら素晴らしいヘッドバンギングを期待できるだろうけれどさ。」

「違うよ、私が言ったのはメタリ化。金属で覆うってことね。それと……さりげなく褒めるなー！恥ずかしいでしょ！」

芙和が打ち出した拳を手首を掴み止め、そのまま宵太は芙和と戯れ合い始めた。

「こいつらは相変わらずだな。まあ、いい。近馬と式、俺様の家に行くぞ。さっさとついてきな。」

「じゃあ綾杉、今日は一緒に帰れなくて悪いな。宵太んたちが落ち着いたら早めに帰るんだぞ。」

「わかりました。柊くん、また明日です！」

「おう、また明日な！」

「式ちゃん、そんなに固くならずに気楽についていって大丈夫ですよ。七士ちゃんは悪い人ではないですから。」

『そうですね。でも……改めて話があると言われると、少しは身構えてしまうのです。』

「式ちゃん、こっちに来て下さい。」

依奈が手招きをしながら言うと、式は素直にそれに従った。

ぎゅっ。

依奈はまた式を優しく抱きしめた。

その体勢のまま囁くように優しい口調で話し始めた。

「式ちゃんは独りじゃないですから、不安になった時は誰かを頼れば良いです。うちは抱きしめられるし、柊くんは心の支えになれます。さっきみたいに逆に抱きしめてもらうこともあると思います。そうやって繋がりを確かめ合えるんですから、ね？」

『……そうですね。少しは気を楽にして行けそうです。実は私はあの……緋鳥さんがどうも苦手みたいで……』

「七士ちゃんはそういう人です。苦手に思われやすいと言うよりは、苦手意識を植え付けている感じの人ですから。」

七士を苦手と思わないのは、この六人の中ではおそらく、近馬と依奈ぐらいだろう。

宵太たちも普通には接するが、やはりどこか苦手意識を持ちながらだ。

だから、式が苦手と感じるのも当然のこと。
この私立太刀守高校の全生徒から探しても、いや、教師含めて探しても苦手と思っていないのはやはり二人だけだろうし、他の人の方が苦手意識は強いはずだ。

「式、早く行くぞ。緋鳥んは待たせると不機嫌になるからな。それに、緋鳥んについていかないと、緋鳥んの家には辿り着けないしな。」

『そうなのですか？それは大変ですね。では、依奈さん、また明日お会いしましょう。』

「また明日です、式ちゃん。」

近馬と式が去った後に、依奈は少し考えていた。
七士が近馬と式だけを、わざわざ自分の家に連れていったからだ。
おそらく、式のことで先ずは当人たちだけに話すということなのだろう。
杞憂とわかっていても、それでも依奈は考えてしまう。

（式ちゃんが成仏しちゃうんじゃ……それ自体は良いことですけれど、友達の死期が近いなんて思いたくないです！）

「……駄洒落になっちゃいました。」

「依奈先輩、何が駄洒落なんですか？」

「な、なんでもないです！」

第二章　◆七頁◆

「どうした？近馬がいなくなって依奈が発作でも起こしたか？」

「どうやら、そのようですね、御柳先輩。自分としては胸に飛び込んできてほしいと密かに思っているのですが、なかなか思った通りにはなりませんね。」

「な、何を勝手に言っているんですか！うちは正常ですもん！」

「密かに思っている割には依奈本人を目の前にして堂々と言うんだな。」

「あれ？声に出しちゃっていましたか？」

「自覚していなかったのか！」

「ちょっ、うちを無視しないで下さいよ！」

宵太と冷が依奈を相手にしないまま、お決まりとも言えるやり取りをしていると、下校時刻を知らせる最終チャイムが鳴り響いた。壊れているのか、それとも元々そういうものなのか、不規則な不協和音のチャイムだ。

「宵太、比名麦くん、遊んでいないで帰るよ？」

「芙和、すぐに行くから先に行って校門で待っていてよ。」

「早く来ないと先に帰っちゃうからね。それと、依奈をいじめた罰として宵太にはお仕置きだからね。」

「御柳くんはお仕置きされても喜びそうですけれどね……」

「さすがに、それはないと思うけれど……否定し切れないなあ。」

芙和は言いながら、依奈と冷と美恵留を連れていった。

「先に帰るって言っても、芙和はいつまでも待っていてくれるんだよな……さて、と。」

宵太は保健室を見渡し、身近にあった注射器を手に取った。

そして、それを入口上部に設置し、扉から入った時にちょうど頭に落ちるように調節して、保健室から去っていった。

いわゆる、七士に向けての悪戯だ。

「これで、よし。いやー、わくわくするな！これだから悪戯はやめられない！」

そんな少し危険な悪戯を仕掛けた宵太は、満足気な表情で校門へと急いだ。

「———で、緋鳥ん。どうして俺と式だけなんだ？話があるのならみんなが一緒の方が良いんじゃないか？」

場所は移り、七士の先導で歩いていた近馬が疑問を投げかけた。

それに対して、七士は舌打ちをしながら面倒臭そうに答えた。

「ちっ、うるせぇなあ。俺様がてめぇと式だけを呼んだってことは、

二人にだけ話しておくってことなんだよ。他の奴らに話してもいまいち理解しねぇだろうからな。そんなのは時間の無駄、生きる無駄ってことだ。」

『ちなみに、どんなお話なのですか？』

式が問い掛けると、七士は足を止め振り返った。
振り向いた七士の顔を見て、式はひぃっと小さな悲鳴をあげて近馬の後ろに隠れた。

「あーあー、うるせぇうるせぇ。こんな道端で話せるんだったら、わざわざてめぇらを家に呼ぶわけねぇだろう？こんな会話ですら無駄なのに、これ以上俺様を苛々させるんじゃねぇよ。」

そう言う七士の顔は、にやにやと笑顔なのに、わかり易いぐらい不機嫌な顔だった。
そんな七士にただただついていくしか、近馬と式に選択肢が無かった。

”七士の家に向かうには七士についていくしかない”。

近馬はそう言っていたが、少々語弊がある。
正確には、”七士が感知し、認識している者、及び一度本人と共に訪れた者しか辿り着けない”だ。
つまり、近馬は辿り着けるが、今の式は辿り着けないということだ。
式は近馬に取り憑いている為、無理矢理に引き剥がされると両者共に危険なので、七士が連れなければならなかったのだ。
山道に乱暴に築かれた長い石段を登りきると立派な日本家屋がそこにはあった。

「着いたぜ。今日は随分と段数があったな。これは式がいるからか？幽霊が一緒の場合は多いのかもな……まあ、いい。存分に遠慮しながら早く入れ。」

七士が向かった部屋は二十畳もある広い和室だった。
家具類は皆無で、ただただ広い部屋だった。
その部屋の隅に寄り掛かって座る七士の前に二人は座った。

「くだらねぇ前置きとかは無しにするぜ。近馬、てめぇが式に取り憑かれた時点で”あいつ”から呼び出しだ。」

「だから俺と式だけなのか。やっと納得できた。むー、でも、”あいつ”に会うのは平気なのか？」

「まあ、大丈夫じゃねぇ？今日は機嫌が良さそうだったし。」

『あ、あの……先程から話に出てきている”あいつ”とは、どなたなのでしょうか？』

式の質問に、近馬が言いにくそうに口を開いた。

「うーむ……会った方が早いと思うぞ。」

曖昧な答えに式は疑問符をたっぷり浮かべていたが、黙って近馬の後をふわふわとついて行った。
辿り着いたのは妖しく妙なお札が入口に張り巡らされた、いかにも封印されている和風の部屋だった。
その部屋の重い戸を引くと、ぎしぎしと軋みながら開いた。
薄暗い十畳の部屋の中央に”そいつ”は縛り付けられた状態で居た。

『むか…く……かつ……つく…むかつく…む……く…おや？誰かと思ったら……誰だっけ？まあ、いいか。いらっしゃい。ん？あー、そうか。俺がキミを呼んだんだっけ。えーっと……誰だっけ？』

「名前なんて聞かなくても、話は出来るだろう？俺とこの娘に用があるんだよな？」

包帯とお札で埋め尽くされた”そいつ”の呼び名は網綱（あみつな）、幽霊だ。近馬が式のことを名前で呼ばずに、”この娘”と呼んだのには理由がある。

この網綱こそ、”名前を教えると危ない幽霊”なのだ。

それ以外にもいろいろと曰く付きなのだが、ここでは説明仕切れないのでまた後日に。

『話？あー、話ね……ひっ…ひっ…ひっ……キミとそっちの幽霊ちゃんにね……取り憑いたんだってね…無闇にやる事じゃない…キミでなければ今頃…ふひっ……』

「つまり忠告の為にわざわざ呼んだのか？ここの家主に怒られちゃうぞ？」

『俺がそんなくだらないことで嫌いな人間を呼ぶわけない……ふひっ…ひっ…嫌いだ…あー、嫌いだよ…人間なんて嫌い…キミね…その幽霊ちゃんといると……寿命が短くなっちゃうよ……』

その網綱の言葉に反応したのは、言われた本人である近馬でなく、式の方だった。

『ど、どういうことですか？この方の寿命が減るって……わ、私

が一緒にいるからですか？』

「落ち着けって！そんな単純な理由だったら、取り憑いた時に聞かされているはずだ！あの人はそんな適当な人じゃないんだから！」

『で、でも、私が原因なら結局――――』

「黙れ！」

近馬の鋭い一声が静寂に響く。

式はどうしたら良いのかわからず、泣きそうな顔で近馬を見つめていた。

「もう少し……ちゃんと話を聞いてからにしよう。」

第二章　◇八頁◇

『ふひっ…ひっ…ひっ……なになに？キミたち信じちゃったの？全部嘘だよ…最初から最後まで嘘だよ…嘘しか言っていないよ！ふひっ…ひっ…ひっ…みんな騙されちゃって…ここは馬鹿の巣窟ですか？真剣な顔で心配しちゃって…馬鹿だな――――ぺぷっ！』

突如、近馬と式を馬鹿にしながら話す網綱の顔面であろう場所に、いつの間にか現れた七士の蹴りが炸裂した。

「おい、てめぇ。俺様を騙すなんてなかなかの度胸じゃねぇか。死にに急ぎたいのなら遠慮はいらねぇんだぜ？お望み通り成仏させてやろうか？」

網綱の頭部であろう場所を踏み付けながら七士は言葉を続ける。

「こいつらを騙しただけなら俺様も許してやるよ。だが、てめぇは俺様も騙してしまったんだ。珍しく必死に頼むから聞いてやったが、てめぇは何をやっているんだ？てめぇの身を滅ぼすようなことをするなんて、やる意味が無ぇ、生きている意味も無ぇ。成仏させられる前に、一文字だけ発言を許してやるよ。」

『ち――――』

「あ？『ち』ってなんだ？あー、『血を撒き散らしてください』って言いたかったのか？そんなのは当たり前じゃねぇか。わざわざ頼む必要もねぇよ。じゃあ、成仏してくれよ。」

『違う違う！ふひっ…ちょっと待ってくれよ…俺も退屈していただけなんだから…ここに縛られている間は何も出来ないから、少しの悪戯ぐらい許してくれって。』

「生憎、悪戯をする奴は既に一人いるんだよ。そいつだけで手一杯でね。網綱、てめぇに成仏という名の解放を与えてやるよ。」

ぐりぐりと踏みにじりながら言う七士はどこか楽しげだった。踏まれる網綱もなんだかんだ言って、それを受け入れているようだった。

『あのぅ……網綱って方は、結局のところ何がしたかったのですか？私、混乱気味なのですけれど……』

「言葉通りの意味じゃないか？とりあえず、俺たちは帰るか。なんだか、あっちはに関わりたくないからな。」

戸惑う式の質問に、近馬は七士たちを見ながら答えた。式の方はわけがわからないといった顔をしていたが、黙って近馬についていった。

「さっきの網綱の言葉だけれど、」

七士の家を出た辺りで、近馬が話し始めた。

「網綱の言う通り、全部嘘だと思うから気にするなよな。式が取り憑いているからって、俺の寿命が短くなるなんてことはないからさ。」

『……それを聞いて安心しました。もし、私のせいで近馬さんに

迷惑がかかってしまうのなら、私は迷わずに成仏しますからね。』

「それと……さっきは大きい声を出して悪かったな。ごめん。」

『良いんですよ。結果的に何も無かったのですから。』

近馬の正面に回った式の顔は、とても嬉しそうに笑っていた。
先程の取り乱した姿とは打って変わって、近馬の周りをふわふわと回り始めた。
来た時には長かった石段だが、帰りではかなり短くなっていた。
七士の言う通り、登る人によって変わるからだろう。
下に着くと、先に帰っていたはずの依奈が駆け寄って来た。

「柊くんと式ちゃん、お疲れ様です。七士ちゃんとの話は終わったですか？」

『はい、終わりましたよ。ところで、依奈さんはどうしてここに？』

「近馬とろり式のことが心配になったんだってさ。依奈はろり式が成仏させられるとか思ったらしい。」

「お、宵太んと木薙も一緒か。」

後からやって来た宵太が式に説明すると、式はとても幸せそうな顔で笑っていた。

『私は大丈夫ですよ。何も言わずに消えたりはしませんから。それに話といっても、結局は何も無かったのですから。』

「そうなんですか？それなら良かったです。」

「近馬、網綱の様子はどうだった？」
「ん？今日は特に何も無かったな。相変わらず人を馬鹿にする奴だ。」
呆れた様子で近馬が答えると、宵太は苦笑いを浮かべた。
「近馬くん、どうする？私たちは依奈のことを頼まれたわけなのだけれど、近馬くんの用事も終わったみたいだし、依奈と一緒に帰る？」
「ああ、そうだな。ありがとうだな。綾杉、帰るぞ？」
「はい、わかりました。芙和、またね。御柳くんもです。」
二人に挨拶すると依奈は、左手に近馬の手を握り、右手では式の手を握った。
『宵太さんと芙和さん、お先に失礼しますね。』
「じゃあな宵太ん、木薙！」
立ち去る二人と一霊を見送る宵太が一言呟いた。
「まるで、連れ去られる宇宙人みたいだな。」
「はあ……宵太、ここは仲の良い親子みたいだなとかじゃないの？」

「つまり、それは依奈が小さい子供みたいだ、ってことか？」
「あ……私としたことが依奈の気にしていることを言ってしまうなんて……」
「どちらかといえば僕の台詞だよな。」
「もう生きていけない……」
「気にしすぎだ！」
「だって大切な友達を傷付けるようなことを言うなんて、人間として終わりだもん。」
「それなら僕は何回も人間として終わっている発言をしていることになるのだけれど。」
「宵太は大丈夫、人間じゃないから。妖怪みたいなものだね。」
「ひどいな！ちなみに、どんな妖怪だ？」
「うーん……インキュバスかな？宵太ってえっちだしね。」
「じゃあ、今ここで襲われても文句は言えないよな？」
「え？きゃあ！襲われるー！誰か助けてー！」
「そこまでリアルな反応されると、さすがに出来ないな。」
宵太が何気なく身体を横にずらした直後、宵太がいた場所に跳び蹴

りを放った七士が現れた。

「こら、てめぇ！人の家の前で何をやっているんだ？」

「な、何もやっていないですよ！」

「芙和の悲鳴が聞こえたんだ。言い訳はできねぇよな？」

「いや、誤解ですよ！少しふざけていただけですよ！」

「しかし、俺様の家の前でやっていたのに違いは無ぇ。成仏させてやるから覚悟しな。」

「七士先生、本当に何もやっていないんです。先生の家の前で失礼なことをしてしまって申し訳ありません。許していただけませんか？」

「芙和が宵太をかばうなんて珍しいじゃねぇか。いつもなら俺様と一緒に宵太を楽しくいじめるのにな。その珍しさに免じて今日は許してやるよ。だから早く帰りな。」

「ありがとうございます。ほら、帰るよ。」

七士の機嫌を損ねないように、芙和は宵太を引っ張り早々に立ち去っていった。

「ちっ、網綱をもう少しいじめるかな……それにしても、あいつらの頭の中は平和だな。」

～後日談～　その二

～宵太と芙和の場合～

「やっぱり依奈は近馬がいないとだめなんだな。僕たち三人の時は会話すら成り立たなかったし。」

「そうだね。なんだか上の空って感じだった。依奈に『明日って何か予定がある？』って聞いたのに『……食べちゃった。』って答えが返ってきたときはびっくりした。」

「まあ、予定を食べちゃったんだろうな。」

「美味しいのかな？」

「明日にでも依奈に聞いてみるか？」

「どう聞くの？『予定って美味しいの？』って？」

「……まったく意味がわからないな。」

「どんな返事をするかは楽しみだね。」

そんな他愛のない会話をしながら、二人は仲良く帰っていた。

～近馬と依奈と式の場合～

「なあ、綾杉？式の手の感触ってあるのか？」

「ちゃんとありますよ。でも、その質問は失礼です。差別みたいじゃないですか。」

「ああ、ごめん。悪かったよ。」

『私は気にしていないですよ。それよりも、こうして並んで歩いていると、まるで親子みたいですよね。といっても成人を迎えている人はいませんけれど。』

「うちが子供役ですか……なんだか複雑な気分ですね。」

「綾杉みたいな子供だったら溺愛しちゃうな。」

「ほ、本当ですか？」

『い、依奈さん、落ち着いて。つい先程は子供役を複雑に思っていたじゃないですか。』

「柊くんに溺愛されるなら子供役でも良いんですよ。」

「俺は何歳ぐらいで子供が出来るかな……」

変わらずに軽いすれ違いのある会話をしながら、それでも仲良く帰っていた。

～冷と美恵留の場合～

「冷ー、おんぶー」

「自分が美恵留のことをおんぶできないのは、美恵留自身が一番知っているじゃないか。」

「あー、熱で倒れちゃうよー」

「せめて棒読みの台詞はやめなよ。演技だってわかっちゃうじゃないか。」

「だってぇ……冷に甘えたいんだよぅ……」

「なんだかキャラが変わる程なんだな。よし、わかった！おんぶは出来ないけれど、手を繋いで帰ろう。」

「やだー。」

「わがままだな……じゃあ何が良いの？」

「腕を組んで帰ろうか。ねぇ、冷？」

「恥ずかし！」

とか言いつつも、しっかりと腕を組んで仲良く帰っていった。

～七士と網綱の場合～

「おいおい、こら。てめぇは今日一日が終わるまで俺の相手をしろ。これは命令だ、断った時点で成仏させてやるからな。」

『別に良いですけどね。暇ですし。でも、どうしてそんなに荒れているんですか？』

「子供たちを見ていたら苛々したんだ。普段はそんなこと無ぇのにな。」

『家主は嫉妬したんですね。しかも子供たちに対して。自分に彼女がいないからって情けな――――ぶへっふ！』

「もう一度言えるなら言ってみろよ。てめぇの頭を潰しかねないこの状況で、そんな戯言をもう一度言えるならなあ。」

『言わない言わない言わない言わない言わない言わない言わない！言えないって！な、何！この恐怖！歴代でも一位を獲得だよ、これ！』

「さあて、今日はどうやっててめぇを虐めるか……よし、決めた！俺様は今からてめぇを下敷きに爆睡する。寝心地が悪かったら、その度に攻撃するからな。」

『ちょ、ちょっとそれ――――ぶふっ！厳しすぎ――――ぎゃあ！だいたいさ――――うぐっ！俺の上――――げへっ！寝心地が――――ぎょほっ！良いわけが――――ぐひっ！ないだろ――――ぜはっ！がっ……』

七士は寝ながらも的確に攻撃をしていた。
網綱はそれを受けながら、言葉を絞り出していたが、やがて諦めたように沈黙した。
これはこれで仲が良い？

～夜凪と黄泉の場合～

「宵兄遅いなー。何しているのかなー？」

「弟くんは学校に遅くまで残っているんじゃよ。」

「居残り授業しているのー？」

「弟くんはそこまで馬鹿じゃないぞ。たとえ、そうなったとしても弟くんは抜け出すはずじゃ。」

「わーお、宵兄悪い子だー。」

「そんな悪い弟くんの世話をする儂を労っておくれよ、妹ちゃん。」

「じゃあ、今日は夜凪ちゃんにべったりの日にするよー。甘えまくっちゃうからねー。」

「儂の胸に来ておくれ、妹ちゃん！」

「夜凪ちゃーん！」

「うぐっ！み、鳩尾に……」

「あ、ごめんねー。許してくれるー？」

「……」

「や、夜凪ちゃん？」

「もちろん許すに決まっておるじゃろう！」

「わーい。」

この二人は仲良くないことの方が少ないだろう。
幸せな茶番劇をしながら、宵太の帰りを待っていた。

〜天の場合〜

「今日はずっと眠っていたなあ。口を動かしていなかったから、少し運動させないとなあ。ぼくが話せない人間になったら終わりだもんなあ。さて……いやー、宵太くんにも芙和ちゃんにも会えなくて寂しいなあ。ぼくは一人が嫌いで仕方がないのだけれど、それでも、未だ誰かと一緒に暮らすなんて出来ないからな！ましてや、美恵留ちゃんに『実はぼくはキミの先祖、お爺ちゃんなんだよ。』なんて告白できないしね！あー、近馬くんにも依奈ちゃんにも会いたいなー。冷くんって子には会ったことがないんだよね。美恵留ちゃんの幼なじみだから話は詳しく聞けるだろうけれど危険が伴うからね。美恵留ちゃんに僕の知らないところでばれたらおしまいだ。こんな大事なことはぼくがぼくの覚悟が決まった時にぼく自身の口から直接伝えなければ意味がないもんな。今は伝えられないけれどいつか一緒に暮らせる日を夢見てぼくは寝るとするかな。これで今日は何度寝目かな？まだまだ眠いやあ。」

かなり長々と一気に壮大な独り言を喋った後に、天は横になって瞼を重そうに閉じた。
一人でいてもここまで長々と喋ることが出来る人間は、おそらく天ぐらいなものだろう。

〜斗乃の場合〜

「御柳宵太とは昨日会ったから……今日は木薙芙和の家にでも行こうかな。確かあの子はオセロ勝負だったな。ん？こんなところに捨て猫かな？」

にゃー。

「あはは、キミは御柳宵太みたいに生意気な顔だなあ。」

にゃー。

「キミは木薙芙和みたいにマイペースだね。」

にゃー。

「ふむぅ、この猫は落ち着いている感じが柊近馬みたいだ。」

にゃー。

「こっちは落ち着きがないから綾杉依奈だね。」

にゃー。

「自分に正直な性格のキミは比名麦冷だね。」

にゃー。

「さりげなく尻尾で他の猫を叩くキミは天里美恵留だ。」

捨て猫をそれぞれ当てはめて仲良く戯れていた。

第三章　◆一頁◆

――と、ここで僕、御柳宵太は六角形に並べた机の自分の席から他の席を見渡す。僕の書いた小説を読み終えたみんなは、それぞれがそれぞれの表情をしていたけれど、誰もすぐに口を開かなかった。

そう、ここまでの話は僕が書いたただの小説、作り話だ。幽霊が普通に見えるわけもないし、そもそもいるのかもわからない。少なくとも僕の周りではそのような現象はまだ起こっていない。

と、ここで僕の小説に対しての意見第一号が発せられた。僕の隣に座っている彼女は、静かに、そして淡々と話し始めた。

「宵太、これはまだ小説と呼べるものじゃないよ。文章も乱れているし、何よりも伝わりづらいのが一番の問題だね。それと、私たちを出すのは許すとしても、無理矢理なキャラ作りはだめだと思うな」

そう言う彼女は、小説でもそうだったが、僕の彼女の木薙芙和だ。

芙和の言う通り、小説を書くにあたって僕たち自身を登場人物にしたわけなのだけれど、キャラが実際とは違うという人が大半だ。むしろ、ほぼ全員がフィクションともいえる。実のところ、もっと変えようかと思ったけれど、まるで別人になっては意味が無いことに気付き、それはさすがにやめた。

まあ、僕としてはそれも有りだとは思ったけれど、今以上の批判を受けることを考えると、やらなくて正解だったのかもしれない。

「木薙先輩の言う通りですよ、御柳先輩。僕の一人称が、”自分”っていうのはさすがにどうかと思いますよ。それに、御柳先輩から”冷や麦”なんて一度も呼ばれたこと無いですし。合っているのは僕の変態性だけじゃないですか」

芙和の次に発言したのは、一年後輩の比名麦冷だ。芙和とは反対側の、僕の隣に座っている。
僕の頭の中では冷に批判されることは予想外というか、予定外なことだったので少し驚いた。確かに、冷の一人称は”僕”だし、僕も”冷や麦”と呼んだことは一度も無いけれど、まさかそれを冷本人から言われるとは思っていなかった。そこら辺の直接的な批判は美恵留からされると思っていたのになあ。でも、自分自身を変態と認めるのはなんというか、予想通りで予定通りだった。
次に口を開いたのは、僕のちょうど向かい側に座る、柊近馬だった。

「俺個人の意見としてだが、宵太んの小説は好きだぞ。一番印象的なのは、宵太んと木薙の絡みのシーンだな。俺がもし書いたとしても、こんな恥ずかしいことはさすがに書けないからな。素直にすごいと思う」

と、そんな皮肉に聞こえるが、しかし本気で褒めているつもりの近馬は、相変わらず変わらない。この男こそ、フィクションを個人的には含まない奴だ。あ、幽霊のことを除けばだな。
僕と芙和の絡みのシーンを恥ずかし気も無く書いたのには理由がある。それは、”そうしないと、芙和の機嫌を損ねてしまう”からだ。小説とはいえ、僕と芙和が付き合っていないことにしてしまったら、『あれ？宵太は私と付き合うのが嫌になったの？それなら仕方ないね。記念に宵太の首を貰えるかな？』などと言い兼ねない。
しかし、それを防ぐ為とはいえ恥ずかしいことに変わりはないわけで、更に指摘されると余計に恥ずかしくなる。隣に座る芙和は既に顔を赤くして俯いてしまっている。うん、可愛いな。

「なあ、御柳？《零六式》って誰？《網綱》って誰だ？フィクショ

ンキャラなのかい？まあ、聞くまでもないよねぇ。名前からしてこれは実在するわけないからねぇ。それは良いとして、天とあたしが親子関係を結んだ後に、この設定は意地悪なのかい？天も今ではなかなか生き生きしているんだから、少しは良いキャラにしてほしかったねぇ。あともう一つ、もう一つだけ言わせてもらえば、あたしは《釘バット》なんて持ち歩いたことないよ」

そんな風に、僕が考えたフィクションキャラをことごとく粉々に破壊するような意見を言ったのは、近馬と冷の間に座る天里美恵留。きゃらきゃらと笑いながら、悪気が無いように言っているのが余計に破壊力を増している。

予想通りで予定通りとはいえ、やはり批判されるのはそれなりのダメージがある。しかも美恵留の場合は急所を狙ってくるのだ。まさか小説の《幽霊》という設定を根刮ぎ崩してくるとはさすがだ。

おっさんと美恵留の事情だが、またの機会に説明しよう。今はまだ説明するには、文字数が足りない。

「御柳くんがうちのことをひどく書きすぎです！《小さい小さい》なんて、そんなこと知ってますもん！そのことについては今更言っても無駄なのでしょうけれど、うちと柊くんが付き合っていない設定は絶対に許せないですよ！」

これは言うまでもなく綾杉依奈の言葉。芙和と近馬の間で、僕を睨みながら言っているのだが、こんなやり取りはもう日常茶飯事のようなものだ。

いや、でも、今回は少し反省かな。小説とはいえ、付き合っていないことにするのは失礼だった。《零六式》という女の子を出す為だとしても、二人には悪いことをしてしまったな。よし、今度何かおごってあげよう。

ここまで前言撤回ばかりで、本当がどうなのかがわかりにくいの

で整理しよう。
僕たちは私立太刀守高校に通っている。冷だけが一年生で、その他の僕たちは二年生だ。その関係性は、僕と芙和、近馬と依奈は付き合っている。冷と美恵留は幼なじみのような関係。
言い忘れていたけれど、僕たちは生徒会には所属していない。僕たち六人が所属するのは、《ミステリアス研究会》という名前だけの、ただの仲良しの寄せ集めだ。これは、去年に僕たちが創った部活で、《部活に所属しないといけないのなら、自分達で創ってしまえ》と思い、駄目元でやったら見事に受理されたのだ。
そして顧問になってくれたのが緋鳥七士、七士さんだ。七士さんは保健室勤務兼スクールカウンセラーとしてこの学校にいる。
おっさん、天里天も実はこの学校の購買で働いている。この学校に拾われたらしいが、僕はよく知らない。この太刀守高校には食堂もあるのだけれど、おっさんの人柄からか購買の人気もそれなりに高い。
僕の家族の御柳夜凪と御柳黄泉の説明は今は省くとして、東雲斗乃を紹介しよう。斗乃さんは小説とほぼ変わり無い。良く言えば旅人だし、悪く言えば浮浪者だ。それでも斗乃さんはいつ見ても綺麗だ。服装も身体も、まるで汚れていない。それも含めてつくづく不思議な人だ。
こうして僕の約四万五千文字は批判尽くしで終了。まだまだ、相変わらず、変わらないらしいな。

第三章　◇二頁◇

つまるところ僕の小説は不評だったらしい。否、それ以前に芙和からは《小説とも呼べない》とまで言われてしまった。それでも、単なる暇潰しで書いたものなので、そこまで気にはならなかった。

今日は僕の小説を披露して解散となった。読み慣れている人にはそうでもないが、やはり普段から読んでいない人には疲れるものだ。依奈なんて良い例で、うとうとしていて、結局近馬におんぶされながら帰った。僕は芙和と二人で帰っている最中だ。

「宵太はどうして急に小説を書いたの？実は小説家志望だったの？」

急に僕の書いたものと同じような台詞を芙和が言い、少し驚いた。けれど、意地悪そうな表情をしているということは、わざわざ言って僕をからかっているのだろう。

「いや、斗乃さんに頼まれてね。僕たちの日常を教えてほしかったらしくてさ、でも書いているうちにフィクションになっちゃった」

「最初から最後までずっとフィクションだったじゃない」

やっぱり鋭いなあ。嘘が全く通じない。斗乃さん、勝手に名前を利用してごめんなさい。

「あー……ごめん、嘘だ。授業中にあまりにも暇だったから書いたんだよ」

「授業中なんだから授業を受けなさいよ。宵太は不真面目過ぎだよ」

「僕は授業を受ける為に学校に通っているわけじゃないもん」
「じゃあ何の為に通っているの？」
「もちろん芙和に会う為だよ」
あ、赤くなっちゃった。可愛いなあ、まったく。
「ば、ばか！な、何をいきなり……嬉しくなんかないんだからね！」
本当にわかり易いぐらいベタなツンデレだよなあ。それでこそ芙和だ。
僕はその後も芙和で遊びながら芙和の家まで送っていった。それほど距離があるわけではないけれど、徒歩なのでそれなりに時間はかかる。
「また明日ね、宵太。ちゃんと宿題やりなさいよ。それと、明日のお弁当も楽しみにしていてね」
「宿題をやるかはわからないけれど、弁当は毎日楽しみにしているよ」
「宿題を忘れたらお弁当はあげないもんねー」
「了解、じゃあまた明日ね」
そういえば、このやり取りに似たことも小説でやったような気がするなあ、とか思いながら芙和に手を振る。僕の小説が実は未来予知をしているんじゃないか、とかね。

そんなくだらない幻想を考えていると、少し離れたところに銀髪の女性が見えた。斗乃さんだ。何をしているのかは、相変わらず変わらずにわからないけれど、せっかくなので声をかけることにした。

「斗乃さん、お久しぶりですね、どうかしましたか？」

「ん？ああ、御柳宵太じゃないか。ボクはね信号機を眺めていたんだよ。なんだか、この信号機がなかなか変わらないんだ」

見上げると確かに信号機があったけれど、単に壊れているだけのようだ。それを不思議そうに見ている斗乃さんは、とても二十代の女性とは思えない。幼いというより、謎めいている。

「斗乃さん、それ壊れているんですよ。こっちの道路は使われなくなったので、たぶん直ることもありません」

「そうなのか？それは残念だな。使われなくなった信号機か……赤信号のまま時間が止まってしまったなんて可哀相だな。ここで歩みを止めてしまう人が何人いるだろうか……」

たぶん別の道を進むか、構わずに渡るだろうと思ったけれど、口には出さなかった。僕の考えもいい加減に卑屈だよなあ。

斗乃さんを見ると、悲しそうな表情で信号機を見上げていた。まるで人間を相手にしているような表情だ。まあ、当然だろう。斗乃さんはそういう人なのだ。いや、僕はただ聞いただけなのだけれど、斗乃さんが定住せずにこうしている原因となったのはこれが関係しているらしい。無機物に対して有機物のように相対する、その行為が。

「……では、御柳宵太。ボクはそろそろ失礼するよ。やはり留まる

のは落ち着かないんだ。ボクは子供の頃の通知表に《落ち着きの無い子供》と書かれていたタイプの人間だろうね」

「それなら僕は《落ち着きすぎている子供》でしょうね」

「ははは、その通りだね。それにしても卑屈な考えは相変わらずだね。いや、《相変わらず、変わらないね》の方が良いかな？まあ、どちらでも良いよね。ではでは、ボクは失礼するからね」

「じゃあ、僕も帰りますよ。遅くなると家族がうるさいので」

僕は斗乃さんと別れて家へ向かった。やはり卑屈なことを言ってしまって、その時の斗乃さんの表情は呆れていたけれど、それでも最後は笑顔を見せてくれた。斗乃さんはどんな時でも最後には笑顔を見せてくれる。そんな斗乃さんが僕は好きで堪らない。もちろん《人として》なので、あしからず。

家に近づくと門のところに誰かが立っているのが見えた。大小の姿が有るということは、あの阿呆姉妹の他にはないな。

「弟くん！遅いではないか！妹ちゃんを見ろ！泣いているじゃろ！」

言われた通りに黄泉を見ると、確かに泣いている。まあ、これも相変わらず、変わらないけれど。

「ひっく……ひっ……宵兄が事故とかに巻き込まれたかと思って……心配したんだからあ……」

「嘘泣き娘発見。そんなことをする子はこうだ！」

僕は黄泉の頬を横に引っ張りながらぐりぐりと動かす。弱くやっ

ているから対して痛くないのだが、これをやられている間は当然上手く喋れない。

「い、いひゃいひょう、宵兄ー。ごみぇんひゃしゃあい。許しひぇー」

手を離してやると、頬をさすりながら黄泉が涙目になっていた。やべ、やりすぎたかな？

「ふみゅー、痛かったよー。でもねでもね、心配したのは本当だからねー」

にっこりと笑う黄泉の頭を、先程の行為を帳消しするくらい撫でてあげた。すると、嬉しそうに笑って更に笑顔になった。

「相変わらず、変わらないな黄泉は。わ……僕は黄泉にメロメロさ」

「おい、夜凪。似てもいない僕の真似をして、妙なことを言うなよ」

「弟くんが幸せ満喫で羨まし過ぎるんじゃもん。儂は妹ちゃんにメロメロじゃからな」

「阿呆なこと言っていないで中に入るぞ。近所の人の疑いの眼差しを受けるのは僕なんだからな」

姉と妹というよりは、妹が二人みたいだな。

「弟くん、今日は妹ちゃんがご飯を作ってくれたのじゃ」

「宵兄ー、ご飯にするー？お風呂にするー？それとも、よみにする

ー？」

「黄泉以外で」

「ひどいよー」

僕は呆れながらも、これが《日常》なんだよなあ、と確かに感じている。

第三章　◆三頁◆

我が家の今日の夕食は、鯖の味噌煮と豆腐と油揚げの味噌汁、漬け物にその他少量ずつのおかずといった和風で質素で日本人好みのものだった。いや、単に僕好みなだけなのかもしれない。

「いただきます」

「ねえ、宵兄。質問良いかなー？」

三人で揃って食事の挨拶をしてから、早速味噌汁を頂こうとした時に黄泉が僕に話しかけてきた。僕は手に取ったお椀を置いて黄泉の方に顔を向けた。

「別に良いけど、どうした？」

「あのね、斗乃ちゃんだっけ？あの人がね、いたんだよ」

「ああ、僕も見かけたよ。つーか、会話もしたな。それがどうした？」

斗乃さんは神出鬼没でなかなか見かけない人だから、たぶん報告したかったんだろう。いや、でも、それにしては様子がおかしいような。

「でもね、昨日も見かけたんだよ？」

「偶然じゃないのか？別に連日で見かけたとしても不思議はないだ

ろう」

「えー、でも同じ場所だよ？それに……」

「それに、どうした？」

「同じ時間帯にずっとそこに居たの。何か変じゃないかなー？」

ああ、そういうことか。

斗乃さんは気まぐれで気分屋だ。同じ場所に同じ時間帯に居るなんて滅多にない。だから黄泉はこんな風に話すのだろう。

「気にすることじゃないよ、心配すんな。別に危険な人なわけじゃないんだから」

「でも、弟くんよ。儂も妹ちゃんとは別の場所で見かけたのじゃが、バイクに乗らずに歩いておったぞ？」

「……そういえば今日も歩いていたな」

斗乃さんの財産で、身につけている物以外であるとすれば、夜凪の言うバイク以外には無いだろう。僕はバイクに詳しくはないので車種はわからないけれど、高そうなバイクだ。女性が乗るには重そうだし、とても釣り合っているとは言えないだろう。それでも、それが斗乃さんの唯一の財産で、そして宝物ということは間違いないはず。

「何処か近くに停めていただけじゃないか？そんなに気にするなって。夜凪も黄泉も、斗乃さんとはあまり関わりが無いんだからさ。何かあったとしても僕たちで解決するさ」

「そうじゃのぅ、弟くんに任せる方が利口じゃな。儂と妹ちゃんがどうにかしようとしても、どうにもならんじゃろうしな」

話を終わらせて、やっと味噌汁に口を付ける。うん、美味いな。やっぱり味噌汁は最高だなあ。僕は個人的に具はねぎと豆腐が好きだ。

「そうじゃ、弟くん？そろそろ夏休みじゃが、その前に今年もやるのかのぅ？」

「ん？ああ、そうみたいだよ。でも、まだ僕たちは何処に行くのかも、何をやらされるのかもわからないけれどね」

「去年と同じように遠出することになったら、一週間は妹ちゃんと儂は二人っきりじゃな」

「えー、よみは嫌だよー。宵兄が帰ってこなくて寂しいし、夜凪ちゃんがいつもよりくっつくし大変なんだよー」

それでも嫌じゃないんだから、別に良いじゃないか。と、言いたいが、そんなことを言っても黄泉は素直には頷かない。本当は夜凪のことが大好きなはずなのにな。

「まあ、今年は去年よりも早く帰って来れるんじゃないか？要領もわかるだろうし、難しくはないと思うよ」

「宵兄ー」

「なんだ？」

何かを求めるような目をしているな。早く帰って来て、とかかな？おねだりモードの黄泉は三割増しで可愛く見えるからなあ。僕の苦手とする部分でもある。

「お土産よろしく！」

……良い笑顔でなんてことを言うんだ、この妹は！

くっついてくると欝陶しいと思ったりするけど、こんなにもあっさりしていると寂しくなるなあ。僕はまるで磁石だな。もし、黄泉がこれを計算して使えるようになったら小悪魔だな。少なくとも僕には効果絶大だ。

「黄泉、お土産を頼まれても何処に行くかわからないから期待はするなよ」

「はいはーい」

「弟くん、儂にも頼む」

「夜凪には変な物を持ってくるよ」

「何故じゃ？」

「夜凪が持ってくる僕へのお土産がまともだったことが無いからだ」

「なるほどのぅ。うむ、それなら期待しておくとするかの」

うーむ、あんまり期待されるのも嫌だなあ。僕は夜凪とは違ってそれなりに常識人だと思うし。夜凪の期待に応えられるような変な

物を見つける自信は無い。
まあ、いい。僕は冷め始めてしまった味噌汁をもう一度口にして、鯖の味噌煮の骨を取り出す作業に集中することにした。骨を取るといっても、黄泉は気が利く子なので簡単に取れるし数も少ない。これなら将来は安心かもな。

「夜凪ちゃん、魚の骨取ってー」

「ほいほい、妹ちゃんは自分ではまだ出来ないのか？」

「出来るけど、自分でやったら夜凪ちゃんが不機嫌になっちゃうでしょ？いわゆるコミュニケーションだよ」

どっちが妹かわからないな。夜凪と黄泉はなんだかんだいっても仲が良いし、お互いがお互いを必要としている感じだ。僕は傍観者的な立場かな。僕にはぴったりだと思う。

「ほれ、取れたぞ。弟くんのも取ってあげようかの？」

「いや、遠慮します。もう取っちゃったし」

「最初から頼まれてもやらんわい！」

あれー、このお姉さん扱いづらいよ。誰か取扱説明書をください。僕は今まで夜凪と暮らしてきているわけだが、全然理解できません。理解できそうになると、データを書き換えたかのように、また理解できなくなるんだもん。

「だめだよ、宵兄ー。夜凪ちゃんは頭で理解するんじゃなくて、心で感じるんだよー」

僕の姉はスポ根漫画の必殺技と同じなのか？攻略するには直感が頼りなのかなあ。

「儂のことは千里眼ですら見抜けぬわ！無論、スヴェンの眼でも、うちは一族の眼や日向家の眼でもじゃ！」

どうやら夜凪は写輪眼や白眼も効かず、黒猫の相棒の数秒先の未来が見える眼でも見抜けないらしい。最強クラスのボスだな。別漫画でどう戦うのかな？

よし、それなら僕も直感でやってみよう。

「えい」

もぐもぐ、ごっくん。

「わ、儂の鯖の味噌煮がああああ！弟くんめ、よくも食べたな！」

「だって夜凪が意味不明なんだもん」

「それはいつものことじゃろうが！」

あ、自覚していたんだ。

「夜凪ちゃん落ち着いてよー。黄泉の半分あげるから」

「うぅ……弟くんのばかあ……儂の大好物じゃったのに……あれは特別なんじゃ……妹ちゃんが作った物じゃからのぅ……」

相変わらず変わらずに台詞は阿呆だが、ちょっとだけ可愛いとか

思っちゃった。

第三章　◇四頁◇

「ふー、終わったよー」

「黄泉、そこに座られるとテレビが見れないよ」

鯖の味噌煮騒動（夜凪の分を僕が食べただけだが）はすぐに終わり、夕食も食べ終わった。今は黄泉が洗いものを済ませて、ソファーでくつろぐ僕の膝に無理矢理座ったところだ。まあ、テレビを見ていたといっても、見る目的があったわけではないから良いのだけれど。

「おっと、あんまり座り心地が良いからソファーと間違えちゃった。このままでも良いー？」

「また夜凪がやきもち妬くぞ？」

「大丈夫だよー、よみには被害がないもんね」

「僕なら被害に遭っても良いのか？そういう考えならだめだ」

「宵兄なら大丈夫だよー。だって宵兄も夜凪ちゃんと仲が良いもん」

まあ、否定はしないな。僕たちは今時珍しい仲良し兄弟と言えるだろう。そうでなければ、こんな風に会話したりしないもんね。

「儂が風呂に入っとる間に何をやっとるんじゃ！弟くんは抜目ない奴じゃのぅ」

「誤解をしているようだから言うが、僕から黄泉にくっついたことは無いからな」

これ、ちょっと嘘ね。今はさすがに無いけれど、昔はあった。黄泉がまだ小さくて今みたいに積極的じゃなく、逆に消極的だった頃の話だけれど。

「さて、と。僕は風呂に入って寝るよ」

「じゃあ先にお布団に入って待ってるからね、宵兄ー」

「じゃあ儂も一緒に待っとるからの」

「あーあー、勝手にしてくれ」

めんどくさくなった僕は適当に返事をして風呂へと向かった。まともに返事をしていたら疲れるからね。もう既に疲れ気味だけれど。

「……おいおい、まじかよ」

風呂から出て部屋のベッドを見て僕はびっくりした。本当に二人が僕のベッドで寝ていたからだ。しかも起きそうにない程爆睡中だ。

「今日はソファーで寝よう」

部屋から出る間際に「ちくわぶじゃ」と、夜凪の寝言らしき声が聞こえたけれどスルー。夏が近くて良かった。風邪をひく心配はなさそうだ。

翌朝、目が覚めた僕はいまいち状況がわからなかった。何故こん

なことになっている？僕は自分のベッドを二人に占領されたから、一階のリビングにあるソファーに寝ていたはずだ。

「……むにゃ。ちくわぶじゃ」

それなのにどうして夜凪が僕の隣のわずかな隙間に寝ているんだ？ソファーに奥行きがあったから良かったものの、下手したら落ちていたぞ。

いやいや、そうじゃない。重用なのは何故夜凪が寝ているか、だ。しかも寝る時は普段着ているきっちりした着物ではなく、薄い生地なので危ない。何が危ないって、夜凪は普段から着物は着崩して着るので、近いと目のやり場に困ってしまう。とにかく、僕はここから移動したいのだが、

「離さぬぞ、ちくわぶめ」

といった具合に僕の腕を掴んでいるのだ。だいたい、なんでちくわぶなんだ？僕の腕はちくわぶじゃないぞ。

「んうぅ……宵兄ー、おはよー。あのね、夜凪ちゃんがいなくなった――」

うん、バッドタイミング。最高に最低な状況だね。僕は起き上がろうとしているけれど、夜凪に腕を掴まれているので妙な体勢のまま停止。夜凪は着崩れた格好のまま僕の腕にしがみついている。兄弟姉妹とはいえ、これ以上ないってくらい怪しいよね。それを見た黄泉は絶句しているし。

「黄泉、助けて」

「……えーっと、どっちをかな？」
「両方だけれど、どちらかというと僕の方をかな」
「わかったよー。でも、宵兄と夜凪ちゃんってそういう関係だったんだねー」
「……どういう関係だと？」
「宵兄が夜凪ちゃんの抱き枕的な関係かなー」
「誤解を招きそうだな」
「もう招いちゃっているよー」
「……ですよね」

なんか朝から疲れてしまった。この寝ている姉のせいだ。黄泉はなんとなく理解しているようで、説得というか説明は簡潔に済んだのだけれど、少し怒られてしまった。
僕は早々と朝食を食べて学校に向かった。いつもより少し早いけれど、それならのんびり歩けば良いだけだ。
のんびり歩きながら、そういえば宿題をやっていないことに気付き、でもなんとか誤魔化せば良いかとか考えていると、僕の横を見覚えのあるバイクが通り過ぎ、少し前で止まった。バイクに乗っていたのは斗乃さんだ。
「やあ、おはよう、御柳宵太。今日は一人で登校なのかな？」
やっぱり黄泉や夜凪の心配は杞憂だったみたいだな。バイクもあ

るしいつも通り、相変わらず変わらない、東雲斗乃さんだ。

「少し家を出るのが早くてのんびり歩いていたんですよ」

「そうか、それなら僕に少しだけ付き合わないか？ここら辺をバイクで散歩しようじゃないか」

「学校に遅刻しない程度なら良いですよ」

「それなら心配ないさ。もちろん時間は守るからね。さあ、後ろに乗ってくれ」

斗乃さんに渡されたヘルメットを被り、バイクの後ろに乗った。どこを掴めば良いか迷っていると、斗乃さんは僕の腕を自分の腰に回して固定させた。なんだか少しどきどきしてしまった。朝から女性に関わるイベント満載の僕は、ギャルゲーかハーレム漫画の主人公みたいだ。

「落ちないようにね」

そういうと斗乃さんのバイクは唸るように走り出した。

結構なスピードを出しながらあちこちを走り回った。エンジン音と走行音で会話は出来なかったが、その方が良かったのかもしれない。風景を堪能するには思ったより集中力を使うらしく、気がつけば僕は学校に送られていた。

「うん、楽しかったよ。キミは勉強に励むと良いさ。じゃあね、御柳宵太」

「あ、はい。また機会があれば乗せてほしいです」

斗乃さんはにっこりと笑いながら手を振ると、バイクに跨がり走り去っていった。

「宵太、朝から浮気？」

不意に背後から声を掛けられ、振り返ると若干不機嫌な芙和がいた。

「斗乃さんだよ。顔見知りだし、どんな人かも知っているだろ？」

「腰に手を回していたじゃない」

「あれは落ちないように気遣ってくれたの」

「笑顔で手を振ってた」

「斗乃さんはいつもそうじゃないか」

「抱きしめ合ってキスまでしてたもん」

「いや、それはしてないな」

「じゃあ、私とはしてよ」

「へ？」

「冗談だよ。こんな人目に付くところでは出来ないし。それより早く行こうよ」

「あ、ああ、うん」

なんだこれ？朝からハプニング続きで、僕の頭はショート寸前だぞ。まさか死亡フラグでも立っちゃったのかな？

第三章　◆五頁◆

斗乃さんは時計を身につけていないのにも関わらず、時間は正確で、僕が教室に入って間もなくチャイムが鳴った。まさか、芙和との会話も想定していたのかな？

そんなくだらないことを考えていると、隣の席に座る近馬が話しかけてきた。ちなみに、席は男女混同の出席番号順だ。

「おはよ、宵太ん。殿様と浮気か？」

斗乃さま、転じて殿様ね。

「違うよ、芙和と同じこと言うなよな」

「あはは、冗談だって。でもさ、殿様ってまだここら辺にいたんだな」

僕は無言で頭に疑問符を浮かべて近馬に続きを促す。

「なんかさ、この前俺が会った時に『じゃあね、柊近馬』って言われたんだ。いつもなら『失礼するさ』とか『また会えるまでね』とかだったから」

「そういえば、さっき斗乃さんは『じゃあね』って言っていたなあ……」

まさか、本当にいなくなっちゃうのかな？まあ、それならそれで致し方ないことだろう。僕が関わって良いことではないし、ここら

辺に来たのも斗乃さんの自由なわけだから、いなくなるのも斗乃さんの自由だ。でも、それでも、僕は寂しい気持ちになってしまった。
そんな僕の様子を感じ取ったからなのか、近馬がまた口を開いた。

「宵太ん、冷後輩のところにでも行くか？」

近馬に言われるがまま、僕たちは冷のところに向かった。もちろん、本来は授業のある時間なのでサボりというわけだ。
太刀守高校は四階建て校舎のA棟と三階建て校舎のB棟、そして運動関係専門のC棟があり、A棟には特別教室や部室や倉庫等があり、B棟には一階から一年生教室、二年生教室、三年生教室となっている。僕たちが向かっているのは一年生教室のあるB棟一階ではなく、A棟二階にある保健室だ。

「失礼します」

保健室に入ると、窓際に孤立しているベッドに冷が一人で勉強しながら座っていた。

「あ、御柳先輩と柊先輩じゃないですか。またサボりですか？ちゃんと進級はしてくださいよ。来年同学年になったら僕はなんて呼べばいいか戸惑いますからね」

「僕は別に同学年じゃなくても、名前で呼んでくれて構わないんだけれどね」

「それは僕自身が許さないですからね。先輩なんですから、今のところは」

「まるで僕たちが留年決定みたいな言い方はやめろ。これでも単位

もしっかり、テストもばっちりなんだぞ」

「そのどちらも木薙の協力があってのことだがな」

「うるせぃ」

今頃芙和は真面目に授業を受けてノートもきっちり書いているだろうな。芙和自身はノートに書かずとも頭に入るだろうけど、後々僕に教えてくれる為に書いてくれている。感謝感謝だよ、まったく。

この状況で説明する必要があるかは微妙なところだが、冷は言ってしまえば保健室登校児というやつだ。高校生では珍しいかもしれないが、冷は確かにそうなのだ。いじめが理由とかそんな小さいことではなく（いじめが小さい理由とは言い難いが）、対人恐怖症というか、集団恐怖症というか、とにかく多人数での団体行動が出来ないらしいのだ。人込みを歩く程度なら平気だが、電車やバスには乗れない。同じ目的を多人数でやることが理解できず、その中に自分が入れないという感じだ。だから冷はこうして保健室で一人、ベッドを孤立させて勉強している。

「で、先輩たちはどうして授業をサボってここに？いや、来て下さったのは嬉しいのですが、やはり理由を聞いておかないといけないと思いまして」

勉強をする手を止めて冷は僕たちに向き直った。律義に正座までして、本当にこの後輩には頭が下がってしまう。

そういえば、理由が無いことに今更気付いた。人に会うのに理由はいらないわけだが、それでは冷が納得しない。休み時間なら未だしも、今は授業中なのだ。冷に会うのを口実にサボっているなんて、当の本人からすれば決して良い気分じゃない。

「実は緋鳥んに用があったんだが、今日はまだ来ていないのか？」

僕が答えに迷っていると、近馬が嘘か本当かわからないような答えを出した。きょろきょろと辺りを見渡して探しているのを見て、一応は信じたらしい冷がそれに答えた。

「緋鳥先生はカウンセリングの方に行っています。この時期は一年生が急増するらしいですよ」

「まあ、この学校の特殊な行事とかに戸惑うからな。僕もびっくりしたもんだよ。まさか、全生徒が部活に所属しないといけないなんてな」

「それで部活を設立した宵太んにもびっくりだよ」

「七士さんが許可してくれたからね。もっとも、《ミステリアス研究会》って部活名は七士さんが考えたんだけれどさ」

一年前ぐらいに僕たちが部活を決め兼ねていた時に、『悩んでいるなら作ってもいいぜ。ただし人数はしっかり集めろよ』と七士さんに言われ、当時は全く面識の無かった芙和と依奈、そして美恵留を誘った。何故この三人かというと、僕たちと同じで部活を決め兼ねていたからだ。それ以外の理由は無いし、先に違う人を見つけていれば今とは別のメンバーだったかもしれない。まあ、今みたいに仲良くなるか一概には言えないけれど。そもそも、最初の方は仲が良いどころか、言葉も交わさずにいた程だしね。

「どうしますか、先輩？緋鳥先生が来るまで待ちますか？僕としては今からでも授業に出てほしいのですが」

「今から出ると悪目立ちしちゃうからなあ……」

「サボっている時点で悪目立ちしていますよ、御柳先輩」

この後輩はなかなか鋭い意見を言うなあ。何も言い返せない程の正論だ。

「まあ、いいですよ。御柳先輩が現時点で行く気になっていないなら、僕が説得しても無意味ですからね」

「よくわかってくれているじゃないか、冷くん。近馬はどうする？別に僕に無理矢理付き合わなくても良いけれど」

「いや、俺は緋鳥んに用があるからな」

どうやら本当だったらしい。うーん、近馬の言うことはわかりにくいなあ。

冷はベッドから降りて僕たちに椅子を用意してくれた。本当によく出来た後輩だよなあ。

「何か食べますか？天さんからいろいろ貰うんですが、とても一人で食べ切る量ではないので」

冷がベッドの上にスペースを作り、そこに購買で売っているパンやお菓子などを並べた。確かに並べられた品々は一人分とは言えない量だった。

「こんなに貰っても僕はほとんど食べられないんですよね。保健室に来る人達におすそ分けして減らしている感じですよ。まあ、気持ちは嬉しいですね」

第三章　◇六頁◇

朝早く出たこともあって、少しお腹が減っていた僕は焼きそばパンを貰った。近馬はお菓子をいくつか貰ったけれど、たぶん後で食べる為だろう。要するに依奈の為だな。

「そういえば近馬は七士さんに何の用なんだ？」

「カウンセリングの予約だ」

「近馬が？」

「違う、知らない子だ。たぶん俺たちが緋鳥んと仲が良いと思って頼んだんだろう」

「その人って女の子か？」

「そうだよ。たぶん後輩じゃないかな。緊張していたみたいだし」

僕が思うにそれは近馬に話し掛ける口実な気がする。でも、それを本人が気付かず、何も思っていないなら口を出すことじゃない。近馬は割とモテる類の人間らしく、アプローチをよく受けるのだが、近馬自身がこういう人間なので本人が気付くことはまずない。まあ、依奈が絡んでくるまでは問題ないからスルー。

「そういえば、おっさんはいつ届けに来てるの？」

「僕が学校に来たとほぼ同時ですね。待ち伏せしているんじゃない

かってぐらいタイミングが良いですよ」
「まるでストーカーみたいだな……」
「あはは、それは僕の役ですよ」
「笑い事じゃないし、自分で言うことでもないからな！」
冷は過去にストーカー歴がある。結果的にはたいしたことは無かったけれど、それでも被害者は少なからず傷痕が残っただろう。つーか、被害者は僕なんだけれどね。
「それにしても保健室に担当教員がいないって実際どうなの？怪我人とか病人はどうすればいいんだ？」
「簡単なことなら僕でも出来ますからね。それを条件にここに居させてもらってるようなものですし。携帯を使えばすぐに来てくれますから、対処できない時も安心です」
「緋鳥んも大変だよなあ。カウンセラーとはいえ、相談されるのは真面目な相談ばかりじゃなく、中には緋鳥んと二人きりになりたいからとかいうのもあるらしいぞ。まあ、噂だけれどさ」
「物好きな人もいるんだなあ。僕なら七士さんと二人きりにはなりたくないよ。なんか解剖されそうだし」
「それなら実際に解剖してやろうか？」
振り返るとそこには、にやにやと笑う七士さんが入口に立っていた。まさか、ここで死亡フラグの回収ですか？まずいなあ、本当に

解剖されそうだよ。うわ、メスまで取り出した、つーか、保健室にあって良い物なのか？

「まあ、冗談はさておき疲れたぜ。この学校の阿呆みたいなシステムに戸惑う腐れ餓鬼共がゴミのように押し寄せて来やがって、俺様の仕事は増える一方だぜ。まったく、迷惑な話だよな」

「職務怠慢」

「うるせぇよ、宵太」

七士さんは自分の椅子に座ると、机の上に脚を置きくつろぎ始めた。態度も口も性格も悪い教員だ。

七士さんは保健室勤務といっても、たまにだが授業を行うこともある。他の教師たちが出れなくなった時の臨時教師みたいなものだ。七士さんはなんと驚くことに、どんな教科でも教えることが出来るらしい。だから教師の数が少ないこの時代において、貴重な人材として重宝されているらしい。人間としてはこんな人だけれどね。

「冷、何か食い物くれ」

「そこに積んであるパンを御自由にどうぞ」

見ると、七士さんの机の側に先程並べたパンが、何があるかわかりやすいように積まれていた。いつの間にそんなことをやっていたんだ？

七士さんは種類を選ばずに上の方から適当に取って食べ始めた。

「宵太、何か飲み物」

「冷蔵庫に入っているんですか？」

「購買で買ってこい」

この不良教員め。生徒をパシるとは何事だよ。

「ほら、釣りはやるからよ」

「……値段ぴったりですよ」

「細けぇことは気にするな」

僕はお金を受け取ると、仕方なく購買へと向かった。何故あのような人が男女問わず生徒から人気があるのかわからない……それもそうか。他の生徒や教師たちの前ではキャラが違うもんな。

購買には当然ながら生徒は見当たらなかった。そういえば授業中だったなあ、とか思ったが今更気付いたとしても意味は無いだろう。何故ならおっさんに見つかってしまったから。

「あれあれ？確か今は授業中のはずなのに生徒さんがいるなあ。あれあれ？よく見たら見覚えのある子じゃないか。うーん、確か……そうだそうだ、御柳宵太くんじゃないか。まあ、忘れてなんかいないんだけれどさ、宵太くんに挨拶する時はこれぐらいやらないといけないかと思ってね。それにしてもサボりかい？いけないなあ、ダメじゃないか。といってもぼくも学生の頃はよくサボったものさ。えーっと、十五、六年前かな？あ、これはぼくの年齢で数えたらだね。時代で考えると、六十年流れたわけだから……七十五、六年前か。うーん、なんだかものすごいお爺さんの台詞だよね。まあ、普通に生きていれば僕はこの時代では、ものすごいお爺さんなんだけれどさ。ところで何か買うのかい？それとも、ぼくと談笑しに来た

のかい？」

相変わらず変わらずに、おしゃべりな人だ。僕が相槌を打つ暇もなく話続けて、結局自分のペースで終わらせる。これはある種の才能だよな。

「お茶をください、冷たいやつね」

僕は預かった百円を渡して、買ったお茶を受け取り引き返そうと、おっさんに背を向けた。すると、慌てたようにおっさんが話しかけてきた。

「ちょ、ちょっと待ってよ宵太くん。少しぼくと話でもしようじゃないか。それとも、急ぎの用事なのかい？」

「七士さんのおつかいだからな」

「七士くんなら長くは引き止められないね。じゃあ一つだけ教えてほしいな」

なんだか真剣な話し方で何かあったのかと思い、僕はおっさんに向き直った。

「何かあったの？」

「実はね……」

おっさんは真剣な表情でしばらく間を溜め、そして口を開いた。

「美恵留ちゃんって誰かと付き合っていたりするの？あの子ってな

かなかそういうの話さないし、ぼくとしては気になるんだけれど自分からはなかなか聞けないし、宵太くんが知っていたら教えてほしいんだよね。ああ、でも陰でこそこそ調べるなんて嫌だし、美恵留ちゃんにも嫌われちゃうよなあ……宵太くん今のは忘れてくれ。ぼくは美恵留ちゃんを信じて待つことにするよ。でも気になるよなあ。これも親心っていうのかな？重過ぎないかな？宵太くんはどう思う？」

「僕は七士さんに怒られるから帰る」

なんて阿呆らしいんだろうか。真面目な話をされると思った僕が馬鹿だった。相変わらず変わらない人だ。

第三章　◆七頁◆

「宵太くん、冗談はさておいて、話は別にあるんだよ。どちらかというと忠告かな。今年も例のアレをやるらしいけれど、気を付けた方が良いみたいだよ。いつにも増して非日常なことが起こる可能性が大みたいだからね。どうやら今年はお嬢様が企画したって噂があるんだ。在学中は生徒として何も出来なかったけれど、卒業した途端にこれだよ。ぼくにも何が起こるかわからないけれど、とにかくお嬢様の思考は未知数だ。だから――」

「そんなの」

僕はおっさんの言葉を遮って堂々と言い放ってやった。

「そんなの僕たちには関係ないよ。それに、去年より苦労するなんて、それこそ非日常だよ」

「そうだとしてもさ、用心はしておいてよ。美恵留ちゃんだけでなく、宵太くんも芙和ちゃんも、近馬くんも依奈ちゃんも、そして冷くんも心配なんだからね」

「心配してくれるのには感謝するよ。でもさ、非日常でも慣れれば日常に変わっちゃうんだよ。こればかりは”相変わらず、変わらずに”とはならないからさ」

「そうだね、それはぼくが一番理解していることだよね。ぼくから見たら、未来であったこの世界は、いつの間にか現在へと変わっていたんだから。まあ、キミたちに出会えたのが大きかったんだろう

けれど」

「大袈裟だよ、おっさん。少なくとも僕は何もしていないし」

「あはは、まあ、いいか。おっと、思ったより引き止めてしまったね。七士くんが待っているから早く行きなよ」

気付けば購入したお茶も体温で冷たさを失いつつあった。おっさんの心意気で冷たいものと代えてもらい、僕は保健室に戻った。

「遅ぇなあ。てめぇは何処まで行ってきたんだ？静岡まで足を運んで、現地で極上のお茶を調達してきたというなら許してやるが、それ以外なら制裁だ」

「……既に制裁を喰らいましたけど」

保健室に戻った僕は、まず七士さんに蹴られて壁と密着した。いつにも増して機嫌が悪いらしい。まあ、遅れたことは僕に非があるので何も言えない。

「よっ、御柳。壁とお友達になれたかい？」

いつの間にか保健室に来ていた美恵留が、僕に向かって気持ち良いぐらい満面の笑みで皮肉を言ってきた。まったく、気分の良いやつか悪いやつかわかりにくいな。

「美恵留もサボりに来たのか？」

「あたしは授業をこっそり抜け出したんだよ。最初の方に、居る印象を植え付ければ、途中で抜けてもバレ難いからねぇ」

僕の周りって不真面目なやつばっかりだな。類は友を呼ぶ、ってね。

「御柳、さっきお嬢様ちゃんがここに来たんだ。あんたが居ないからってすぐに帰ったけれど、戻る途中で会わなかったかい？」

僕は無言で首を横に振って答えた。

「そうか、一体何の用だったんだろうねぇ？」

先程のおっさんの話を抜きにしても、まったく気味の悪い人だ。この学校のオーナーの曾孫娘。去年、僕たちの二つ上の学年で、年齢は三つ上。留年や浪人というわけではなく、幼小中高大と幼稚園から大学まで一貫のエリート学校に通っていたのに、高校一年生を終える頃に太刀守高校を再度受験し直し、また一年生から始めたらしい。理由はよくわからないが、太刀守高校は多少レベルの高い高校といっても、元々通っていたエリート学校に比べればたいしたことはないはずだ。何せ、そこは英才教育の塊みたいなところで、有名な大学の授業を中等部昇学直後に習うぐらいだ。

「おい、てめぇら。俺様顧問のミステリアス研究会は順調に活動しているか？」

「まあ、それなりにだな。緋鳥んが名付けてくれたわけだが、他生徒の間では《なんでも屋》みたいに思われていて、いろんなことに巻き込まれつつも順調だぞ」

「そういえば七士さんって他にも《ＵＦＯ研》や《未確認生物研》、《神話研》とかも顧問ですよね？大変じゃないですか？」

「何を言ってんだよ、宵太。いいか？俺が顧問をやっている部活の共通点は《てめぇらで勝手に活動して終了》だ。つまり、俺様は何もしなくて良い。てめぇら以外の部活は無茶をするような度胸のあるやつはいねぇから安心だしな」

つまりは、合理的な職務怠慢。部活を複数受け持つことによって、表面上は良く思われ評価がアップ。ただし、受け持った部活は全て傍観しているだけで良い。なんてずる賢い考えの人だ。尊敬に値する！

「いやー、僕も七士さんみたいな大人になりたいですよ」

「宵太には無理だな。サボっているようじゃまだまだだ。バレないようにサボらないとな。その点、美恵留は半分合格だな。それを、どうやって授業の頭から出来るか、だ」

「別にあたしは緋鳥みたいな大人にはなりたくないからねぇ。そんな性根の腐った堕落は大嫌いだからねぇ」

「てめぇもなかなか口が悪いから、可能性は十分あるぜ？」

「いやな可能性だねぇ。と、冷？あんたさっきからどこを見てるの？」

美恵留と七士さんがギスギスバチバチした会話の中、隣に座る冷の視線が気になったようだ。とりあえず、僕はとばっちりを受けない距離をキープしておいた。

「……太股を」

次の瞬間、美恵留の攻撃が炸裂。冷の両手を掴み、俯せに倒した。そして、背中に馬乗りになり、掴んだ両手を捻り上げるといった、よく警察などが取り押さえる時にやるような攻撃をした。

「あんたは時と場合をわきまえろ！四六時中発情しやがって！」

「うえぇ……だってさ、美恵留の脚って綺麗なんだもん。細く引き締まってさ、それを制服のスカートから出されたら効果絶大だよ」

「ななな、何を言うのさ！あたしなんかより木薙ちゃんの方が綺麗じゃないか」

僕、ちょっと照れ。

「木薙先輩と美恵留の脚はジャンルが違うんだよ。身体のラインが変わればバランスも変わる。人それぞれに合った脚があるわけで、誰の方がってのは無いんだよ。それよりさ、馬乗りしているおかげで太股が僕の身体に、直に触れていることに気付いてる？」

「な、にゃー！ひ、柊！あたしの代わりに押さえて！」

「なんで俺が……まあ、いいか。冷後輩、おとなしくしている人間に言うのも妙だが、おとなしくしろよ」

「もちろん、おとなしくしますよ。あ、依奈先輩だけ脚を評価しないのも悪いですよね。依奈先輩の脚は――」

「おとなしくしろよ」

「わ、わかりましたよ、言いませんよ、だから捻らないでください。ただ、これだけは言わせてください。依奈先輩だって良い感じです」

そしてまた捻られる。

第三章　◇八頁◇

その後も冷は何度か捻られたが、冷が発した一言で解放せざるをえなくなった。

「あ……目醒めそう」

これを聞いた近馬は絶句しながら冷から離れた。何に”目醒める”のかはノータッチということで。

僕はというと、その茶番劇の間に、忘れていた宿題を終わらせていた。集中さえすれば、僕だってそれなりに出来る方だ。事実、この太刀守高校の試験でも、半分以下になったことは無い。もちろん、それも常に上位に入る芙和たちのおかげというのもあるけれどね。

しばらくして、授業の終わりを告げるチャイムが鳴った。妙にメロディアスなチャイムが鳴り終わるとほぼ同時に、芙和と依奈がやってきた。

「宵太、やっぱり比名麦くんのところに居たんだね。サボってばっかりだと、去年みたいにギリギリになっちゃうよ？」

「そこら辺は計算してあるから大丈夫。去年も計算していたんだけど、予定外なことが起きたからギリギリだっただけだからさ。今年はそれも含めているから平気だよ」

我ながら言っていて不真面目極まりないと思う。まあ、これでも少しは真面目に近付いたのだけれど、教師陣はそれを認めずに、不真面目のレッテルを貼り続けたままだ。認められないのはつらいけれど、僕は教師が嫌いなので気にはならない。

「宵太はやれば出来るんだから、もう少し真面目になってくれると嬉しいな」

少し困ったように笑う芙和。僕はこの表情に弱い。だって可愛すぎるんだもん。だから頷くことしか出来ないのだ。

そんな僕たちのお隣りでも、恋人同士のやり取りが。

「柊くんがサボりなんて珍しいですね。御柳くんに誘われたわけでもないのに、どうしてです？」

「なんとなく、かな」

「そう答えると思いましたよ。幸いなことに、今日の一時限目は授業が進まなかったので、わからなくなるってことは無いですよ」

「そうか。ああ、そうだ。綾杉も食べるか？」

近馬がお菓子の袋を差し出しながら聞くと、依奈は満面の笑みで答えた。

「もちろんです。冷くん、いつも分けてくれてありがとうです」

「まあ、僕じゃなく天さんですけれど、どう致しまして」

そう言いながら、冷はいつの間にか煎れたお茶を七士さん以外に配った。七士さんは温かいお茶が嫌いなので、先程わざわざ僕が冷たいのを買ってきたのだ。そして、短い休み時間の雑談タイムが始まった。

「そろそろ体育祭の時期だな。今年も何処かに連れていかれたりするのかな？俺は去年みたいなことにならなければ良いと思うけど、この学校じゃ何が起きても不思議は無いよな」

最近よく話に出てきたイベントとは体育祭のことだったのだ。もちろん、普通の体育祭なわけがないのだが。

去年の話をすると、先ず僕らが連れていかれたのは無人島。そこで一週間のサバイバル生活。一切の道具を持たずに自身の身だけで生活するのは、想像を絶するほど苦難と困難の連続だった。気候上、病気になる心配はなかったし、なったとしてもすぐに対処できたらしいが、そんなことで楽観視出来るような状況ではなかった。この話の詳細はまたの機会にしておこう。

「そういえば、おっさんに聞いたんだけれど、今年の体育祭はあのお嬢様企画らしいって噂だ」

「え？天に聞いたのかい？あたしは何も聞いてないのになあ」

「それは、おっさんも学校に来てから聞いたからじゃないか？そうじゃないなら先に美恵留に話しているはずだし」

「なるほどねぇ。それにしても、お嬢様企画、ねぇ。単なる噂だとは思えないねぇ。本人も登場済みだし」

「え！……本当に？」

それに驚いたのは、珍しく芙和だった。普段はあまり感情を表には出さないのだが、やはり気になってしまうみたいだな。

「天里さん、それって本当なの？その……あの人がこの学校に来た

って」

「本当だよ、木薙ちゃん。だから御柳の側にいないとね。また誘拐されちゃうかもしれないからねぇ」

美恵留はきゃらきゃらと笑いながら冗談混じりに言ったが、芙和は本気で心配そうな顔になってしまった。

「あんまり芙和が心配するようなことを言うなよ、美恵留。僕なら平気だからさ。誘拐だって大袈裟に言い過ぎだ、特に何かされたわけでもないし」

「でも、御柳くんのことが好きなのは確かなことですから、油断は出来ないですよ。少しは芙和の気持ちも考えてあげてくださいよ」

お菓子を食べる手を止めた依奈が、鋭い目で僕を睨みながら言った。芙和のことになると敵対するのは、相変わらず、変わらないか。

「わかっているよ。おっさんもそういう意味で言ったのかな？まあ、気をつけると言ってもさ、あの破天荒なお嬢様からどう逃げろというんだろうな」

「俺たちといれば大丈夫じゃないか？冷後輩だけでも良いかもしれないが、多い方が安心だろう」

なるほど。毒を制すなら毒を、目には目を、ってね。確かに冷がいれば近づきにくくはなるだろうな。

「僕がいればって、確かに避けられていますけど、かなり不本意ですからね。僕の方から近づくと悲鳴にも似た声を出して逃げたり、

急に声をかけると発作を起こしたみたいに暴れたり、これでも結構傷付いているんですよ」

「素直じゃないだけじゃないのか？」

「それは違いますよ、柊先輩。そんな実は好きなのに素直になれなくて真逆の行為をするなんて、二次元の世界か小学生レベルの人しかやりませんよ。実際の世界でそんなことをする人はいません」

芙和は似たようなことをするけれどね。みんなといるときはクールな感じだけれど、二人きりになったら、みたいな。

「俺が見た感じではそんな気がしたんだけれどなあ……まあ、いいか。冷後輩がそう言うなら、そう思ってるってことだし、俺が意見する必要もないしな」

「近馬も冷も相変わらず、変わらないな。あのお嬢様は素直じゃないとか、ツンデレとかじゃなくて、単に嘘吐きなだけじゃないのか？と、僕は思うけれど」

「なんか……その言い方、少し嫉妬しちゃうな」

僕にしか聞こえない程度の声で芙和が呟いた。ちょっと不機嫌にさせてしまったらしい。

「ほら、てめぇら授業が始まるから帰れ。俺様が怒られたら大変だ」

七士さんのその言葉で話を中断し、冷以外の僕たちは教室に戻った。この続きは放課後に先延ばしだな。

しかし、その前に先手を打たれた。昼休みに芙和と二人で、例の

屋上で手作り弁当を食べた後に、僕は誘拐されてしまった。

第三章　◆九頁◆

誘拐といっても、目隠しもされていなければ、口も塞がれていない。手足も自由だし、むしろ不自由なところが無いくらいだ。どうやらここはA棟にいくつかある倉庫の中の一つみたいで、そこら辺に用具が散乱している。

そしてその光景に似合わない人物が、僕の正面に立っていた。

「ご機嫌よう、御柳宵太様。諸事情によりあなたを誘拐させていただきました」

口元を扇で隠して、うふふ、と上品に笑いながら堅苦しく話すこの人こそ、お嬢様の天上院唯（てんじょういんゆい）だ。

「あら？いまいち状況を掴めていないようね。いいわ、説明致しましょう」

扇をすっと、僕の方に向けて、また話し出した。わざわざ説明してくれるというので、僕は黙って聞くことにした。

「今朝、あなたが居るか、いくつか場所を訪ねたのですが、ことごとくすれ違ってしまい、結局見つけたのは昼休みでした。しかも彼女とご一緒だったので声をかけづらく、誘拐することにしたのです。体調に悪影響の無いように、薬品類は一切使っていないのでご安心を」

誘拐という手段にたどり着いた理由が、理解できないが、一応気遣ってくれているらしい。まあ、それについても理解できないが。

「そういえば、冷と会ったんだろ？」

「いいえ」

あれ？おかしいな。美恵留の話だと保健室にも来たはずなんだけれど。芙和に話したってことは嘘なわけがないし。あいつは人を心配させるような嘘を言うわけがないはずなんだけれどな。

「冷様を見かけた瞬間に逃げましたから、誰にも見られなかったはずです」

ということは、美恵留はその一瞬で見たということか。動体視力が化け物レベルだ。

「会っていけば良かったのに」

「そそそ、そんなこと出来るわけないじゃない！私の心臓及び身体の組織が爆発してしまいます！」

「気持ち悪いな……」

「表現的な意味でです！真に受けないで！まったく、あなたを好きだと公言してからというもの、冷様との距離は縮まない一方なのですよ！」

「勢いで言ったのはお嬢様の方でしょ？」

「そうですが……あれは、その……」

段々と声も小さくなって俯いてしまった。僕のことを好きだと公言しているが、実は冷の気を惹きたいだけという事実を知っているのは僕だけ。完全に巻き込まれた形だ。まったくもって迷惑な話だけれどね。

すると、二人の黒服がお嬢様の両サイドに現れた。入と出という呼び名の、執事というか側近というか、そんな感じの人らしい。たぶん僕を誘拐した実行犯もこの二人だろう。

「お嬢様は傷付きやすい故、お手柔らかに頼みます。もう硝子細工のような人なので、シャボン玉を掴むぐらい柔らかくお願い致します」

ちなみに、今話したのは入の方だが、出の方が話したのは聞いたことがない。入の方は割と表情豊なのだが、出の方は無表情というか、仏頂面のままだ。

「……私だって冷様に想いを伝えたいわよ」

回復したお嬢様が少しずつ話し始めた。

「でも、それが出来ないのよ。冷様は素直で正直な方でいらっしゃるから、想いを伝えた時を考えると怖くなってしまうの。だから、私は決めたの。今年の体育祭を私が企画して、優勝賞品を私にしようとね」

「それで僕に協力してほしいと？」

「その通りよ」

なるほどね。だから誘拐したのか。これでやっと理解できた。つ

まり僕が一人にならないと、話せないから誘拐したのか。それならそうと早く言ってくれれば良いのに。その答えなら僕が産まれる前から決まっている。

「全力で拒否する」

「そうよね、あなたなら協力してくれると思っていたわ。心配なさらなくても、それなりの報酬は用意させていただくわ。それで、企画の内容だけれど――って拒否するなあ！」

お嬢様でもノリツッコミが出来るんだなあ、と素直に感心。でも、少し長めなので減点だな。

「失礼、取り乱してしまいました。どうして拒否なさるのかしら？私に協力すれば報酬が得られるのに」

「自分の想いぐらい自分で伝えなよ。無理だと言う前に、先ずはやってみな。最初から他人の力を借りたり、何かのせいにするのはムカつくよ」

「なっ……何よ、ばか！ばーかばーか、ばーかばーか！み、見てなさい！この”天上院家、唯が独占”のこの私に出来ないことはないんだからね！冷様にだって想いを伝えてやるんだから！」

”天上天下唯我独尊”と似ていて、まるで暴走族の台詞みたいだ。それにしてもキャラが定まらないお嬢様だな。

「御柳宵太様、お嬢様の決心を固めていただきありがとうございます。我々はこれで失礼します故、宵太様は教室に戻られて結構です」

なんだか知らないが結果オーライなのかな？僕は単に文句を言っただけのつもりだったのになあ。まあ、話が終わったのなら、おとなしく戻らせていただくとしよう。早く戻らないと授業に間に合わなくなる。

お嬢様がぶつぶつと呟きながら自分の世界に入っていたので、黒服の二人にだけ会釈をして部屋を出た。やはり、思った通りA棟の倉庫だった。窓から見える景色から察すると四階だな。つまり、屋上から戻ってきたところを誘拐されたのか。

教室に戻ると、芙和が駆け寄って来た。

「宵太、大丈夫？急にいなくなっちゃったから心配したんだからね」

「ちょっと誘拐されてきた」

「な、何かされなかった？」

「んー、逆に発奮させてきたかな」

「え？どういう意味？」

きょとんとした顔の芙和が強烈に可愛かったので、とりあえず抱きしめた。驚いた芙和に叩かれたのは言うまでもない。

「まあ、お嬢様の背中を押してきたんだよ。頑張れってね」

「ふーん、よくわからないけれど、宵太が無事なら良かったよ。でも、心配させたから罰ゲームね」

「何をすれば良い？内容によっては従うよ」

「学校が終わったら一緒に帰る」

「喜んで。極めて了解」

楽しそうに、幸せそうに無邪気な笑顔を見せる芙和に、僕の心はショート寸前。やはり抱きしめずにはいられない。しかし、またしても平手打ちがクリーンヒット。

「抱き着きすぎだよ！」

「だって芙和が可愛すぎるから」

「ななな、何をいきなり！ここが教室ってことを忘れないでよね！発情するなら、せめて二人きりの時にしてよね！」

やっぱり、このキャラは芙和だからこそだな。とりあえず、もう一度抱きしめておこう。そして、平手打ちが炸裂される。

第三章　◇十頁◇

午後の授業を終えて、生徒がそれぞれの部活に向かう中、僕は芙和に捕まっていた。

「もう勝手な行動は許さないんだからね、ばか宵太」

どうやら、まだ昼休みのことを怒っているらしい。誘拐されたのは不可抗力なのになあ。まあ、クラスメイトがいる前で抱きしめたのは確かに僕が原因だけれど、でも平手打ちで怯んだところに腕ひしぎ十字固めはやりすぎだと思った。

「だからって、ここまでやる必要があるのか？」

「当然でしょ？」

さも当たり前のように言っているが、今の状況を説明すると、僕の両手首は縛られている。そして、そこに繋げた紐を芙和が持っていると、文字通り捕まっているのだ。

「こんなことしなくても、単に手を繋いだり、腕を組めばいいじゃないか」

「え？腕ひしぎ十字固めのリクエスト？」

「違うって！つーか、そういうキャラは美恵留のはずだろ？」

「うん、天里さんにいろいろ教えてもらったからね。他にも技があ

るけれど、やってみようか？」

「その言い方の可愛さに了承してしまいそうになるけど、絶対に嫌だからな」

まったく、美恵留のやつめ。芙和にそんなことを教えたら、キャラ被りが発生してしまうじゃないか！自分の存在を消す気か？まあ、どうせ『最低限の防衛術ぐらいは覚えておいた方が良いよ』とか、そういう理由だろうけれど。

「じゃあ、仕方ないから宵太にだけ本音を教えてあげるよ」

そう言うと芙和は僕の耳元に口を近づけた。わざわざ耳元で言わなくても、他の生徒はとっくに部活に行ってしまったので僕たちしかいない。

「かぷ」

噛まれた。

「痛ってぇ！」

「甘噛みしただけでそこまで騒がないでよね」

「八重歯でやったら、甘噛みでも痛いだろ！」

「せっかく二人きりなのに雰囲気が台無しになっちゃった」

あーあ、と溜息混じりに言いながら、芙和は近くの机に寄り掛かった。

そりゃあ、僕だって男の子ですし、近寄り難い雰囲気があるとはいえ芙和は綺麗だ。長い黒髪からはシャンプーの良い香りがするし、欠点といえば性格ぐらいだろう。

「宵太、どうしたの？あ、間違えた。ばか宵太、どうしたの？」

「……いや、いつになったら僕を自由にしてくれるのかな、と」

「そんなの決まっているじゃない」

にこっと笑いながら悪魔の囁き。

「死んだ時だよ」

少しだけ背筋が寒くなった気がした。

性格に難があるとはいえ、それはツン状態の時だけだ。デレ状態になれば１８０度どころか、一周半の５４０度は性格が変わる。僕としてはどちらの性格も好きだから構わないんだけれど。

「じゃあ、部室に行こうか」

「その前に僕のことを解放してくれよ。芙和から離れないからさ」

「んー、まあいいか。変な勘違いをされても私が困るしね」

「僕は困らないとでも？」

「宵太は喜ぶでしょ？そういう噂が流れているけど」

「そんな不本意な噂を流したのは誰だ！」

「私だよ」

「僕は明日から何を信じていけば……」

「冗談だよ、宵太」

段々とデレ状態になってきた芙和は僕の頭をひと撫でして、両手首に縛った縄を解いてくれた。両手が自由になった僕は、先程までの仕返しも含めて芙和を抱き上げた。しかも、お姫様抱っこだ。

「ちょ、ちょっと宵太、降ろしてよ！」

「スカートを押さえていないと中が見えちゃうよ？」

「……むぅ」

これで両手を封じて一安心だ。

「これなら離れないでしょ？」

「で、でも……恥ずかしいじゃない……」

「大丈夫だって。部活で忙しくて、誰にも見られないよ」

「でも……重くない？」

うわ、やっべぇ。超絶可愛いぞ、これ。

「重いわけないだろ」

「……それなら、このままでも良い……てゆうか、このままが良い……」

本当にこの子は僕の心を鷲掴みにしてくるね！なんかもう、良い！萌え！蕩れ！最高！

そんな感じで心踊りまくりな僕は、芙和を抱えたまま渡り廊下を通って部室へと向かった。その途中にまだ赤面したままの芙和が話しかけてきた。

「そういえば、私たちってデートとかしないよね？」

「そうだね、ほとんど毎日学校で会っているしね。土曜日とか日曜日でも授業が入ったりするわけだし」

太刀守高校は校風自体は緩いのだが、授業に関してはとてもシビアだ。一週間のうちに進めるべき範囲が終わっていない場合、土日を使って埋めるのだ。ただし祝日は例外で確実に休みになるので、特に不満はない。

「だからね、今度の休みにデートしない？」

「へ？」

突然の提案に僕の思考はしばらく停止。そして、再度作動したところで理解する。

「嫌……かな？」

「そんなわけないよ！是非お願い申し上げます！いやあ、楽しみで

夜しか寝れないな！」

「それが普通なの。授業中に寝てるのは宵太だけだもん」

「うん、だからこれからは授業をちゃんと受けるよ」

「じゃあ、サボりもなるべくしないようにしてね？」

「うん、了解だ」

さすが芙和だな。『なるべくしないように』ってところが良い。理解ある彼女がいる僕は幸せ者だな。

A棟四階の一番奥にある、ミステリアス研究会の部室の前で、僕と芙和はいろいろ落ち着かせた。さすがに、顔を赤くしたまま入れないからな。

ある程度落ち着いたところで扉を開け、中に入った。既に他の四人は揃っていて、例の六角形に並べた机の自分の位置に座っていた。しかし、他にも見知らぬ女子生徒が一人いた。

「宵太ん、活動依頼だぞ」

近馬のその一言で、なんとなく状況が掴めた。つまり、この女子生徒はお客さんというわけだ。僕たちの部活、ミステリアス研究会の活動内容は《なんでも屋もどき》だ。生徒や教師、保護者を問わず依頼があればそれを聞き、対処する。もちろん、僕たちが全ての依頼を対処出来るわけがないので、出来ない場合は七士さんのカウンセリングを紹介したり、他の解決策を見つける。まあ、《気軽な相談処》と考えてくれれば良い。

僕と芙和が席に座ったところで、依頼内容を聞くために近馬が口を開いた。

「気軽な感じで話してくれて良いからな。じゃあ、先ずは依頼内容を聞こうか」

「えっと……あのぅ……」

すると、女子生徒が遠慮がちに質問した。

「学年とか名前は言わなくて良いの？」

「それを聞いても俺たちに意味は無いからな」

「そう。なら、単刀直入に言うわ。私、告白したいの」

第三章　◆十一頁◆

「告白？そんなの自分一人で出来るじゃないか」

そんな風にもっともな意見だが、思いやりの欠片もない台詞を口にしたのは美恵留だった。言われた本人である女子生徒は驚いている。まあ、仕方のないことだろう。相談に来たはずなのに、いきなり辛辣な言葉を浴びせられたのだ。それにしても、この女子生徒を何処かで見たような気がする。

「そ、それが出来るのなら苦労しないわよ！一人で出来ないから力を貸してほしいの！」

「別に力を貸すのは良いんだけれどねぇ、それであんたは満足するのかい？あたしは一人でやるからこそ意味があると思うんだよねぇ」

すっげぇまともな意見に僕は驚いた。それに美恵留がここまで積極的に意見を言うなんて、珍しいにも程がある。いつもなら退屈そうに聞いているだけなのに。

「いいから力を貸しなさいよ！告白なんてしたことなくて、困っているのよ！」

「それは単に甘えてるだけだねぇ。誰もが初めての時は困惑するよ。でもねぇ、それを自分で乗り越えていかないといけないんだよ。あたしたちが力を貸してやれるのは、あんたの告白の練習ぐらいだねぇ。どうかな？冷を練習台に今やってみなよ」

「い、いえ！冷さ――あ、いえ、その方以外でお願いしたいのですが……」

あ、あー、わかった。この女子生徒はお嬢様が変装しているのか。お嬢様、天上院唯と分かっていたから美恵留は多弁になっていたのか。知りつつも冷を選ぶとは相変わらず、変わらないな。

「僕って嫌われ者？」

そして素直に落ち込むやつが一名。正直なのも考えようだな、まったく。

「冷、気にするなよ。たぶんあの子は冷を気遣ってくれているんだよ。ほら、僕たち以外と関わらないから、対人恐怖症だと思われているんじゃないかな？」

「あの人ってタイ人なんですか？てっきり日本人だと思ってました」

「いや、タイ人恐怖症じゃなくて、対人恐怖症だからな！なんだよ、そのマニアックな病気は！」

「あー、対人でしたか。びっくりしましたよ、御柳先輩」

この後輩はばかだな。ばかと正直を兼ね備えた、ある意味でばか正直だ。まあ、とりあえず僕のフォローで冷の心は傷つかなかったので良しとしよう。

「えっと、お相手の方ですが、そちらの方にお願いできますか？」

お嬢様が指名したのは僕――でわなく、近馬だった。もちろんそ

れを黙って受け入れない人間が一名。当然、依奈のことだ。

「うちは絶対に反対ですよ！練習とはいえ、柊くんを相手にするなんて……うちが告白した時はぶつかっていきましたよ。練習なんてする必要はないんですから。いや、練習したって変わらないです。その時になればわかりますが、告白の瞬間って自分の心臓が抑えられないんですよ。どきどきして、破裂しそうなぐらいです。相手にも聞こえるんじゃないかなってぐらいですよ。考えられますか？あなたにも出来ます！だから今すぐ行きましょう！」

「おい、依奈。早まるなよ。勝手に話を進めて混乱させるな」

「だってこのままだと柊くんが……」

「近馬は大丈夫だから。近馬はそれぐらいで心変わりするようなやつじゃない。そんなことぐらいわかるだろう？」

「うぅ……不覚にも御柳くんに説得されてしまいました」

依奈が落ち着いたところで話を戻すか。

「で、近馬が相手なら出来るのか？」

「は、はい……たぶん」

「俺も相手役を努めようじゃないか」

「じゃあ、早速やってみなよ」

近馬が席から立ち上がり、お嬢様と向かい合う。お嬢様というと、

先程までは自信が全くない感じだったが、今では普段通りの顔付きになっていた。とはいえ、変装中なので違和感たっぷりだ。

「私とお付き合いしなさい！」

「ごめんなさい」

「なっ、何がだめなのよ！」

「言い方だな。上から目線だし、偉そうなのが気に喰わないな」

おぉ、ばっさりだな。お嬢様と知らないとはいえ、いや、知っていたとしても近馬ははっきり言うな。お嬢様の方は予想外の反応に顔が引き攣っている。

このままでは正体がばれそうなので、選手交代で僕登場。

「わ、私と付き合いなさ……じゃなくて、付き合いませんか？」

「ごめんなさい」

「またなの？何がだめなのよ！」

「上手くは言えないけれど、心に響かないんだよなあ。もっと、個性的で情熱的な感じで言ってみなよ」

「御柳くん、気持ち悪いです」

「うるさいぞ」

僕としては少し楽しんでいるんだ。あんな高飛車のお嬢様が、変

装してまで僕たちに助けを求めているんだ。まあ、僕と美恵留にはばれちゃったけど、他の人が知らないうちは演じ続けるしかないから、これは楽しむしかないよ。

「私と付き合ってほしいにゃ」

「ごめんなさい」

「あんたのことが好き！いや、嫌い！大嫌い！二回死ね！」

「ごめんなさい」

「あなたが好きだからー」

「ごめんなさい」

「私が付き合ってあげると言っているの。光栄に思いなさい」

「ごめんなさい」

「あんたと付き合える人間なんて、私ぐらいしかいないんだからね！」

「ごめんなさい」

そろそろ限界かな？

僕が十分に楽しんだところで真打ち登場。やはり、冷本人に言うのが一番だろう。

「えっと……僕は先程拒否されましたけど」

「いいから相手役をやってあげなよ。あんたも別に良いよねぇ？」
美恵留が意地悪そうにお嬢様に聞く。うん、僕も楽しんでいたが、一番楽しんでいるのは美恵留だな。
「わ、わかったわよ！」
冷とお嬢様が向かい合った。どうするんだろう？素直に想いを伝えるのかな？それとも、恥ずかしさのあまり暴走するのかな？
「あ、あなたのことが好きです……あなたさえ良ければ、その……私とお付き合いしていただけませんか？」
素直に想いを伝えた。とても真剣な想いだった。冷は少しの沈黙のあと、それの答えを出した。
「良いですよ」
「え？じゃ、じゃあ――」
「はい、その調子で実際に告白すれば良いと思います。今までで一番素直な言葉だったんじゃないかと思います。飾らずに想いをそのまま伝えてください」
「え？えっと……」
「僕も先輩たちも応援していますから。良い結果になることを祈っていますよ」

さすがは冷だ。凄く良い笑顔で、凄く残酷な仕打ちをしている。
お嬢様と気付いていないからこその行動だけれど、それにしても恵まれないというか、不憫なお嬢様だな。

第三章　◇十二頁◇

「え、えっと……で、では、私はこれで失礼致します。いろいろとありがとうございました」

心境は複雑ながらも、姿勢正しくお辞儀をして、お嬢様は去っていった。そういえば黒服の二人はどこにいるんだろうか？まあ、すぐ近くに潜んでいるんだろう。

「さあて、と。お嬢様ちゃんも大変だねぇ。告白一つに悩みすぎるなんてねぇ」

お嬢様が退室して早々、美恵留がばらしやがった。当然、知らなかった四人は驚いて、何がなんだかわからないといった表情をしている。まあ、無理もない。僕だって『冷様』と言いかけなければ気付かない程の変装だったのだから。

「……あれ？ということは、本当の告白の相手って宵太だったんじゃないの？」

「でも、御柳くんは断りまくってましたよね。唯ちゃんは今頃ズタボロになっているんじゃないですか？」

「それは心配ないだろ。本当のことを言うと、僕のことを好きだっていうあの公言は嘘だしね」

「じゃあ、唯ちゃんは誰のことが好きなんです？」

「つーか、依奈はよくお嬢様を名前で呼べるよな」
「別に良いじゃないですか。御柳くんこそ誤魔化さずに言ってくださいよ！」
「内緒の秘密」
「意味を重複しないでください！」
「黙秘権を行使する」
「くうぅ、ムカつくです！芙和、助けてください」
「え……でも、それは個人情報だから、宵太の方が正論だよ」
「でもでも、知りたくないですか？」
「知りたくないって言ったら嘘だけど、宵太じゃないってわかったから安心しちゃった」
「……芙和、そんな恥ずかしい台詞を、みんなの前で言っているのに気付いていますか？」
「……あ」
依奈に言われて状況を把握したのか、芙和の顔がみるみる赤くなって、最高潮に達したところで部屋の隅で小さくなって、何かぶつぶつと呟き始めた。これって僕も少し恥ずかしいよな。
「仕方ないです。唯ちゃんの好きな人を聞くのは諦めますよ。次の

質問です」

「却下だ」

「まだ言ってないです！」

「聞く気も無いってことだよ」

やはり依奈をあしらうのは楽しいな。何度やっても本気の反応が返ってくる。まあ、やりすぎは禁物だ。芙和と近馬のダブルパンチを喰らうことになる。

「別に許可無しに聞くから良いですもん。今日はどうして遅れたんです？いつもなら誰よりも早く来ているじゃないですか」

この質問には僕の代わりに近馬が答えた。

「それは違うぞ、綾杉。宵太んはサボった時にここに避難するから、早く来ている印象があるだけだ」

「つまり、御柳くんの不真面目さが、うちの頭に焼き付いた結果というわけですか。不真面目なのに勉強はそこそこなんて、世の中は平等じゃないですね」

「何言ってんだよ。僕以外はみんな上位に入る成績だろ。そういう台詞は僕より依奈が下だった時に使うべきだ」

「うちは御柳くんなんかより下の成績になってしまった、そういう方たちの気持ちを代弁したまでです。呪われてしまえば良いです」

「まあ、僕がそこそこの成績を保てるのは、依奈も含めてみんなのおかげだからな。感謝はしているよ」

「その割には誠意が伝わってこないですよ。むしろ、悪意が伝わってきます」

「誠意を込めた冗談を言っているじゃないか」

「そんなの嬉しくないです！」

うん、やはり楽しい。

これ以上やるとさすがに怒られそうなので、依奈をからかうのは中断。あくまで中断、ね。なので、しばらく冷と美恵留のやり取りを眺めることにした。

「ひーえーるーちゃん、おいでよ」

「いきなり何？」

「無愛想だねぇ。他の人には礼儀正しいのに、どうしてあたしの時は無愛想なのさ？」

「美恵留が僕をいじめるからだよ」

「いじめてなんかいないよ。逆に可愛がっているじゃないか」

「可愛がり方が異常だけれど」

「そうかい？抱き着いたり、抱きしめたり、抱いて絞めたりするぐらいじゃないか」

「最後のが危ないんだよ！なんで抱いて絞めるの？明らかに首を絞めているじゃないか！」

「単なる愛情表現じゃないか」

「愛憎表現って感じだよ！」

「あたしは自分を救ってくれた恩人に、恩返しをしているだけなんだけれどねぇ」

「それなら痛みも苦しみもなくやってくれ」

「それじゃあ恥ずかしいじゃないか。あたしは木薙ちゃん以上に恥ずかしがり屋さんなんだよ」

「それは初耳だな」

「あたしも初めて言ったよ」

きゃらきゃらと笑いながら楽しそうに会話する美恵留とは逆に、冷は呆れたように溜息を一つ吐いた。冷の性格上、美恵留の相手をまともにやってしまうので、疲れてしまうのだろう。例えるならば、酔った上司の相手をする部下、といったところだろう。

「相変わらず、変わらないなあ」

「なあ、宵太ん。いつもの台詞を言っている時に悪いんだが、今回は一応解決ということで良いのかな？」

「まあ、良いんじゃないかな。本人もお礼を言って帰っていったしさ」

「じゃあ緋鳥んのところに回さなくて平気だな。最近は忙しいだろうから、正直な話回したくはないんだ」

「まあ、それでもあの人は仕事を完璧にやるだろうけどね」

僕のそれに対し、近馬がははっと少し笑うと、依奈の相手をし始めた。僕もそろそろ芙和のアフターケアでもするかな。

「……ああ、どうしよう……恥ずかしいよぅ……私はもっとクールなキャラのはずだったのになあ……デレ解禁しちゃったのかな？これじゃあ私が私じゃなくなるよ……」

なんだか、ものすごい重傷らしい。キャラ破綻を起こす前にどうにかしないと。

「あの……芙和さん？大丈夫でしょうか？」

「宵太？……大丈夫じゃないよ。思い出しただけで壊れちゃいそうだよ」

「まあ、今日の芙和は一日中可愛かったよ。照れている時も含めてね」

「ば、ばばば、ばか宵太。それが原因で私は今こうなっているの」

「それも含めて芙和なんだから良いじゃないか」

「そんなこと言われても嬉しくなんかないんだからね」

「わかってるよ」

「それにしても、こんなはずじゃなかったのになあ……”上手く回避するはずだったのに”」

「なんのこと？」

「あ、ううん。なんでもないの」

何はともあれ、段々と立直り始めてくれたので良かった。これでキャラ破綻は免れただろう。

その後は、全員でいつも通り、下校時刻を知らせる不協和音のチャイムが鳴るまで雑談をし、僕たちは解散した。

～後日談～　その三

後日談の前に、前言撤回などが多く、設定が曖昧になっているので、もう一度確認しておこう。ただし、今この場で伏せるべきものは伏せるので、あしからず。

季節は春と夏の間のような、そんな六月の後半辺りだ。

先ずは、御柳宵太。

黒髪を無造作に伸ばした、無気力のような二年生男子。彼は姉の夜凪と、妹の黄泉と一緒に暮らしている。母親は既に亡くなっていて、父親は失踪中。姉や妹については説明するほどでもないだろう。

次に、木薙芙和。

やや長めの綺麗な黒髪で、ツンデレ気味の二年生女子。彼女の両親は亡くなっていて、お祖父さんと暮らしている。神主であるお祖父さんの手伝いで、巫女をやることもある。

宵太と芙和が付き合い始めたのは、一年生から二年生にかけての春休み、つまり割とつい最近からだ。

続いて、柊近馬。

軽く茶色が入った短めの黒髪で、掴み所がないような二年生男子。彼も両親がいない。なので父親の弟である叔父と二人暮らしをしている。叔父が喫茶店を経営していて、忙しいときは手伝っている。

そして、綾杉依奈。

長い黒髪を縛りいろいろな髪型に変える、いろいろと小さい二年生女子。彼女の両親は共に海外働きで、家にはメイドと二人だけ。とはいえ、家が屋敷とか財力が無限などということではなく、単に親代わりのような理由で雇っているだけだ。そして依奈は、近馬の家の喫茶店でバイトをしている。

近馬と依奈は一年生の大晦日から付き合い始めた。

お次は、比名麦冷。

金色のメッシュが入った少し長い黒髪で、ばかで正直者な変態の一年生男子。彼の両親は、美恵留の実の両親と共に事故死してしまっている。今は親が遺した実家に七士と住むが、それまでは児童施設にいた。ミステリアス研究会の中では、彼だけが一年後輩である。

そして、天里美恵留。

肩にも届かない程度に揃えた茶髪で、飄々としている二年生女子。先程記したように、彼女の両親も事故死。同じく児童施設にいたが、後に白羽（しらばね）家に引き取られる。高校生になり、実の両親の遺した実家で一人暮らしをしていたが、二年生のゴールデンウイークに天と親子になる。これについては白羽家も了承済みだ。

ここでミステリアス研究会を紹介しよう。

設立直後はただの怠慢の集まりだったが、部活名の命名者でもある顧問の七士の指示で、簡易相談所のような部活になった。今では利用者もそれなりで《なんでも屋》みたいな活動をしている。部室はA棟四階の一番奥の部屋を利用している。

「それにしても僕たちの部活も随分と有名になったよな」

「私たち最初は会話すらしなかったのにね」

「俺と宵太ん、木薙と綾杉、あとは美恵留んが孤立していたよな」

「今思うと、うちらがいじめているような光景でしたね」

「僕が知った時には既に仲良く見えましたけれど」

「いけ好かない不良教員があたしたちを変えたのさ」

と、いうことで、次は緋鳥七士。

縛れるほど長い黒髪に少しだけ赤色のメッシュを入れている、言

葉も性格も態度も悪い、保健室勤務兼スクールカウンセラーだ。まだ若いのに仕事は優秀で、なんでも出来る器用な人。名目上は保護者として、冷の家に居候している。
次に紹介するのは、天里天。
短い金髪で実年齢よりも若く見える、饒舌多弁でおしゃべり好きの、私立太刀守高校購買経営者。過去から流れてきた人間で、実験の被験者。実際は美恵留の曾祖父に当たるが、六十年流れた故に、まだ父親として見ても若い年齢だ。始めは美恵留に関係を隠していたが、後に明かしてめでたく親子になった。
お嬢様の天上院唯と、浮浪者の東雲斗乃については記載することが無いのでスルー。
長くなりましたが、後日談に移ります。

〜宵太と芙和の場合〜

「ねぇ、宵太。話したいことがあるから、付き合ってくれるかな？」

「うん、いいよ。じゃあ、近馬のところの喫茶店に行こうか」

この話は次章に続く！

〜近馬と依奈の場合〜

「今日も宵太んにいろいろ言われたな」

「助けてほしかったです」

「あはは、悪いな。あまりにも楽しそうに見えたからな」

「まあ、楽しいですけど……あ、そうだ。柊くんは、唯ちゃんが御

柳くんのことを好きじゃなかったことに、気付いていたんですか？」

「なんとなくだけどな」

「やっぱりですか。それを聞いた時の柊くんが驚いていなかったので、そんな気がしていたんです」

「まあ、宵太んが好かれるのは難しいからな。ぶっちゃけ、ありえない」

「御柳くん、ひどい言われようですね……」

「ほら、宵太んは無気力な感じに見えるからな」

「そんな御柳くんのどこを好きになったのか、今度芙和に聞いてみます」

「素直に答えてくれなそうだな」

「あうぅ……」

的確な指摘をされて頭を悩ませる依奈と、その頭を撫でる近馬。やはり、仲が良い。

～冷と美恵留の場合～

「お嬢様ちゃんが御柳を好きだっていうのが嘘で良かったねぇ」

「え？なんで？別に僕には関係ないじゃないか」

「関係あるじゃないか」

「……あ、そうか。僕の御柳先輩を奪われる心配がなくなったもんな！」

「冷はばかだねぇ。既に木薙ちゃんが奪っているじゃないか」

「僕は昼ドラのようなドロドロ関係じゃなければ良いんだ」

「つまり、三角関係が嫌いってこと？」

「そういうことだ！」

「ああ、そうかい」

やれやれといった風に溜息を吐く美恵留と、妙な発言の多い冷。今更冷の発言は気にも止めないが、本当にやれやれだ。

〜七士と天の場合〜

「七士くん、聞いてくれるかい？実は美恵留ちゃんとの会話の仕方がいまいちわからないんだ。あの子は基本的には寡黙なところがあるから、ぼくみたいなのは苦手に思ったりしているんじゃないか心配なんだよ」

「天さんは気にしすぎだ。美恵留だってあんたに嫌われないか心配なんだ。お互いがそうだからぎこちないだけだ」

「そうなのか。それなら――」

数分後、愚痴の吐き出し合いが始まった。

〜唯の場合〜

「またしても、失敗。いや、失態かしら。それにしても、急いで企画を変更しないと。この企画だと皆様に迷惑がかかってしまうわ。やはり私情を挟むようではだめね。冷静によく考えなくちゃ」

意外といい人なお嬢様でした。

〜斗乃の場合〜

「そろそろ、ここともお別れかな……いや、もう少し、もう少しだけ留まろう」

第四章　◆一頁◆

「――っていう夢を見たんだよ」

学校の帰りに二人で寄った喫茶店の席で、芙和の話を一通り聞いた宵太は素直に驚いていた。

「つまり、正夢ってやつ？」

「うん、そうなるのかな」

驚く宵太とは反対に、芙和はいつもと変わらない様子で、まるでそれが当たり前とでもいうかのように、淡々と話している。芙和は目の前の紅茶を一口飲み、こちらを凝視したままの宵太に、「どうかしたの？」と一言聞いた。すると宵太は軽く身を乗り出し、目を輝かせながら答えた。

「だってさ、凄いじゃん！正夢でしょ？つまり、予知夢ってことだよね？」

「宵太、今日はどんな夢を見た？」

「え？」

いきなりの質問に戸惑う宵太に対して、もう一度はっきりと区切りながら芙和は聞いた。

「宵太、今日は、どんな、夢を、見た？」

「え……と、はっきりとは覚えていないけれど、芙和から貰った弁当に罠が仕掛けてあった」

「む……そんな夢を見たのか。ひどいなあ、宵太」

「単なる夢じゃないか」

「まあ、そうだね。でもね、それも実は予知夢なのです」

ずびしっ、とポーズを決めている割に、口調は淡々としたまま芙和は宵太に向けて言い放った。

「どうして？実際に起きていないから正夢じゃないだろ？」

「うん、正夢ではないね。でも、予知夢なのです。あのね、正夢の反対の言葉って知ってる？」

宵太はしばらく唸りながら考え込み、答えが出たところで口を開いた。

「正夢の反対だから……嘘夢？」

「ぶー、違います。正夢の反対は逆夢っていって、夢で見たことが現実に起きないものなの。だから、これも予知夢と言える。それが起これば正夢、起きなければ逆夢、ってね。まあ、占い師の言い回しみたいなものだね。でも、さすがに現実味のある夢に限ることだよ、これは。アニメとかゲーム、漫画や小説の世界にいるような夢は別物だから」

「へぇ、芙和は随分と博識なんだな」

「宵太は”薄識”だね。発音は一緒だけど、字はこれね」

淡々とした口調ながらも、笑顔でそう言いながら、紙ナプキンに”薄識”と書いて宵太の前に出した。宵太は困ったような表情で「相変わらず、変わらないな」と言いながら、それを芙和に返した。

この喫茶店は近馬の父親の弟、つまり叔父さんにあたる柊真人（まさと）の経営する店だ。店の裏には家もあり、近馬はそこで真人と暮らしている。忙しい時は近馬に頼んだりと関係は良好。店の名前である【ホーリー】は苗字の柊を英語にしたものだ。

「でさ、その夢の続きはどうなるの？学校で起きたことは聞いたけど、それ以降はまだ聞いていないからさ」

「天変地異が起こって、各地に核爆弾が投下され火の海に。空気汚染によって太陽の光が届かなくなり、この世の大半の生物が死滅します」

「うわー、わかり易い嘘だな」

「信じないの？」

「さすがにそこまで僕もばかじゃないよ」

「そっか。じゃあ宵太はやっぱりあんな風に死んじゃうんだ」

「……」

「苦しいだろうなあ」

「……」

「あんな死に方では成仏なんて出来ないよ」

「……えっと、どんな死に方なの？」

「嘘だと思っているなら、聞かなくても良いんじゃないかな？」

「いや、そんな言い方されると気になっちゃって」

「じゃあ教えてあげるよ。辛うじて核爆弾から逃れられた宵太は、地下シェルターに潜り込んで生きようとするの。でも、あまりの寒さに我慢できなくなった宵太は、焚火をして寒さを和らげようとしました。なんとかこれで寒さは和らぎ一安心です。しかし、そこは地下。ですから十分な空気の循環が行われるわけもなく、宵太は一酸化炭素中毒により死亡してしまったのでしたとさ」

「僕ただの間抜けじゃん！しかも焚火なんて随分と古風だし、逆に用意しにくいだろ！それって周りの人から見れば、練炭自殺している人にしか見えないし！」

「誰も見ていないから大丈夫だよ」

「そういう問題じゃない！僕の命が大丈夫じゃないしね！」

「でも、火が広がれば火葬もされて一石二鳥だよ？酸素が無くなれば生焼けで残っちゃうけれど」

「僕は何の得もしていないし、むしろ損しかしていないな。つーか、

せめて焼かれるなら、ちゃんと焼かれたい」

「まあ、夢は下校チャイムが鳴って終わりなんだけれどね」

「結局嘘かよ！」

こんな会話が出来るのも、客がいないおかげだろう。この店には馴染みの客ぐらいしか来ないので、ほとんど空席なのだ。店側からすれば大きな問題なのだが、それでも利益の計算が上手いのか、バイトを一人雇う余裕はあるようだ。

「はい、どうぞ。店長さんからのサービスです。それと御柳くん、大きな声は控えてください」

そのバイトというのが、今フルーツケーキを運んできた依奈だ。店員姿の時は髪の毛をポニーテールにしている。依奈は一年生の春からずっと働いているので、慣れたように仕事をこなしている。

「真人さん、いつもありがとうございます」

「いや、良いんだよ。近馬くんと仲良くしてくれているお礼みたいな物だから」

芙和が会釈をしながらお礼を言うと、真人は優しく笑いながら謙遜的な態度で言葉を返した。見るからに若い真人は、まだ二十代の中盤。近馬の父親とは歳の離れた兄弟だったのだ。

フルーツケーキを食べながら、宵太は再び話し始めた。

「下校チャイムまで夢って言ったけどさ、つまりほぼ夢と現実が同じだったってことだよね？」

「そうだね。宵太の視点だったのは不思議な感覚だったけど、宵太の行動と照らし合わせても同じだったし」

「まるで監視されていたような感じは否めなかったよ。それで、芙和にはよくあることなの？その、正夢というか予知夢というか」

「だから、夢なんてほとんどが予知夢なんだよ」

「いや、そうじゃなくて。そこまではっきり現実と合う夢はどうなの？ってこと」

「最近は見なかったけれど、前はよく見ていたよ。時期的にいえば一年生の始めの頃までかな」

「何か意味でもあるのかな？」

「ただの夢、意味なんて無いよ。だからそんなに深く考えないで平気だから、ね？」

優しい表情、そして優しい口調で芙和が言うと、宵太は素直に頷いた。芙和が淡々とした口調でなくなったということは、軽くデレ始めているということだ。

宵太が美味しそうに食べるのを見ていた芙和もフルーツケーキを一口食べた。

「このケーキ美味しいね」

第四章　◇二頁◇

カランカラン、と扉が開く音がしたので宵太と芙和が反射的にそちらを見ると、お嬢様と行動を共にしている黒服の二人が入ってきた。それにしても、今時珍しい仕様のレトロな喫茶店である。これも店主の真人の趣味なのだが。

「いらっしゃいませ。カウンター席とテーブル席はどちらに致しますか？」

「じゃあ、テーブル席をお願いしますよ」

答えたのはもちろん入の方だ。出は相変わらず無表情のまま口を閉ざしている。

「では、こちらの席へどうぞ」

「わざわざ、どうも――あ、いや。あちらの席でもよろしいでしょうか？」

真人が席を案内しようとすると、入が宵太の姿を発見し、その近くの席を希望してきた。真人は一瞬戸惑ったが、希望通りの席へ案内した。

「お昼にお会いして以来ですね、御柳様。放課後にはお嬢様のご相談のお相手をしていただいたそうで、ありがとうございます。そちらの方は御柳様の恋人である木薙様ですね？我々は唯お嬢様にお仕えする入と、こちらが出でございます。出は寡黙故に話すことは少

ないですが、どうかお気になさらずに」

「こんにちは。遠目でなら何度か見かけたことがありますが、本当に見分けがつかないですね」

「我々はお仕えする身故に個性というものを排除しなくてはならないのですよ。自然に溶け込めるぐらい地味にならなくてはね」

ははははっ、と軽快に笑いながら話す人。確かに彼らには個性というものがほぼ無いと言える。黒い髪は適度に短く切られ、顔はサングラスで隠れているし髭も剃ってある。服は黒いスーツで、履いている革靴も黒。全身真っ黒の二人を見分けるには、話す以外には無理なんじゃないかという程だ。

「そういえば、お嬢様の側に居なくて良いんですか？それとも今日の仕事はもう終わりとかですか？」

「いやいや、違いますよ、御柳様。お嬢様は只今企画の再考案中ですので、一人になりたいとおっしゃられまして、我々は少しの休憩時間をいただいたのです。どうやら、御柳様に言われたことで自分の過ちにお気付きになられたようで。事前にお気付きになられたのも、御柳様とその御友人の方々のおかげだとおっしゃっていました」

やはり出とは真逆で、表情豊かに語る人。そこへ依奈がおしぼりと水を運んでくると、今度は依奈に向かって話し始めた。

「あなたは……綾杉様ですね。お嬢様のことを名前で呼ばれる方がいらっしゃるとは常々お聞きしていましたが、そうですか、あなたですか」

「えっと……あの……唯ちゃんの執事さんたちですか？」

「我々は執事などではございませんよ。ましてや側近でもなければ、ＳＰでもございません。しいて言うなれば、お仕えする者。それ以上でもなく、それ以下でもなければ、それ以外でもございません」

入がそう言うと出と席を立ち、最初に案内されるはずだった席に移った。宵太たちから離れた席だ。入口からは背中を向けていた芙和をちゃんと確認できなかった為に近付いたが、芙和がいるとわかったら気を遣い離れたというわけだ。恋人二人が会話する側にわざわざ座るのは悪いと思ったのだろう。

黒服の二人はコーヒーを注文すると静かになった。といっても、出の注文も入がしたのだが。

「わあ、びっくりしちゃった。入さんと話したのが初めてだったから緊張したよ」

「まあ、あの姿だけで威圧感があるからね。僕も最初は驚いた。入さんがとても気さくに話すから拍子抜けしちゃったしね」

「二人とも若く見えるけれど、何歳なんだろう？」

「知らないけど、七士さんと同じくらいじゃないかな？」

「双子なのかな？」

「兄弟でもなかったと思うよ。そっくりに見えるのはあの服装だからじゃないかな？」

「宵太はよく知っているんだね」

「まあ、お嬢様と関われば必然的にあの二人とも関わるから――って、芙和？どうかしたの？」

宵太が答える度に芙和の表情は暗くなっていた。お嬢様が宵太のことを好きだというのが嘘だとわかっても、心の何処かではまだ嫉妬してしまうのだろう。

紅茶を一口飲んで、芙和は自分を落ち着かせた。それでも、やはり不安な様子だった。

「ごめんね、宵太。天上院さんが宵太のことを好きなんじゃないかって不安で……」

「それはお嬢様の嘘だって話したじゃないか」

「うん。でもね、やっぱり不安なんだよ。実はそれも嘘で、本当に宵太のことが好きかもしれないって思っちゃうし」

「大丈夫だから。本当に嘘だから」

妙な日本語になりながらも、宵太は芙和を安心させようと笑顔で言う。しかし、芙和はまだ不安そうな表情のまま変わらない。そこで宵太は、本当のことを話すことにした。

「じゃあ、芙和にだけ教えてあげるよ。実はお嬢様――」

「御柳様」

しかし、それは入によって止められた。

「御柳様、お嬢様の許可無しに言ってはなりません。せっかくお嬢様が純粋に頑張ろうとしている矢先に、そんなことをされてはなりません。あなたは仮にもお嬢様に雇われている身であることをお忘れなく。週に一度のバイトでご自身の学費を稼げるのも、偏にお嬢様のおかげなのですから」

「あ……ごめんなさい。つい芙和を安心させたくて」

「……とはいえ、木薙様を不安にさせたままではこちらも忍びない故、我々が説明致します。お名前を出すわけにはいきませんが、お嬢様は一人の男性に想いを寄せている最中です。もちろん、その方は御柳様ではございません。その方に出会ったのは、半年程前の雨の日でした。まるで捨てられた仔犬のように座り込んでいるところを我々が保護したのです。お嬢様がご自分で面倒を見るとおっしゃり、我々は手を出さずにいました。懸命にお世話をするお嬢様は、とても幸せそうに見えました。しかし、数日後にはその方の施設の責任者が迎えに来たのです。いくらお嬢様といえどまだ未成年故、その方を引き取ることは出来ません。別れの際にお嬢様はあの性格故、思っていることとは真逆のことを言ってしまいました。その方はとても悲しそうに笑いながら去っていきました。そして、お嬢様は気付いたのでしょうね。恋をしてしまったことに」

「あのぅ……もしかして、その方って比名麦くんですか？」

「何故わかったのですか、木薙様！」

そう言った直後、入は「……しまった！」と言い、自分の過ち、既に答えを言ってしまっていることに気が付いた。しっかりしているようで、少し抜けているようだ。

第四章　◆三頁◆

「どうかこのことは内密にお願い致します！我々の忠誠心が揺らいでしまった、そのように捕らえられるこの今の状況を、どうか他言無用にしていただきたいのです！」

入は直後に土下座をし始めた。狭い店内なので、先程の話はもちろん依奈と真人の耳にも入っている。

すると、いつからそこに居たのか、私服姿で裏口に繋がる扉に寄り掛かっていた近馬が、真人に状況を説明してもらっていた。

「なんだ、天上院の好きな相手がばれちゃったのか。と、宵太んだけは知っていたのか？まあ、当然といえば当然か」

「近馬も知っていたのか？どうして？」

「俺は何となくそう思っていただけだよ。勘だ」

近馬は眠っていたのか、欠伸をしながら「真人、甘いコーヒー頂戴な」と言いながらカウンター席の端に座った。すかさず依奈が水とおしぼりを運んで、近馬の目の前に置いた。

「お、偉いな、綾杉。だが、俺を客扱いするなと言っているだろう？タダでコーヒーを飲みに来るやつは客じゃないからな」

笑顔で言いながら、よしよしと依奈の頭を優しく撫でる近馬。嬉しそうに笑う依奈の頭を、そのまま撫で続けながら近馬は話を戻した。

「で、天上院が冷後輩を好きだということを黙っていれば良いのか？それなら、心配しなくても言うやつなんていないさ」

「でも、さっき、御柳くんが芙和に話そうとしていました」

「ほら、宵太んは阿呆だから」

「おい！それは聞き捨てならないぞ、近馬！僕のどこら辺が阿呆なんだ？」

「まあ、全体的にだな」

「そんなことはない！」

「否定できないなあ」

「いやいや、否定しましょうよ、芙和さん！」

宵太が必死に否定するのを無視して、入が冷静に喋りだした。

「では、皆様は他言無用を承諾された、と思ってよろしいのですね？ありがとうございます、助かりました」

「報酬は無いのかい？」

先に言っておくが、こんなあくどいことを言う人間は先程のメンバーの中にはいない。宵太でも芙和でも近馬でも依奈でもなく、真人や入、ましてや寡黙な出であるわけがない。第一、声がした方向はその中の誰でもない、入口から聞こえたのだ。

「天里様、それはどういうことでしょうか？」

その人間とは、当然と言えば当然。天里美恵留だった。

「そのままの意味だよ。お嬢様ちゃんの秘密を守ってやるんだから、それなりの報酬を出してもらわないとねぇ」

意地悪く笑いながら、近馬から一つ離れたカウンター席に座った。依奈が水とおしぼりを持ってこようとすると、それを無言で止め、入の方を向き、また話し出した。というよりは交渉に近い。

「あたしたちは普通の人間だからねぇ、割とうっかり話しちゃうなんてこともあるんだよ。だから口止め料として何かを貰わないと、保証は出来ないんだよねぇ」

「……何をすればよろしいのでしょうか？」

「そうだねぇ……」

間を溜めながら美恵留はちらりと真人の方を見る。そして、次に入を。何を提示されるか、まったく予想のつかない入は、強張った表情のまま冷や汗を流しながら身構えていた。すると、美恵留がゆっくりと口を開いた。

「ミルクティーとレモンティー、それとフルーツケーキにチョコレートパフェ、サンドイッチ盛り合わせとスナックセット、それからチョコミントドリンクに特製レモネード、抹茶セットに和風パフェだねぇ」

早口で矢継ぎ早にメニューを言う美恵留に、どう反応して良いのかわからない入は、ただ唖然としているだけだった。反応が無いので美恵留は席を離れ、入の目の前にメニューを突き出した。

「これをご馳走してくれるのなら黙っていてあげるって言っているんだよ。どうするんだい？この条件じゃ嫌なのかい？」

「……いや、わかりました。では、天里様も他言無用ということでよろしくお願い致します。では、柊様。いや、近馬様ではなく、真人様の方で。先程天里様がおっしゃられたメニューを出してもらってもよろしいでしょうか？」

「わかりました。じゃあ、依奈ちゃんも手伝ってくれるかな？あと、近馬くんも頼むよ」

「はい、もちろんです」

「了解だ。すぐに着替えてくるよ」

依奈は真人と一緒に手際良く用意し始め、近馬は飲みかけのコーヒーを置いて着替えにいった。戻るなりこちらも手際良く作業を始める。その様子を見ながら満足気に笑う美恵留を見て、入が不思議そうに問いかけた。

「天里様、本当にこれでよろしいのでしょうか？我々としてはもっと無理難題を押し付けられる覚悟でいたのですが」

「あたしを何だと思っているんだい？もちろん、これで良いんだよ。これ以上要求する気も無いしねぇ。何よりあんたが焦った姿を見れて満足なんだ」

要するに遊び半分の交渉というわけだ。元々、美恵留は人の弱みに付け込むやり方が嫌いな質なので、それを知る人間なら軽く流せただろう。

「それにしても、お一人でこんなにお召し上がるとは、正直驚きですよ」

「あんた、ばかぁ？ってアスカちゃんの真似をしちゃうよ？あたし一人で食べ切れるわけがないじゃないか。みんなで分けるんだよ。あんたたちも食べていくかい？」

「いえ、我々はそろそろ戻らなければなりませぬ故、ゆっくりするわけにはいかないのですよ。コーヒーを飲み終わったら我々は失礼致します」

「そうかい、それは残念だねぇ。柊、悪いけど三人分のサンドイッチを持ち帰れるようにしてくれるかい？お嬢様ちゃんたちの分だから、よろしくねぇ」

「了解だ」

「天里様、よろしいのですか？」

「あんたたちが払うからねぇ。何も無しってわけにはいかないさ」

「ありがとうございます。ああ、柊様、お嬢様はサンドイッチの中身はジャムしか食べられませんので、よろしくお願い致します」

「了解だ」

近馬は持ち帰れるように箱に詰め込み、出の方に手渡した。もちろん、出は無言で受け取ったが、軽く会釈だけはした。

「では、我々はお先に失礼致します。代金の方はこちらに置いておきますので」

テーブルの上に美恵留が頼んだ分まで、一円単位で正確に置いて、入と出は店を出ていった。

「ほら、みんなで食べようじゃないか。真人も綾杉ちゃんも柊も来なよ。あたしの奢りだよ、ってこの台詞言ってみたかったんだよねぇ」

きゃらきゃらと笑いながら、注文した品を手渡していく。全員に行き渡り美恵留が楽しそうに合掌。

「いただきます」

第四章　◇四頁◇

「ふぅ、美味しかったですよね、あのお菓子たち」

宵太たちが帰り、客のいなくなった店内を掃除しながら、依奈は近馬に話しかけた。近馬は洗い物の最中だ。ちなみに、真人は売り上げをチェックする為、裏の家の方にいる。

「そうだな、真人の作るものはなんでも美味い。本人の前では言えないがな」

「なんでもと言いますが、柊くんは甘いものしか食べてなかったです。病気になっちゃいますよ？」

「でも、あの超天才探偵のLだって甘いものしか食べていないぞ？」

「あれは漫画だからです。実際なら糖尿病とかで苦しむことになりますよ」

「それなら、小説でも平気だな」

「どういうことです？」

「いや、なんでもない。それより、綾杉。帰る時は言ってくれ、送っていくからさ」

「いや、大丈夫ですよ。柊くんに悪いですから」

「俺のことなら気にするな。真人から聞いたんだけど、最近の夜道は危険らしいぞ。通り魔みたいのが出るらしい」

「そそそ、それなら柊くんも危ないじゃないですか！うちを送ったあとは一人で帰ることになりますよ？」

「だから、俺のことは気にするな」

近馬がそう言うと、依奈は掃除の手を止めて、近馬が洗いものをするカウンターの中に入ってきた。

「柊くんがいなくなったりしたら……うち、悲しいです。生きていけないです」

「心配するなよ、綾杉。そういう噂があるだけで、実際に遭った人はいないんだから」

「でもでも、噂は何も無ければ出来ませんもん。もしかしたら柊くんが遭うかもしれないですよ？」

「心配しすぎだって。明日にはまた会えるから、な？」

「でもでも……」

近馬は洗いものを終えて、依奈に向き直り目線を合わせ、優しく笑顔で一つ提案を出した。

「そんなに心配なら、泊まっていくか？」

「え？それは、その……嬉しいお誘いですが……でもでも……ゆか

りちゃんに悪いし……泊まりたいですけど……うぅ……」

「そっか。それなら、俺が泊まりに行こうか？」

「え？でもでも、それだと朝のお手伝いが出来なくなりますよ？」

「行ってきて良いよ、近馬くん」

そう言ったのは、いつの間にか戻ってきていた真人。壁に寄り掛かりながら笑顔で続ける。

「元々は一人でやっていたことだし、近馬くんは毎日やってくれていたから少しは休んでもらわないと」

「真人、本当に良いのか？」

「もちろんだよ。いや、むしろ命令かな？お養父さんからの命令だ。依奈ちゃんといてあげなさい」

「真人からの初めての命令だな。なんだか嬉しいよ」

にっこりとお互いに笑い合う。真人は「あとはやっておくから」と言って、近馬と依奈を店から出した。早く行きなさい、そういうことだろう。出たところで依奈は振り返り、真人に頭を下げた。

「店長さん、ありがとうございます。お疲れ様でした、おやすみなさい」

「ああ、おやすみ」

依奈は真人に挨拶すると、近馬のあとを追いかけた。
近馬は荷物を持ってくる為、一度家へ戻った。依奈は部屋に案内されると、緊張しているのか入口に立ったままでいた。

「どうした、綾杉？座らないのか？」

「あ、は、はい。座ります」

ぺたん、とその場に座る依奈を見て、近馬は軽く笑いながら近づく。

「そこじゃなくて、部屋に入って座りなってこと。適当な場所に座って良いからな」

近馬が再び荷物をまとめに戻ると、依奈は近馬のすぐ側に座った。近馬は半分呆れながらも、優しく依奈の頭を撫でた。
荷物をまとめ終わったところで、近馬はまだ緊張したままの依奈を連れて外に出た。夏が近いというのに、少し涼しく感じる、そんな空気だった。

「綾杉、大丈夫か？」

依奈はびくっと身体を震わせた。

「だ、だだだ、大丈夫です！それにしても暑いですね！夏ですもんね、温暖化ですもんね！」

「割と涼しい気がするが」

「あ、そうですね！それにしても美恵留ちゃんは、どうして急に来

たんでしょうか？わからないです、わからないです！」

「美恵留んが来た理由は、天上院が好きな相手を冷だと気付いているのか、俺に聞く為だって言っていたじゃないか。それに、それを聞いたのは綾杉だったろ？」

「そうでしたね！みんなとお茶会をしている時に聞きましたね！だめです、頭がオーバーランです！」

「迷い猫か？」

「にゃあ、間違えました、オーバーヒートです！」

あたふたと混乱中の依奈を静める為に、近馬は後ろから抱きしめた。といっても、身長差があるので、寄り掛かっている風に見えなくもない。

「ひっ！び、びっくりです、柊くん！」

「これで落ち着いたか？」

「へ？あ、はい。取り乱してすみませんでした」

「まあ、今更綾杉のそれを大変だとは思わないさ。どちらかと言えば楽しんでいるし」

「うぅ……いじわるです」

笑いながら言う近馬の腕をぎゅっと握りながら、依奈は恥ずかしそうに言った。

依奈が落ち着いたところで、手を繋ぎながらまた歩き出した。月の光と、点々とある街灯に照らされながら歩く二人の影はまるで親子のよう。しかし、二人は恋人同士。依奈が依存してしまっているのは、付き合う前から一目瞭然なのだが、近馬もまた依存しているのだ。自覚が有るのか無いのかはまだ不明だが、確かに依存している。してしまっている。

二人が雑談しながら歩いてから十数分が経ち、綾杉家に到着した。通り魔どころか、人一人すれ違うことがなかった。

「依奈さん、おかえりなさい」

出迎えてくれたのは綾杉家でメイドとして働く、ゆかりだ。彼女はまだ若いが、かなり以前から住み込みで働いている。依奈にとってはまるで本当の姉のように、既に家族として慕われている。

「ゆかりちゃん、ただいまです。今日は柊くんがお泊りに来ました」

「それでは近馬さんのお食事も用意してきますね。少々時間がかかりますので、先にお風呂に入ってきたらどうでしょうか？」

「ひ、柊くんと一緒にお風呂……そんなの恥ずかしいです！」

「いや、綾杉。一緒にとは一言も言っていないぞ？急に来てしまって悪いな、ゆかりん」

「いえ、依奈さんが喜んでくださることは、嬉しいことです」

にっこり笑いながらそう言うと、ゆかりはキッチンに向かっていった。メイドを雇っていても、家はごく普通の一軒家なのだ。

依奈は振り返り、近馬に向かって一言。

「えっと……お先にお風呂どうぞ」

第四章　◆五頁◆

「やはり、風呂は良いな」

ふぅ、と大きく息を吐きながらリラックスする近馬。先程の依奈の言葉に甘える形で、先に風呂に入る近馬は考えていた。

（ラブコメとかお色気漫画の場合は、ここで綾杉が入ってきたりするんだろうな。もしくは、俺が風呂から出た時に、何らかの理由で服を脱いでいる途中に鉢合わせ、『きゃあ☆ばかばか、えっちぃ！』みたいな展開になるだろうが、その心配は無いだろう。そんなの主旨が変わってくるもんな）

そんな戯事を考えながら、ゆっくりと湯舟に浸かる。そんなことが起きたら、苺が百パーセントだったり初恋が限定だったり迷い猫がオーバーランしてしまう。

律儀に百まで数えてから湯舟を出て、脱衣所で体を拭く。一通り拭き終わり、下から順に着替えていると――ガラッ！

「柊くん、ご飯の用意が――」

しばらくの沈黙。そして、近馬が口を開く。

「ん……と。きゃあ、ばかばか、えっち？」

「すすす、すみませんでした！」

悲鳴にも似た言い方をしながら依奈は出ていった。近馬はたいし

て気にする素振りを見せずに、まだ濡れている髪の毛を拭き始めた。
着替え終わった近馬が脱衣所を出ると、出たすぐ横に依奈が顔を真っ赤にしながらしゃがみ込んでいた。どうやら近馬が脱衣所から出て来るのを待っていたらしい。

「あの……柊くん。ごめんなさいです」

「ん、何がだ？」

「その、は、はだ……裸を見てしまって……です」

「ああ、別に。裸って言うけど上半身だけだし、問題無いさ。俺の方こそびっくりさせてごめんな」

「いえ、うちは大丈夫ですよ。えっとえっと……ご飯の用意が出来たみたいなので呼びに来たんです」

「そっか。でも、綾杉が風呂から出るまで待っているよ。ゆかりんにもそう伝えておくからな」

「わかりました。じゃあ、早く出るようにしますね」

「おう。まあ、ゆっくりで良いけどな」

近馬は依奈の頭をひと撫ですると、とりあえずリビングに向かった。リビングにはゆかりの姿が見えなかったので、キッチンを覗くと食器を出している最中だった。

「ゆかりん、悪いんだが綾杉が風呂から出るまで待ってくれるか？無理を言ってすまないが」

「いえ、大丈夫ですよ」

ゆかりは出し揃えた食器の上にクロスを掛けながら答えた。ゆかりはティーカップを取り出して、それに紅茶を注いで近馬に「どうぞ」と手渡す。

「ゆかりんはここで働き始めてどのくらいなんだ？」

「働き初めてだと十年になりますね。うちが高校生の頃から働かせてもらっていたので。ただ、この家にはもう二十年近くお世話になっております。母が働いている時に一緒に来ていたので」

「ということは、綾杉が産まれる前から来ていたのか。なるほど、通りで慕われているわけだ」

「依奈さんとは幼い頃より一緒にいたので。まるで、姉か母のように思われているんじゃないでしょうか。うちも妹のような感じで接していますから」

ゆかりは自分の分の紅茶を飲み、嬉しそうに話した。すると、思い出したように近馬に問いかけた。

「そういえば、今日はどうして急にお泊りに？いえ、迷惑だとかそういうのではなく、明日も学校なので疑問に思ったんです」

「あー、えっと、真人から聞いた話なんだが、通り魔が出るっていう噂があるんだ。といっても、被害者はまだいないし大丈夫だとは思うんだが、そういう噂が流れているのに綾杉を一人で帰すわけにはいかないだろ？そこで家に泊まらないかって誘ったんだが、ゆか

りんに悪いからと断られたんだ。じゃあ逆に、俺が泊まろうかと聞いたら、こういう流れになったんだ」

「そうですか。それにしても……通り魔。物騒な話ですね」

とても物騒ですね、とゆかりはもう一度繰り返した。

その後は、依奈が風呂から出て来るまではしばらく雑談をして暇を潰した。依奈が戻ったところで、三人一緒に夕食を食べた。先に食べ終わったゆかりは自室に戻っていった。近馬と依奈も食べ終わり、二人は食後の紅茶を飲みながら話し始めた。

「柊くんはいつも何時に寝ているんです？」

「だいたい十二時前には寝ているかな。とりあえず日付が変わる前には寝るようにしている」

ちなみに現時刻は九時十一分。

「もっと遅くまで起きていると思っていました。うちと同じぐらいなんですね」

「早く寝るように真人にしつけられてきたからな。まあ、両親もそういう人だったしな」

「柊くんのご両親は厳しい人だったんですか？」

「いや、そうことはなかった。ただ、寝る時間にはうるさかったかな。真人も同じことを考えると、同じように育てられたんじゃないかな」

「店長さんが柊くんに厳しくしているのが想像出来ないです」
「真人も厳しい時はあるぞ。ただ、真人の場合は怒る時ですら静かだから、違う怖さだったよ」
そんな風に話していると、十時を過ぎる頃には依奈がとうとうとし始めていた。
「綾杉、そろそろ寝るか？」
「柊くんと一緒にいるです……」
「じゃあ、俺も寝るよ」
「でもでも……柊くんはまだ眠くないですよね？いつもは……まだ寝る時間じゃ……ないですもん」
「気にしなくて良いから寝るぞ」
うとうとしながら喋る依奈を、半ば無理矢理抱えて近馬は依奈の部屋に向かった。依奈をベッドに寝かせたところで近馬は気付いた。
「綾杉、俺はどこに寝れば良いんだ？空いている部屋を使えば良いのか？」
「ん……むぅ……」
眠そうに瞼を擦りながら、少しずれて作ったスペースをぽんぽんと叩いた。要するに隣で寝て、ということだろう。

「……まあ、いいか」

近馬は少し考えた後、特に気にせずに依奈の横に寝た。すると、依奈は自分の腕を近馬の腕に絡めるように抱き着いた。さすがの近馬もこれには驚いたらしく「あ、綾杉？」と、依奈の体を揺すり起こした。かろうじて目を開けた依奈は疑問符を浮かべて聞いた。

「どうしたんです？」

「いや、いきなり抱き着かれて驚いたんだ」

「……だめですか？」

「だめってわけじゃないが」

「じゃあ、このままが良いです」

そう言うと依奈はいよいよ眠り始めてしまった。近馬も抵抗を諦めたのか、そのままの姿勢で寝ることにした。

「綾杉、おやすみ」

と、近馬は依奈の方を向いて、髪を結っていない状態の頭を撫でながら言った。

やがて依奈を抱える姿勢へと変わり、近馬も眠りについた。

第四章　◇六頁◇

「えっとえっと……あうぅ……どうしよう……柊くん？起きてます？……やっぱり返事が無いです……」

朝になり目覚めた依奈は驚いていた。自分の隣に近馬がいて、仰向けの身体の中央には赤黒く染まってしまっているナイフが刺さっていたのだ――

――なんてことはなく、単に近馬が隣に寝ていることに戸惑っているだけなのだ。昨晩、寝る前の記憶があやふやな上に、起きたら抱きしめられている状態。うろ覚えの記憶をどうにか辿って思い出そうとするのだが、集中しきれずに結局思い出せなかった。

依奈は身動きが取れないので、そのまま抱きしめられたままでいた。本人としてもかなり嬉しい出来事ではあるので、幸せ満喫中と言えるだろう。その証拠に表情が幸せそのものだった。

「もう少しこのままでいたいです」

自分からも身を寄せるようにして近馬に近づいた。これも近馬が寝ているが故に出来る行動だ。起きている時なんて恥ずかしくて出来るわけがない。そして、依奈は呟くようにもう一言だけ言った。

「柊くん、大好きですよ」

「はっきりと言われるのはこれで二度目かな？」

「ひゃう！」

突然聞こえた近馬の声にびくっと思わず身体を震わせた。

「ひ、柊くん、起きていたんですか？」

「ああ、綾杉が何か喋っているのが聞こえて目が覚めた」

「寝起きなのに普通に喋れるんですね」

「まあな、俺って寝起きが良い方らしいから。それより、綾杉。話を逸らすな」

「あ、うぅ……」

「俺も綾杉のことが大好きだぞ」

「ひゃう！」

突然の近馬らしからぬ発言に、依奈はまるで悲鳴のような声を出して驚いた。確かに、近馬は寝起きか良い方だ。しかし、寝起きのテンションがおかしいのだ。元々、おかしいと言えるがこの時はまるで別人。普段言うはずのない台詞を言ったり、いきなり妙な行動をしたりと、よくわからなくなる。

そんなことを知らない依奈は、ものすごくドキドキしていた。

（どうしよう、どうしよう、どうしよう！柊くんにこんな風に言われるなんて思っていなかったです！これは、夢ですか？夢ですか！なんだか、幸せです！でもでも、心臓が爆発しそうなくらいドキドキです！うわあ、どうしたら良いかわからないです！）

「ぎゅ」

言葉通り近馬が依奈のことを、更に抱き寄せた。他人が見ればいちゃついているようにしか見えないような光景だ。抱きしめられている依奈本人は、嬉しさと恥ずかしさで言葉も出ない状態。しかし、現状をしばらく満喫する依奈だった。

「――ってことが今朝あったんです」

時間が流れてその日の放課後、依奈は嬉しそうにミス研のメンバーに朝の出来事を話した。六角形に並ぶ机の自分の席ではなく、近馬の膝の上に乗りそれを語る依奈は、まるで夢見心地のようだ。朝の変なテンションでそんなことをしてしまった近馬は、珍しく赤面して恥ずかしそうに俯いていた。

すると、つまらなそうに聞いていた宵太が口を開いた。

「それって単に近馬のミスだろ？寝起きの近馬の近くにいる人間は被害者確定だからな。それをうっかり近馬が忘れたから、抱きしめたり変なことを言って依奈を浮かれさせただけの話だな」

「ちょっと、宵太。そんな言い方は無いでしょう？依奈が可哀相だよ」

「いや、寝起きの近馬がトラウマなだけ。確かに、言い方が悪かったけれど、僕は近馬にファーストキスを奪われているんだ」

「……え？それ本当なの？宵太」

「残念ながら、芙和ではないのですよ」

宵太の突然の暴露に周りは静まり返った。先程まで幸せいっぱいだった依奈の表情も絶望色に染まっていた。芙和は少し引き攣りながら更に質問をした。

「それって、何歳の時？」

「確か……五歳の時だな。お泊り会をやった時にやられた」

「四歳だぞ、宵太ん」

「あれ？そうだっけ？じゃあ、四歳だ」

「そんなのはファーストキスとは言えません！」

芙和は若干安心の色を見せながら宵太に言った。それを聞いた依奈も、安心して近馬に寄り掛かった。宵太はにやにやと笑みを浮かべながら、

「それなら、僕のファーストキスは芙和だね。良かった良かった」

と、言った。ただ単に芙和をからかっただけのようだ。

赤面する芙和と戯れだした宵太を放っておいて、冷が話を戻した。

「依奈先輩、それで、どうなったんですか？ちゅーとかしちゃったんですか？良い雰囲気でしたもんね！つーか、ここでちゅーしちゃってくださいよ！」

「冷、テンションが上がりすぎだよ。これじゃあ、綾杉ちゃんが話しにくくなるじゃないか。で、どうなんだい？ちゅーしちゃったのかい？」

「し、してないですよ！てゆうか、しても言わないですもん！」
「あれ？しなかったのかい？そんな雰囲気にしても柊はちゅーをしなかったって言うのかい？へたれだねぇ」
「そんなにしているのを見たいのか？」
近馬が言うと、依奈の顔が真っ赤に染まった。本当にされると思ったのだろう。
「綾杉ちゃんが真っ赤だねぇ。かわいらしいじゃないか。ほら、柊。やれるもんなら早くやりなよ」
「ひ、柊くん。本当にやるつもりです？は、恥ずかしいですよ」
「もちろん、冗談だ」
「つまらないねぇ」
頬杖をしながら溜息を吐く美恵留。どうやら日常に退屈しているらしい。
すると、その日常をぶち壊すように部室の扉が勢いよく開き、その人物は現れた。
「さあ、逃げ惑いなさい。最後まであなたたちは生き残れるかしら？制限時間は無制限、範囲は私立太刀守高校の敷地内。ルールは簡単。二人一組のペアになり、ただひたすら逃げなさい。二人で協力しながら、ただひたすらに逃げるだけ。そう、これは鬼ごっこ。今年の抜き打ち体育祭はペア鬼ごっこに決定したの。そして開始は間

もなく。合図が鳴った瞬間に逃げ始めないと、早くも脱落しちゃうわよ？もちろん、これは体育の成績に関わるから、死ぬ気で逃げることね。ちなみに、鬼は先生教師方と、入と出が務めさせていただきます。優勝者及び、一番多く捕まえた鬼には賞品があるので、必死に追いかけてくると思いますので、気をつけてくださいね。それでは、スタート」

現れた人物、天上院唯が合図をすると、唯の背後から出が飛び出してきた。しかしそれを、宵太と芙和、近馬と依奈、冷と美恵留という組み合わせで、軽く避けて鬼から逃げ始めた。

と、いうことで抜き打ち体育祭が幕を開けた。

第四章　◆七頁◆

部室から逃げ出した冷と美恵留は、一気にA棟一階まで駆け降りて、今は呑気に廊下を歩いていた。時折、生徒の悲鳴にも似た声が聞こえるということは、嘘や冗談というわけではないようだ。それでも二人はいつも通り、緊張感皆無だ。

「なーんか、勢いで美恵留と逃げちゃったけれど、今からペアの交代って出来ないのかな？御柳先輩と逃げるんだったら楽しそうなのに」

「文句を言うんじゃないよ。恋人同士を引き離すなんて野暮なことは考えていないで、あたしたちが無事に逃げ切ることを冷の頭脳で考えなよ」

「それだよ、美恵留」

冷の言葉に視線だけで問い掛ける美恵留。冷は人差し指を立てながら説明を始めた。

「二人だけになる状況を作っちゃったら、何が起きても不思議は無いんだよ？それこそ、愛を深めている可能性大じゃないか。むしろ、深めていてほしい！」

「あんたの妄想話はどうでもいいとしても、そうだねぇ。御柳と木蓮ちゃん、柊と綾杉ちゃんってペアだから恋人同士仲良くしているかもねぇ」

「うはー！どんなことしているのかな？気になっちゃうな、気になっちゃうなあ！ねぇ、美恵留、先輩たちを探しに行こうよ」

「いや、だから、鬼ごっこ中なんだから逃げないと。あたしたちは逃げる側であって、追いかける側じゃないのをわかっているのかい？」

「わかっているよ、もちろん。でも、僕は自分の欲望には勝てないのさ」

「冷は本当にばか正直だねぇ。いや、ばかで正直なんだねぇ。とりあえず、安全かどうか、気にはなるから逃げながら探そうか」

「そんな余裕があるのかな？」

背後から聞こえる声に振り向くと、そこには金髪短髪ジャージ姿の中年購買販売員、天里天が立っていた。

「美恵留ちゃんたちを捕まえるのは心苦しいけれど、それでも担当になってしまった以上手加減をする気は無いからね。ぼくも一応は欲のある人間だからね、賞品を提示されればそれの為に頑張ってしまうよ。ああ、ちなみに、キミたちを担当するのはぼくと七士くんだけだよ。このシステムはお嬢様の唯ちゃんが考えたもので、一つのグループに二人の教員を担当させるんだってさ。だからペア鬼ごっこなんだね。キミたち以外にもターゲットはいるけれど、そっちは七士くんが片付けるらしいから、ぼくはキミたちを優先しに来たってわけ。まあ、ぼくたちも頑張るからキミたちも――」

「冷、逃げるよ」

「――って、まだ台詞の途中なのに逃げないでよ、美恵留ちゃん」
「あたしたちはヒーロー戦隊もののキャラじゃないから律義に相手を待ったりはしないよ」
「そうか、それもそうだね」
と、納得して手の平をぽんと鳴らす天を無視して、美恵留は冷を引っ張っていった。
向かった先はB棟二階にある、自分の教室だった。天の言う通り鬼には担当グループがあるようで、数人の教師とすれ違っても追われることはなかった。
「なあ、美恵留。どうして教室なんかに来たの？逃げるのには不利だと思うけれど。もしかして、帰巣本能ってやつ？獣は住み処に帰るって言うしな」
冗談ではなく本当に思っている冷は笑いながら言っていたが、それに何の反応もしないまま美恵留は目的のものを探していた。生徒個人に与えられている自分のロッカーから取り出したそれを冷に向けてにんまりと笑った。
「武器を取りに来たんだよ。あたしの相棒をねぇ」
それは赤いカラーバットだった。少し小振りなバットには達筆な文字で【悲しの天使ミカエル】と書かれていた。
「それってまだ持っていたんだ。てっきり捨てたのかと思っていたよ」

「天と住み始めてから、いや、天にあの言葉を言われてからは使っていないんだけどねぇ。でも、非常事態ってことで許して頂戴よ、冷」

「僕の許しなんていらないと思うけど、まあ、許すよ」

「じゃあ、逃げようかねぇ」

美恵留が教室から出ようと出入口の方を向くと、黒服の一人である人が現れた。

「これはこれは、美恵留様と冷様ですね。あなたたちに出会うまでに二、三十人は捕まえました。あなたたちも捕まえさせていただきますよ」

「鬼にはそれぞれ対象となるグループがあるんじゃないんですか？僕たちには緋鳥先生と天さんだと聞きましたが？」

「冷、たぶん黒服の二人はそれに縛られないフリーの鬼だよ。ほら、開始直後に出の方が捕まえに来たからねぇ」

「鋭いですね、美恵留様。我々は遊撃部隊ということです。本来なら鬼の情報は秘密なのですが、おそらく担当であられる、饒舌多弁の天様が喋ってしまったのでしょう」

溜息を吐きながらやれやれと肩を竦める入。しかし、呆れる素振りを見せながらも「まあ、構いませんけれどね」と言って話を続けた。出が無言の重圧なら、入はまるで有言の重圧だ。

「それでは、どう致しましょうか？出入口はこちら側にあります。

避けて突破しますか？そのカラーバットで戦って突破しますか？」

入は言うが、避けて通れるはずがない。まったく隙が見当たらないのだ。つまり、戦うのも無謀だろう。しかし、美恵留はにやりと笑ってその質問に答えた。

「そのどちらの誘いも断らせてもらうよ。あたしたちは隠れた答えを選ばせてもらうからねぇ」

そう言って美恵留は、ベランダの手摺りを飛び越えて姿を消した。続いて冷も同じように手摺りを飛び越える。入が慌てて下を覗き込むと、既に二人の姿は無かった。どうやら、逃げられなくなるような怪我はしていないようだ。いくら二階といえども校舎という建物は、一つの階が高く造られている。つまり、怪我をする可能性が高く、更に死ぬ可能性だってあるのだ。だから、真似しちゃだめだからね！

「これは、やられましたね。面白くなってきましたよ」

逃げられたのにも関わらず入は満足気に呟いて、他の生徒を捕まえる為に教室から出ていった。

「どうやら、逃げられたみたいだねぇ。冷にしては危ない策だったじゃないか」

「この学校って下の階のベランダに飛び降りることは出来る造りになっているんだよ。といっても、やる人なんていないから知られていないんだけれど」

美恵留と冷は地面に向かって飛び降りたのではなく、一階のベラ

ンダに降りていた。教室にある誰ともわからない机に座って一息つきながら今後について話し始めた。

「とりあえず、みんなを探しに行くかい？携帯とかの荷物は全部部室に置いたままだから……地道に探すしか無いねぇ」

第四章　◇八頁◇

「じゃあ、先輩たちが行きそうなところから探そうか。先ず思い当たるのは、保健室と屋上かな？」

「そうだねぇ、そこら辺が妥当だろうねぇ。ここはB棟一階の一年生教室だから、先に保健室に行こうか」

近いからねぇ、と付け加えながら美恵留は立ち上がった。冷もそれに続くように後を追いかけた。

場所は移り、A棟二階にある保健室。冷の予想の一つである保健室に、二人はいた。

「ねぇ、宵太……痛いよ……それに、きつい……」

「仕方ないって。僕もこういうのは初めてなんだから。それに、静かにしないと外に聞こえちゃうよ？」

「無理だよ……だって、あ……うぅ……痛ッ……宵太、もう、だ……だめ……」

「芙和、動いちゃだめだよ。う、うわ！」

ガタン、と激しく音を立てながらロッカーの扉が開き、二人は出てきた。言うまでもなく、宵太と芙和だ。

「もう、ばか宵太！何でこんなところに隠れたの！狭かったでしょ

！」

「慌てていたから、つい。でも、久々に芙和と触れ合えて嬉しかったよ」

「もう、ばか宵太」

ぺちっ、と軽く宵太の頬を叩きながら照れる芙和。二人は部室から逃げた後、保健室に逃げ込み、ロッカーの中に隠れていたのだ。決して怪しいことをしていたわけではない。

「ねぇ、芙和さん」

「何かな？」

「抱きしめても良いかな？」

「だめです」

「どうして？」

「今はそれどころじゃないでしょう？逃げないといけないんだから」

「あ、そういえば。でも、僕たちはいつまで逃げれば良いのかな？制限時間ってあるのかな？」

「それは、わからないけれど。でも、一緒に逃げ切ろうね」

「その笑顔に僕はノックダウン！」

バタッ、とベッドに倒れ込む宵太を無視して、芙和は今の状況を冷静に考えていた。鬼ごっこということは、鬼側から見れば終わりはあるが、逃げる側から見ると明確な終わりが無い。つまり、自分たちが勝つにはどうすれば良いのか、時間制限なのか、はたまた別のものなのか。

「何を一人で考えているのさ？僕を無視しないでよ」

後ろから抱き着かれた芙和は「ひゃう！」と、可愛い悲鳴をあげたが、すぐに呆れたように溜息を吐いた。

「宵太はわかっているの？これは体育の成績に関わるんだよ？いつまで逃げれば良いのかもわからないのに」

「わかっているよ、それぐらいはね。でも、長丁場にはならないはずだよ」

「どうしてそう思うの？」

「去年の無人島サバイバルでも一週間程度だったからね。鬼ごっこだし、長くても三日ぐらいじゃないかな？」

「でも、無制限って言っていたよね？」

「そうだっけ？でも、本当に無制限ならつらいね。そうなると最後の一組までやるだろうからさ。近馬たちは楽々逃げ切りそうだし、美恵留たちは無理矢理突破しそうだもんな。何か他に条件があれば良いのに」

「そうだね――って、宵太！どこ触ってるの！」

「え？鎖骨だけど」

「や、やめ…て……鎖骨は……弱いの……」

「鎖骨は、って芙和は基本的にくすぐったがりじゃないか」

「わ、わかっているなら……や、やめてよ……」

「可愛くお願いしてくれたらやめるよ」

「お、お願い…だから……許してぇ」

「もっと可愛く」

「宵太……お願い…にゃあ」

「もっと、可愛く」

「お願い……あうぅ…お願いします、宵太様」

「もっと、可愛く！」

「宵太のばか…変態ぃ……」

「はい、許してあげる」

「……宵太って本当に変態なんだね」

「しみじみ言われると傷つくから！」

この二人、というよりは宵太だけなのだが緊張感皆無だ。またしても、後ろから芙和を抱きしめた宵太は、先程の話の続きを始めた。芙和も、既に抱きしめられることには抵抗をやめて、宵太の言葉に耳を傾けていた。というよりは、それ自体は普通に受け入れている。

「時間無制限の無条件というものなら、お嬢様の単なる我が儘だよね」

「どういう意味？」

芙和が聞くと、宵太は更に強く抱きしめながら答えた。いや、答える上ではまったく意味の無い動作なのだが。

「ほら、冷を優勝させる為に裏工作だろうが、裏取引だろうが裏技だろうが好きなだけ出来るだろ？それで、優勝賞品は《天上院唯ご利用権》みたいなものにすれば、お嬢様の我が儘が成立。で、他の生徒に不満が出ないように成績を調整してやれば、万事解決、一件落着っこと。抜き打ち体育祭を名目上に、冷とデートする為のものなのかもしれない」

「もし、それが本当なら、私たちはまるでピエロだね」

「だから僕はこうしてピエロはピエロなりに楽しもうとしているのさ」

と、ぺろりと芙和の耳を舐めた。

「ん、や……な、何するの！」

「ピエロらしく道化を楽しもうかと思っていてね。それにしても、今の声をもう一度聞かせてほしいな」

「絶対に嫌だからね！もう、びっくりしたでしょ！」

後ろにいる宵太にもわかるぐらいに、芙和の耳は赤く染まっていた。ベッドに座る二人は、いつの間にか普段と変わらずに談笑を始めていた。鬼ごっこ中であることを忘れて。

「俺様の聖域を汚すのは誰だ？万死に値するぜ。もし、それが御柳だったり宵太だっりする名前のやつなら即死決定だ。死んでも殺し続けてやるぜ」

「あ、七士さん。どうしたんですか？そんなに息を荒げて」

「やっぱり宵太か！即死決定だ、こら！」

七士は勢いをつけて宵太に拳を振りかぶってきた。慌てて芙和を連れてそれを避けると、やっと鬼ごっこの最中だということを宵太は思い出した。

「あ、そういえば……忘れていたな。まあ、七士さん、落ち着きましょうよ。鬼ごっこであって、殺し合いでは無いですから」

「ぁあん？てめぇが俺様の保健室で芙和といかがわしいことをしていた事実はどうなんだ？」

「いや、誤解ですよ！いつもの遊びですから！」

「遊び……私とのことは遊びだったのね！」

「なんで、そこで芙和が乗るのさ？」

「なんか、言いたくなっちゃった。七士先生、私たちは何もしていませんから、安心してください」

「じゃあ、暴力はやめだ。だが、今は鬼ごっこの最中だよな？だから、宵太。てめぇを全身全霊全力の力を拳に込めてタッチしてやるよ！」

「えーっと……それも暴力とは言いませんか？」

「そんな言葉は俺様の辞書には載せねぇ！」

「理不尽ですよ！」

宵太と芙和は保健室を飛び出していった。

第四章　◆九頁◆

「待てよ、宵太！一発で良いから殺らせろ！」

「なんだか物騒な響きなので遠慮します！」

「一発殺ったら逝って良いから殺らせろよ、てめぇ！」

「だめだ、話が通じていない。芙和、どうする？」

「逃げるしかないね。もしくは、誤解を解けば良いかもしれないけれど、あれじゃあ難しいよね」

保健室を飛び出した二人は、ただ今下方向に移動中。これは単に上に行くより疲れないから、という理由なのだが、これは七士にも通じるものなので意味としては無意味だ。むしろ、悪い結果になっているとも言えるが、どこに行こうが不良保健室勤務員から逃げ切れるはずはないのだから、特に変わりは無い。

一階まで下りきると、視界の隅に冷と美恵留が映った。必死に逃げている姿に何かを感じ取ったのか、二人もついてきた。

「御柳、どうしたんだい？そんなに慌ててさ。いくら速く走っても人間は風にはなれないんだよ？」

「違う、そんなこと微塵も思っていない！追われているんだ！」

「誰にさ？」

「鬼だよ、鬼！」

「そりゃあ、まあ、鬼ごっこの最中だしねぇ」

「そうだけど、そうじゃない！振り返ればわかるよ！」

言われた通り美恵留が振り返ると、必死で追ってくる七士の姿が見えた。

「……あはは、あれは鬼だねぇ」

「笑顔が引き攣るほど強烈だろう？」

「何をどうすれば、ああなるのさ？」

「保健室のベッドの上で宵太に襲われたら、だよ」

「嘘を言うなよ、芙和！」

「最低だねぇ、御柳」

「信じるなよ！」

「御柳先輩、僕がいつも使っているベッドの上ですよね？もちろん、そうですよね？でなければ僕は泣きますからね！」

「冷には何にどう反応すれば良いかもわからないよ！」

「まあ、とりあえず、あれの処理はあたしに任せな。その為に持ってきたようなものだからねぇ」

ザザザッ、と足に力を込めてスピードを殺し、美恵留は立ち止まった。その少し先で他の三人も止まり、美恵留を見つめる。美恵留はカラーバットを、まるで剣道の正眼の構えの位置に固定し、七士が向かってくるのを待つ。七士も美恵留の存在に気付き、腰に帯びていた竹刀を抜き、走っている勢いを利用しながら美恵留に向かって打ち下ろした。

ガギィン！

鈍い音を出しながら鍔ぜり合う二人。実際はカラーバットと竹刀ではこのような鈍い音は出ないのだが、出てしまったのだから仕方が無い。

「てめぇ、それは使わないと決めたんじゃねぇのか？芯が弱いやつだな、てめぇはよ」

「何事にも非常時というものは必要だからねぇ。芯を堅くしすぎても身動きが取れなくなるんだよ。それを生かすも殺すも自分次第だけれどねぇ」

「てめぇみたいな青二才を見ていると反吐が出るぜ。知ったような口ばっかりの口先野郎はなあ！」

「青二才も野郎も男に対しての暴言だねぇ。女のあたしに使うのは間違っているよ」

「あれ？てめぇって女だったのか？俺様はてっきり女装癖のある変態だと思っていたぜ」

「それは、冷のことだよ」
じろりと宵太が冷の方に視線を送ると、「否定は出来ないですね」と答えた。
「いや、否定はしろよ！」
宵太のツッコミも虚しく、美恵留は更に七士と対峙する。
「それに、あんたにはこの立派な胸とくびれが見えないのかい？紛れも無く女の子の身体だよ」
「んなもんは脂肪の塊と痩せ細った腰でしかねぇよ。俺様の一撃を受け止めるやつは女というカテゴリには含まれねぇんだ」
「自分の内にしか基準を持たないなんて世界の狭い男だねぇ。それに、別にあんたに女として見てほしいとは思っていないよ」
「今流行りのツンデレってやつか？」
「……そうだと良いねぇ」
美恵留は竹刀を弾き返すと、その小振りさを活かしてすかさず反撃を放つ。しかし、七士はそれを竹刀の柄尻で軌道を逸らし回避。数歩下がったところで横薙の一閃を放つが、それを身を低くして躱した美恵留はその姿勢のまま懐へ潜り込み、打ち上げるように顎を狙う。
「くっ！」

それを七士が状態を僅かに反らすことでギリギリ避けた。二人は間合いを取り、呼吸を整える。

「危ねぇなあ。もう少しで顎に一発もらうところだったぜ。美恵留はミステリアス研究会なんてやめて武術系の部活に入った方が良いんじゃないか？」

「あたしは好きでミス研に残っているんだよ。それに、中途半端も優柔不断もあたしの主義に反するからねぇ」

「立派な考えだぜ。まあ、それも良いけれどよ、少しは肩の力を抜くのも大事なんだぜ？それで失敗や後悔をしていちゃあ、世話無ぇからな」

「心配無用だよ。あたしはそんなことにならないからね」

そして、互いに動かない膠着状態に入った。

「木薙先輩、どっちが勝つと思います？僕は緋鳥先生が勝つと思うんです。いくら美恵留だとしても、緋鳥先生相手では敵わない気がします」

「私は天里さんが勝つと思うよ。私たちが信じれば勝てるよ。友情、努力、そして勝利だよ」

「週刊少年ジャンプ的な考えですね」

「だから、比名麦くんも一緒に信じようよ」

「美恵留のことならずっと信じていますよ。あいつはやるときはや

る女ですからね。いつだって僕にとってのヒーローみたいな存在だったんですから。知ってましたか？美恵留って小さい頃は凄く泣き虫だったんですよ。でも、それでも、芯が強くてかっこよかったんです。女の子に対してこういう思いは失礼かもしれないですが、それでも僕には憧れの存在なんです」

「比名麦くんって、私にはよくわからない子だけれど、純粋に天里さんのことが好きだよね？恋愛感情じゃなくてもさ」

「そうですね。僕は美恵留のことが好きですよ。もちろん、木薙先輩も御柳先輩も、柊先輩、依奈先輩、緋鳥先生に天さん、みんな大好きです」

と、そこで宵太は気になってしまったのか、冷に一つの質問を投げかけた。

「なあ、冷？お嬢様のことはどうなんだ？」

「天上院先輩ですか？そういえば、特別意識したこと無いですね……僕とは一線を引いているような、そんな感じに接するのでよくわからないのが本音です。でも、出来れば、その一線を越えてきてほしいですね」

「……そうか」

「それでは、御柳先輩はどっちが勝つと思いますか？」

「そんなの聞かなくても決まっていることだよ。僕たちの世界は相変わらず、変わらない、いつでも、いつだって、いつであろうと、いつも通りだ」

第四章　◇十頁◇

そして、膠着状態は解かれた――不協和音のチャイムと共に流れた、機械を通して流れる声によって。

『それまで！今日の鬼ごっこは終わりですので、各自、生徒及び教師はご帰宅ください。尚、チャイム後に捕まった方は無効となり、まだ逃げる権利はありますのでご安心ください。では、また明日もやりますのでゆっくり休んでくださいね。以上、天上院家唯が独占、天上院唯がお伝え致しました』

「ちっ、今日は終わりだとよ。また明日な、美恵留とその他」

「出来ればあんたには会いたくないけれどねぇ」

「つーか、僕たちの存在がその他で片付けられた件についてどう思いますか、芙和？」

「私たちは何もしていないから妥当じゃないかな」

「……だよねぇ」

「なんだか、今回の天上院先輩の立ち位置っておいしいですよね。傍観者というか、全てを掌握している魔王的な存在みたいですし」

「お嬢様ちゃんとしては、今の冷の表現じゃ不本意だろうねぇ。まあ、そんなことはどうでも良いとして、早く帰ろうじゃないか」

「帰るとしても部室に荷物を取りに行かないとな。あと、近馬と依奈を探さないといけないし」

「それなら大丈夫みたいだよ、宵太。ほら、あそこ」

芙和の指差す方向、廊下の向こうから二人は歩いてきた。いや、正しくは近馬が依奈をおんぶしながら歩いてきたのだが。

「おー、みんなも捕まっていないんだな。お疲れお疲れー。俺も綾杉も無事だぞ」

「近馬、今までどこにいたんだ？僕たちは必死に戦っていたんだぞ」

「宵太、嘘はだめだよ。頑張っていたのは天里さんで、私たち見ていただけ」

「捏造失敗。で、近馬たちはどこに？」

「俺たちは中庭でのんびりしていた」

「てことは、柊。あたしが緋鳥とバトル漫画並に派手にやっていた時に、あんたは綾杉ちゃんとのんびりしていたと言うのかい？」

ずい、と前に出てきた美恵留に怯みながらも、近馬は頷きながら答えた。

「まあ、そうだな。鬼である教師たちが何度か通ったが、スルーしていった。唯一反応を見せたのがおっちゃんだったが、何かぶつぶつと呟いて去って行ったんだ」

「そうか、先輩たちはまだ知らないですよね。この鬼ごっこは鬼もペアで、狙う生徒もグループ分けされているんですよ。ちなみに、僕たちを担当する鬼は緋鳥先生と天さんです。黒服の二人はフリーなので気をつけてください」

「そんな情報があったのか。あ、そうだ。美恵留んに聞きたいんだが、おっちゃんが『美恵留ちゃんと敵対なんてしたくなかったのに……』って、言っていたんだが、何かあったのか？」

「別に何も無いけどねぇ。天が個人的に悩んでいるだけだよ。帰ったらフォローをしておいてあげるさ」

手をひらひらさせながら言うと、美恵留は部室に向かっていった。冷が何か言おうとしていたが、結局何も言わずについていった。

荷物を取りに行き、それぞれ帰路についた。やはり、いつもと同じく冷と美恵留、近馬と依奈、宵太と芙和の組み合わせだ。依奈は結局眠ったままだったので、近馬がそのまま連れて帰った。今日もまたお泊りなのだろうか。

他のメンバーと別れた後、美恵留は何か言いたそうにしている冷に聞いてみた。

「冷、言いたいことがあるんだろう？あたし以外に誰もいないんだ、早く言いなよ」

「よく気がついたな。別に先輩たちがいる前でも僕は良かったけれど、美恵留はプライド高いからさ」

「勿体振っていないで早く言いなって」

軽くいらいらしながら聞くと、冷は真剣な眼差しで美恵留を見な

がら言った。

「美恵留、怪我したでしょ？緋鳥先生とやり合った時に、左腕を捻挫したよね？ほら、身を低くして避けた時に左手首を傷めて、最後の攻撃の時には緋鳥先生の反撃が当たっていたし」

「よく見ているじゃないか。どうして気がついたんだい？」

「変に左側を庇いながら先輩たちと話していたし、左手を使わないようにしていたのを見れば簡単だよ」

「あんた以外にバレていないなら良いさ。あたしが怪我したのは自分の責任だし、何より軽い怪我だからみんなに心配させないように黙っていただけ。あんたも気にしなくて良いからね」

平気だよ、と言わんばかりに手をひらひらさせながら言うと、その後は互いに無言のまま家に帰った。といっても、隣同士なのだが。

夜になり冷が自室に戻ると、窓越しにある美恵留の部屋の明かりが点いていたので、メールで連絡をしてみた。

「《今から行っても良い？》と。これで送信」

すぐに返信されたメールには《もちろんだよ。おいでよ、冷ちゃん！》と書いてあった。

「……テンション高いな」

呟きつつも冷は、窓から窓に跳び移って美恵留の部屋に入った。

「おじゃまし――なっ！」

「いらっしゃい、冷ちゃん！あたし、ミエルンがあなたを癒してあげる☆」

そこには、フリフリフワフワの衣装を着た美恵留がいた。いや、美恵留とは判断しにくいのだが、それでも確かに美恵留だった。既にキャラは変わって、読点が☆になっていた。

「あたしの魔法が効かないのかにゃ？それなら、直接抱きしめちゃうんだもん☆」

ぎゅーっ、と言いながら冷を抱きしめる美恵留。

「……なあ、美恵留？どうしてこんな衣装を着ているんだ？」

「……なんだよ、つまらないねぇ。せっかく、あたしが芸能界に勤めていた時のキャラを再現してあげたというのに。マニアには激レアなのにねぇ」

素に戻った美恵留がいつも通りの口調で、つまらなそうに溜息を吐きながら言った。それでも、抱きしめた体勢のままなのだが。

「僕はマニアじゃないから、美恵留の頭がおかしくなったようにしか見えないよ」

「学校には知られていない事情だから、あんたぐらいにしか見せる相手がいないんだよ」

「あれ？美恵留はこのキャラが嫌いだったはずだろう？」

「久々にやってみると楽しいものなのさ。冷もやってみるかにゃ？」

再びアイドルモードになって聞く美恵留に、冷は全く違う言葉を返した。

「何か悩んでいるのか？いつもと様子が違う、っていうか見た目からおかしいけれど、何をそんなに必死に隠そうとしている？僕にも話せないことなのか？」

美恵留からの返事はない。

「それと、どうして抱きしめたままなんだ？」

「……んだよ」

「え？」

美恵留の声は震えていた。

「あたし、自分が情けないんだよ……」

第四章　◆十一頁◆

「あたしは情けないよ」

もう一度呟いて、静かに冷に抱き着いた。いきなりの出来事にも関わらず、冷はいたって冷静に美恵留を受け入れた。

「緋鳥に挑んだくせに勝てなかった。むしろ、軽いとはいっても負傷しているから負けかもしれないねぇ。本当に情けないよ」

「美恵留、それは本当のことを言っているのか？」

「ああ、本当に情けないと思っているよ」

「それじゃない」

冷は一旦美恵留を離し、顔を見つめながら言う。

「本当に軽い怪我なのか？」

「そっちか。こんなのは軽いもんだよ」

ひらひらとさせながら答える美恵留の手を冷は掴んだ。そして、負傷した部位に僅かに力を込めると、声を出しはしないものの確かに表情を歪ませた。

「痛いんだろう？どうして我慢する？なんで誤魔化す？僕には正直者でいろと言ったのに、自分は嘘吐きになるのか？この程度の嘘で

僕を騙すなんてふざけるな。痛いなら痛いと言えば良いじゃないか。別に美恵留が一人で背負う必要も責任も無いんだ。もし、美恵留がそんな考えをしているなら、思い上がりも甚だしいよ」

冷は若干の怒気を込めた口調で美恵留に言い放った。それを聞く美恵留は俯くだけで何も言わなかった。いや、言えなかったのだろう。幼なじみと言えど、後輩である冷からの叱咤に何も感じないわけが無い。

すると冷は、黙ったままの美恵留を抱きしめた。そして、優しく語りかけるように話し始めた。

「ペアである僕が足手まといだと言うのなら、僕のことは気にしなくて良い。他の先輩たちを守りたいと思っているのなら、先ずは自分を守れば良い。僕だって自分の身ぐらいは守れる。先輩たちだって同じだ。狂った殺人鬼を相手に鬼ごっこをしているわけでは無いんだ。そりゃあ、緋鳥先生は速いし強いけれど、逃げられないわけじゃないんだ。黒服の二人にも同じことが言える。これはただの体育祭だろう？美恵留が一人で戦う必要は無いんだ」

「冷がこんなにも生意気なことを言うとはねぇ。あたしはびっくりしちゃったよ。でも、なんだか嬉しいねぇ」

「こんなに言われて嬉しいなんて美恵留はマゾなのか？」

「それはあんただろう？」

言いながら美恵留はぐっと腕に力を込めた。抱きしめるというより、抱き絞めるといった感じに冷の身体が曲がっている。

「ああ！やるならもっと強く！もっとぎゅっと！折れるぐらいに力

を込めて！やっぱり、それはやりすぎ！」

「ほらほらほらほら、これで良いのかい？」

見ていて痛々しい光景なのだが本人たちは楽しそうにしている。美恵留がかなり無防備な格好で抱きしめているというのに、そういう気持ちに発展しない辺りが幼なじみ故なのか。

一段落すると、冷は美恵留にひざ枕をしてもらっていた。優しく撫でるように冷の頭に手を添えながら美恵留は口を開いた。

「あたしは別に一人で抱え込もうとは思っていなかったのさ。でも、どうしてかわからないけれど、たまに思うんだよねぇ。あたしはあの中じゃ独りなんじゃないか、ってねぇ。そんなことはないんだろうけれど、思っちゃうんだよねぇ」

「美恵留も少なからず集団恐怖症があるんじゃないか？いや、別のものかもしれないけれどさ。一度、緋鳥先生にカウンセリングを頼んだらどうかな？」

「あっはは、緋鳥のカウンセリングを受けるなんてあたしには無理だよ。我慢できないからねぇ。だいたい、あたしがそんなことを思う理由はわかっているのさ」

「へえ、なんなのさ？」

「カップル二組の中にいて孤独感を味わうのは必然だとは思わないかい？」

「そういうことか。それなら、僕たちも付き合おうか？」

美恵留の膝に頭を乗せながら、冷はしっかりと瞳を見つめながら言った。それに対し美恵留は、撫でている右手を一度離し、人差し指と中指を立てて、まっすぐ自分を見つめる冷の瞳に押し当てた。俗にいうところの目潰しだ。

「痛えええぇぇぇ！な、何するんだよ！」

「あんたが妙なことを言うからだよ。大丈夫、加減はしておいた」

しかし、真似はしないように。

「危ないからやめろよな……」

「あんたも妙なことを言うのはやめなよ。そういうのは本気で言わないといけないんだからねぇ」

「痛いなあ……まったく」

目を押さえながら呟く冷の頭を、美恵留はまた優しく撫で始めた。冷もそれ以上は何も言わなかった。

「遊び感覚」

頭を撫でていた美恵留が、何の前触れも無しにふと呟いた。それに対して冷が「え？何が？」と、当然の切り返しをすると、美恵留は続きを喋り出した。

「いやねぇ、今回の体育祭の主旨を考えていたんだけれど、なんだかぱっとしないものばかりだったんだよ。だけど、《遊び感覚の体育祭》と考えれば違和感が無いんだよねぇ。お嬢様ちゃんが考えた

にしては無茶が無いだろう？でも、遊び感覚の体育祭として考えて、何か目的があるのならお嬢様ちゃんらしいのさ」

「目的って、例えば？」

「例えば……賞品が親子旅行券だったり、そういうものじゃないかねぇ。黒服二人が鬼として参加している理由は、あの二人が鬼の中でトップなら賞品はお嬢様ちゃんのものだ。それならば、お嬢様ちゃんも誘う口実が出来てオーナーを気軽に誘えるだろう？」

「なるほど、天上院先輩も寂しいんだな」

「も、ってあんたも寂しいってことかい？」

「違うよ。既にいない親に対して寂しいなんて僕は思わないから。僕じゃなくて依奈先輩だよ」

「綾杉ちゃんか。でも、柊がいるから」

寂しくないじゃないか、そう続けようとする美恵留を遮って、冷は口を開く。

「親がいなくて会えないなら思うことは少なくなるかもしれない。けれど、親がいるのに会えないのは、どうしたって思ってしまうんじゃないのかな？」

「冷は他人の考えを見通したようなこと言うねぇ。それなら、自分のことも客観的に見ることをお勧めするよ。あんたはどうも自分自身のことには疎いというか、弱いんだよねぇ」

美恵留はぺちぺちと冷の額を叩きながら言うと、冷はやれやれといった風に溜息を吐いた。冷は起き上がり、欠伸をしながら伸びをして、また寝転がった。今度はひざ枕ではなく、普通の枕に頭を乗せた。

「なんだいなんだい？あたしのひざ枕がお気に召さなかったのかい？」

言われた冷はぷいと顔を背けてしまったので、美恵留は「やれやれだねぇ」と呟きまるで添い寝をするように横になった。

～後日談～　その四

～冷と美恵留の場合～

結局、二人は横になっている間に寝てしまったようで、仲良く同じベッドで眠っている。

時折、美恵留が寝返りを打つ度に冷は何かしらの攻撃を加えられているが、問題無いだろう。眠っていても喜んでいる風に見えるからだ。いや、それの方が問題なのかもしれないが。

～依奈の場合～

自室のベッドの上できょろきょろと辺りを見回しながら、依奈が舌っ足らずな口調で側にいたゆかりに近馬のことを聞いた。

「ねぇねぇ、ゆかりちゃん？柊くんはいつの間に帰ったんですか？」

「眠った依奈さんを送ってくださったすぐ後に帰りましたよ」

ゆかりはまだ眠そうに目を擦る依奈に、独特な関西地方の口調でゆったりと答えた。ゆかりの母親が京都辺りの出身で、それの口調が彼女に影響しているのだ。ちなみに、依奈の『うち』という一人称はゆかりのそれと発音は違うが、ゆかりの影響だ。

くあ、と小さく欠伸をする依奈にゆかりは質問する。

「なんだか、お疲れのようだけれど、今日は学校で何かあったのですか？」

「うん、鬼ごっこをしていたんです」

「鬼ごっこ……ですか。それは、何と言うか随分とまた質素な遊びをしましたね」

「遊びじゃなくて学校行事ですもん。今年は唯ちゃんが考えたらしいですよ」

「学校行事ですか。相変わらず面白いことをする学校ですね」

「もう慣れましたよ。今では日常みたいなものです」

くあ、ともう一度小さく欠伸をした依奈はぽたりとベッドに倒れ込んだ。間もなく寝始めたので、ゆかりは布団を掛けてあげると、部屋から出ていった。

〜近馬の場合〜

「なあ、真人？あの通り魔の噂の出所って誰なんだ？」

近馬は甘いコーヒーを飲みながら、閉店後の作業をしている真人に聞いた。

「あれは誰だっけ？お客さんが話しているのが聞こえただけだった気がするけど」

「じゃあ、出所に確認することは出来ないのか」

「近馬くん、気になるのかい？」

真人が聞くと近馬は少し黙り、甘いコーヒーを一口飲んでから答えた。

「もしかしたら、っていう風に思っただけだよ」

「もしかしたら、って何が……ああ、そうか。そういうことね。なるほど、わかったよ。それだったら別の違う方法で確かめておくよ」

「そうか、助かるよ」

近馬はそれだけを言うと、一気に残ったコーヒーを飲み干して、店から出ていった。

「やっぱり、近馬くんは気にしていたのか。あれはどういう思いなのかな……」

〜芙和の場合〜

「おい、芙和よ。最近、お前の気が緩んでおらぬか？」

この古めかしい話し方をするのは、芙和のお祖父さんで一緒に住んでいる、木薙芝刈（しばかり）。芝刈とは本名ではなく、神社を継ぐと同時にその名も継ぐ、いわば神名みたいなものだ。

「お祖父ちゃんがそう見えると言うのなら、そうだと思います」

「うむ？素直に認めるということは心当たりでもあるというのか？」

「まあ、ね。宵太といろいろかな」

「なんじゃ、宵太くんか。それならば気にすることではないな。芙和が自分の彼氏とどう接しようと、儂には関係の無いことじゃ。軽く踏み込んで良い領域ではないからじゃ。もし、お前が違う悩みでも抱えていたとすれば、儂は全力で助けるがな」

「ありがとうね、お祖父ちゃん。お茶でも煎れようか？」

「いや、茶ではなく酒の方で頼む」

「呑みすぎないようにね」

芙和は日本酒を持って来ると、芝刈の持つお猪口に注ぐ。それを一気に飲み干す芝刈。

「うむ、やはり芙和に注いでもらうと一段と旨いな。お前も呑むか？」

「未成年だよ」

「そうじゃったな、わっはっはっ」

「ご機嫌になっちゃって。私はもう寝るからね。呑み終わったら片付けておいてね、お祖父ちゃん」

「わかっておるよ。おやすみ」

おやすみ、と挨拶をして芙和は自分の部屋へと向かった。

～唯の場合～

「入と出はどこ？」

「お呼びでしょうか、お嬢様」

出も一緒だが、例によって喋りはしない。

「呼んでいないのなら、呼ばないわよ。あのね、鬼ごっこについてどう思っている？あなたたち、といっても入しか喋らないけれど、意見が欲しいのよ」

「我々が思うに、意図が全く伝わりません。お嬢様は何故に鬼ごっこにしたのでしょうか？」

「ペアを組んで何かをやることによって、相手をどう思っているのか明確にしたかったからよ。冷様が美恵留様をどういうカテゴリで好きなのかを知りたかったのだけれど……まあ、予想通りだったわ」

「そうですか。ちなみに、賞品は決めてあるのですか？」

「その人が望むもの、それを私が責任を持って用意するわ。こちらで決めるより良いと思うの。それに、その人の人間性が出るから面白くなるわ」

うふふ、と意地悪く笑いながら言う天上院唯は、やはり底知れぬお嬢様に変わりは無い。

～宵太の場合～

「なんじゃ、今年のは帰ってくるのか。これでは、儂と妹ちゃんのイチャラブ計画が台無しじゃのぅ」

「よみは救われた気分だよー。宵兄にお礼のちゅーをしてあげるよー」

「夜凪にしてやれよ。『いつもありがとうー』ってさ」

「弟くん！お主って子は……」

「お礼なら言わなくて良いからな」

「妹ちゃんの声真似が似合っておらぬな。というよりは気持ち悪いぞ」

「そこかよ！」

「宵兄に慰めのちゅー」

「同情するなら、おとなしくご飯を食べさせてくれ」

ということで、食事中にも関わらず宵太に絡む姉妹は、結局、食べ終わるまでずっと続いた。御柳家は相変わらず、変わらない日常を送っていた。

〜七士と天の場合〜

とある公園にて。

「七士くん！美恵留ちゃんと戦ったんだって？怪我でもさせてしまったらどうするんだ！」

「い、いや、でもよ、天さん。あれは仕方のないことだったんだ。まあ、怪我をさせちまったのは謝るが――」

「怪我を……させた、だと？七士くんのばかやろー！」

「お、おい、天さん！」

うわーん、と走り去っていく中年の背中を見ながら、七士は溜息を吐いた。

「まじで親バカだな。つーか、馬鹿親か？まあ、天さんらしいけどな。それにしても、明日はどうするか……」

いろいろと悩みながら七士も帰っていった。

～斗乃の場合～

「ボクが留まれるのもあと少しかな。あと少し、か。あの子たち全員に挨拶できるかなあ……ボクらしくもないなあ」

第五章　◆一頁◆

ペア鬼ごっこは間に休みを挟みながらも、二日目、三日目、四日目と、無事に逃げ切ったミステリアス研究会のメンバー。四日目の終わりには既に残った生徒も少なく、全校生徒の一割にも満たなかった。

そして、五日目を迎えた朝に《それ》は起きた。まるで、日常を足元から崩すような、非日常とも思える光景。それとも、これは奇異日常と言えるのかもしれなかった。

ただ、そんなことはどちらでも良く、どちらでも変わらず、どちらだろうと同じ。《それ》の事実が変わることは無いのだから。

日常だろうと。

非日常だろうと。

奇異日常だろうと。

変わることの無い事実。

相変わらず、変わらない、そんなことは言えるはずもなく、六人は《それ》を目撃した。

「ねぇ……これも宵太の小説オチとかじゃないんだよね？」

「違うよ、芙和。これは……紛れも無く現実だ」

「あぅ……あぅ……」

「綾杉、それ以上見るな。俺の背中に隠れるでも良い、見るな」

「このお爺さんは……いったい誰なんですか？」

「冷は一年生の上に保健室登校だから見たことが無いんだねぇ。この人こそ私立太刀守高校の――」

「御祖父様！御祖父様ー！どうして……どうして御祖父様が！」

生徒たちの注目を集める《それ》とは、私立太刀守高校のオーナーだった。おそらく、誰が見ても既に死んでいることがわかる有様だった。中庭に植えてある、立派なけやきの樹に、身体の中央に刺さっている杭で打ち付けられていたのだ。

「お嬢様、落ち着いてください！只今、警察と救急車を呼びました故、我々が下手に手を出さない方がよろしいかと……」

「だって、御祖父様が……」

そう言ってお嬢様の唯はその場に泣き崩れた。入と出は動こうとしないお嬢様を抱えて、どこかに行ってしまった。

依奈の気分が悪くなった為、六人は保健室へと向かった。保健室にはスーツに白衣を羽織る、いつもと変わらない七士がいた。しかし、それだけでは日常とは言えない。

「よう、てめぇらも見たみてぇだな。なんだ？依奈の顔色が悪いな。まあ、あんなものを見ちまったら無理も無ぇな」

近馬は依奈をベッドに運び、その横の椅子に座った。冷はいつものベッドに座り、美恵留も一緒に座る。宵太と芙和はソファに座り、宵太は七士に質問した。

「七士さん、やっぱりオーナーは……」

「死んでいるな。誰がどう見ても生きているわけが無ぇ。誰が第一発見者かは知らねぇけれどよ、あそこなら誰にでも見つけられるぜ。何せ廊下を歩いていりゃあ目に付くからな。犯人は隠す気は無いんだろうよ」

「犯人、だと？」

近馬が聞くと、七士はふん、と鼻で笑いながら更に言葉を続ける。

「自分の身体に杭を打ち付けるなんて、人間には無理だ。まあ、あの爺さんが既に妖怪だったっていうなら話は別だけれどよ。かなり高齢のくせに、現役でオーナーを勤めていたからな」

「七士先生……不謹慎ですよ」

「うるせぇよ、芙和。俺様は死人に気を遣うような人間じゃ無ぇ。生きていようが、死んでいようが、好き嫌いは変わらねぇ。死んじまったやつに『良い人だった、優しい人だった』なんてことは言わねぇ。死んだら全ての人間が二階級特進か？そんなわけ無ぇだろ。俺様は生きていようが、死んでいようが悪態をつくのに変わりは無ぇ」

「言い方の問題なんだよ、緋鳥。あんたの言い分だと、ここにいるあたしたちには気を遣えるんじゃないのかい？」

「ちっ！悪かったよ」

ガタン、と机の上に乱暴に足を乗せる七士。彼も相当苛立っているらしい。言葉の上では悪態をついているが、それは単にやり場の無い怒りの成れの果てなのだ。

「緋鳥先生、学校はしばらく閉鎖ですか？」

「だろうな。まあ、てめぇは同じ家に住むから、わざわざ言う必要は無ぇが、他のやつらは相談したくなったら来いよ。といっても、あの家は冷のであって俺様のでは無ぇがな」

その後、警察が来ると生徒と教師は一人残らず例外無く、唯や黒服二人も含めて事情聴取を受けた。人数が人数なので、結局帰れたのは夕方になってからだった。

六人が校門に向かうと、そこには唯が立っていた。六人が近づくのを待って、唯は複雑な表情のまま口を開いた。

「体育祭の期間中でしたのに申し訳ありません。これでは続行不可なので、あなたたちを含めた残った生徒には賞品を用意致します。何か希望するものはありますか？」

実の祖父を亡くしたというのに、唯は約束を守ろうとしていた。六人は顔を見合わせながら、どう反応して良いのか迷っていた。

すると、依奈が思い切ったように言葉を口にした。

「唯ちゃんがオーナーを継ぐことを希望します」

それは返答を聞くのが怖くなる言葉だった。もしかしたら、怒らせるかもしれない。もしかしたら、泣かせてしまうかもしれない。いろんな不安を覚悟しながらの言葉だった。

「あ……りがとう……ございます」

泣かせてしまった。しかし、その涙は悲しみの涙ではなかった。

唯は嬉しくて泣いていた。そんなお嬢様を出が優しく支え、入は六人に向かって頭を下げながら話した。

「他の生徒様からも同じようなことを言われたのですが、しかし、迷っていたお嬢様は、あなたたちの意見も聞きたいとおっしゃいました。あなたたちもそれを望むのなら決意を固める、と。我々身内からは言い出せないことだった故、我々からも感謝致します」

深々と頭を下げる黒服二人に戸惑いながら、依奈は唯に向かって言う。

「唯ちゃん、何を言えば良いかはわからないですけど、でも、独りで泣くのは良くないです」

「綾杉の言う通りだな。天上院の側には必ず誰かいる、これだけは忘れるなよ」

唯は泣きながらもこくり、と頷くと車に乗り込み、走り去っていった。

六人はそれを見送りながら、自分たちの日常が崩れたことを実感していた。しかし、時の流れによって日常へと書き換えられてしまう。だが、今現在においては非日常、もしくは奇異日常なのだ。変わることのない事実であり、変えることの出来ない事実。

「帰ろう」

誰かが言ったその言葉で、相変わらず、変わらない組み合わせで帰っていった。

口数も少なく帰った六人の日常は、変わらぬ日常とは言えなくなってしまった。しかし、それでも時の流れで、すぐに日常へと書き

換えられてしまう。
今が非日常だとしても。
今が奇異日常だとしても。

第五章　◇二頁◇

「暑い……です」

休校が決まった翌日、依奈はそう呟きながら、ゆかりと喫茶店ホーリーに向かっていた。本来なら休校中は自宅待機なのだが、何もしないのは性に合わないということで、真人にお願いしてバイトをすることにした。しかし、自宅待機とされているのに、バイトを許可するのは些か問題になりそうなので、ある提案をしてきた。

「どうかな？休校中は泊まり込みでバイトっていうのは？もちろん、働き詰めってわけじゃないから安心して。それと、依奈ちゃんが泊まり込みになると、ゆかりさんが一人になっちゃうから、良かったら一緒においでよ」

それを電話越しに聞いた依奈の反応は凄まじかった。真人が目の前にいたら抱き着いていただろう。

そして、今に至るわけだ。

「依奈さん、大丈夫ですか？まだ家を出て間もないのですが」

ゆかりが大きめの白い帽子を被り直しながら、心配そうに聞く。依奈は荷物を重そうに抱えながら、ふらふらと歩く。

「うちは暑いのが苦手ですもん」

「冬になれば寒いのが苦手というじゃないですか」

「そうですけど……暑さで背が縮んじゃいます」

「それでは、夏が終わる頃には小人サイズですね。また、宵太さんにからかわれてしまいますね」

「ゆかりちゃん、なんだか楽しそうですね。どうしてです？」

依奈が聞くと、あからさまに動揺しながら、ゆかりは首をぶんぶんと横に振った。その勢いで帽子がずれ、また被り直す。

「単に久々のお泊りだからですよ」

それだけです、と言うと顔を背けてしまった。依奈はそれ以上は何も聞かず、暑さに耐えながら歩みを進めた。

しばらく歩き、信号待ちをしていると、ゆかりが反対側に立つ人を見つけた。その人は夏になるというのに、厚手のコートを着ていた。

「依奈さん？あのコートを着ているのって、近馬さんじゃないですか？」

「え？」

確かに、遠目からなのでよくは見えないが、近馬にそっくりだった。しかし、いくら近馬が変人といえど、この暑い中コートを着るなんてことはしないだろう。しかし、一応すれ違う時に声を掛けることにした。

「柊くんですか？」

「あん？」

その男はぎろりと依奈を睨み返してきた。ゆかりは反射的に依奈を自分の背中に隠しながら、その男に向かって言葉を放つ。

「な、なんですか？人違いをしてしまったことは謝りますが、いきなり人を睨むなんてどういうことでしょうか？」

「別に俺は睨んだつもりはない。もし、そのような風に思ったなら謝る。すまなかった。生まれた時からの癖なんだ。嘘だけど。ところで、俺を誰と見間違えた？」

その男は睨んだように見ながら質問してきた。まるで、獲物を見ているかのような、攻撃的な視線だった。依奈はゆかりの後ろで震えたままなので、代わりにゆかりが答えた。

「近馬さんといって、この子の恋人です。といっても、似ているのは容姿だけで、雰囲気も言葉遣いも全然違いますが」

「くっくっくっ、人違いをしたばかりだというのに、言うねー。お姉さんに惚れてしまいそうだ。嘘だけど。ん？柊……近馬……んー？」

「知っているのですか？」

ゆかりが聞くと、ぎろりと睨みながら唸り、考える素振りを見せた。そして、わざとらしく手の平をぽんと叩き、

「うん、知らない」

それだけ言うと、背中を向けて去って行った。歩行者信号が点滅を始めたので、ゆかりも依奈を連れて横断歩道を渡った。
男はゆかりたちを振り返りにやりと口元を緩ませた。

「嘘だけど」

その言葉はゆかりたちに聞こえるはずもなく、しかし、確かにそれは二人に向けた言葉だった。
喫茶店に着く頃には依奈もいつも通りの調子を取り戻していた。

「店長さん、ふつつか者ですが、よろしくお願いします」

「まるで、依奈ちゃんがお嫁に来たみたいだね」

「おおお、お嫁さん！そ、そんな急に結婚だなんて」

「言っていないですから。真人さん、うちまでお呼び下さり、ありがとうございます。お家のお手伝いはもちろん、お店のお手伝いも喜んで協力致します」

「いや、そんなつもりで呼んだわけじゃないから、ゆっくりしていてよ」

「いえ、うちも遊びに来ているつもりではないですから。お手伝いさせてください。それとも、ご迷惑になりますか？」

「そういうわけじゃないけれど……困ったなあ」

真人が頭をぽりぽりと掻きながら、どうしようか考えていると、自分の世界に入っていた依奈を連れ戻し終えた近馬が口を開いた。

「手伝ってもらえば良いじゃないか。ゆかりんがそれで納得しているんだから、真人が拒否し続けるのは失礼だぞ？」

「うーん、じゃあ、お願いするよ」

「はい、わかりました。近馬さん、よろしくお願いしますね」

「こちらこそ、よろしく」

ゆかりはぺこりと頭を下げると、近馬をじっと見つめた。

――やっぱり似ている。

「ん？どうした？」

それに驚いた近馬が聞くと、ゆかりは少し考えた後、先程のことを話すことにした。

話し終えると、近馬の表情は曇っていた。相変わらず、依奈の頭を撫でてはいるが、心此処に在らず、といった感じだった。

「その男は、確かに俺に似ていたんだな？」

近馬はもう一度確認するように、ゆかりに聞く。

「はい。ですが、先程も説明した通り、似ているのは容姿だけ。雰囲気も言葉遣いも全然違いますよ。何より、依奈さんが怯えていたので」

「見た目は近馬くんなのに、別人です。近馬くんにもあんな風に見

られたらって考えると、怖いです」

近馬は大丈夫だ、と言わんばかりに依奈の頭をひと撫ですると、ふぅと溜息を一つ吐いた。

「柊遠馬（とおま）」

何の前触れも無しに、近馬が口にした名前に二人は、当然首を傾げた。

「それがそいつの名前だよ。たぶんな」

「近馬さんのお知り合いですか？」

そのゆかりの質問に答えるように、一枚の写真を取り出した。

そこに写っていたのは、幼い頃の近馬が二人。正確には片方は近馬本人だが、もう片方は近馬そっくりの子供。見分けがつかない程そっくりで、無邪気に笑っている写真。

「わあ、小さい頃の柊くんかわいいですね！」

「依奈さん、注目するのはそこじゃないですよ。近馬さん、つまりこれって？」

「まあ、説明するまでもないが、柊遠馬は俺の兄弟だ。俺の双子の兄だな。そして、二年前に両親を殺した容疑者でもある」

第五章　◆三頁◆

「柊くんのお兄さんが……犯人？」

「いや、容疑者だ。まあ、犯人といっても変わりは無いかもしれない。俺は目の前で見たしな」

内容は重い話なのに、近馬は軽く言う。

「両親が目の前で殺された時に俺は思ったよ。ああ、やっぱり俺は変人なんだ、ってな。目の前の光景に動揺しなかったんだ、まったくな」

「では、近馬さんのお兄さんはどうして捕まっていないのですか？」

「行方不明扱いだからな。俺も居場所は知らないし。でも、綾杉とゆかりんが見たのなら、遠馬が本当に帰ってきたんだろ」

「何か目的があるとかですか？例えば近馬さんに会いに来たとか」

「それは、わからないさ。俺に用があるのか、別の人間に用があるのか。もしかしたら、オーナー殺害も遠馬かもしれない。通り魔の噂も遠馬かもしれない」

「通り魔の方は遠馬くんではないよ」

近馬がいつもと変わらない口調で次々と話していたが、真人に遮られた。こちらはいつもと変わらないとはいえなかった。

「遠馬くんが帰ってきたのは、おそらく昨日か一昨日だ。通り魔の噂は二週間以上前から聞いていたからね」

「オーナーの件は可能性があるんだな。まあ、そのうち俺か真人に会いに来るだろうから、わざわざこっちから探す必要も無いし、探す気も無い」

依奈は近馬の話を聞いて怖くなっていた。近馬のことを嫌いになるわけがないのだが、それでも怖くなっていた。近馬本人ではなく、柊遠馬という人間の存在が怖かった。

もしかしたら、近馬も殺されるかもしれない。

そんな風に考えてしまい、近馬の服をぎゅっと掴んだ。

「綾杉、どうした？」

「柊くんは……うちの前から急にいなくなったりしないでくださいね」

「当たり前だ。俺だって綾杉と一緒にいたいからな」

自分の親のように急にいなくならないでほしい、それを依奈は強く思っていた。

場所は移り、御柳家。

宵太は休みということで昼まで眠っていた。いや、正しくは昼に無理矢理起こされた。彼の訪問によって。

「いやあ、気持ち良さそうに眠っていたところ、申し訳ないですね、御柳先輩」

「本当にそう思うのなら優しく起こしてくれ」

冷は部屋に入ると同時にダッシュ、宵太のベッドにダイブ。それにより、宵太は何かの必殺技を喰らったかのように跳び起きたのだ。

「で、冷は何の用だ？自宅待機のはずだろ？」

「御柳先輩、今時の高校生がそのような束縛に耐えられるわけがないですよ。まあ、僕のような健全な高校生は緊縛をされるというのなら、おとなしく従いますがね。むしろ、希望しますね！」

「冷は不健全な高校生だろ？いや、道は踏み外してはいるが、ある意味健全なのかもしれないな。自分に正直すぎるし」

「とは言っても、僕はまだ童貞ですが。さすがに軽々しく出来ないですし、避妊もきちんとしますよ」

「そんな話を寝起きにするなよ……」

宵太はげんなりとうなだれながら言った。それでも、冷は楽しそうだった。

「あ、そうそう」

と、ここで冷は思い出したように、先程の質問に答える。

「緋鳥先生からの伝言ですよ」

「伝言？」

宵太が聞き返すと、冷は「はい」と頷き、こほんと一度咳ばらいをして、再度話し始めた。

「依奈はどうせ近馬のところにでも行くだろうから心配はいらねぇ。美恵留も家が隣だし、部屋は冷の部屋から行ける程。つーか、こいつらは毎日のように行き来しているから、こっちの二人も心配いらねぇ。だが、芙和だけは素直にてめぇのところに行くとも思えねぇし、依奈のところに行くなんて野暮なことも考えねぇ。だから宵太、てめぇが芙和のところに行け。結果的にどっちの家に泊まることになっても構わねぇから、一人にだけはなるな。唯がオーナーを引き継ぐ手続きを終わらせたら、学校はまた始まる。それまで一人になるな。死にてぇなら止めはしねぇけど、俺様から言えるのはそれだけだ」

冷は、まるで七士のような声でそれを話した。その行為に宵太は素直に驚いていた。

「どうですか？」

「いつの間に声帯模写なんて身につけたんだ？」

「暇潰しに覚えたんですよ。といっても、まだ緋鳥先生しか出来ないですが。それに、似ているだけなので、まだ物真似の域ですよ」

「それでも、十二分にすごいけどな」

「それで、木薙先輩の家に行くんですよね？」

「まあ、七士さんがわざわざ言うくらいだしな。着替えたらすぐに

行くよ」

「それなら、僕も行って良いですか？」

「どうして？」

「木薙先輩の巫女服姿を拝見したいのですよ！」

「動機が不純だが……まあ、良いよ。先に言っておくが、巫女服とは限らないからな」

「大丈夫です。私服でもパジャマでもきちんと萌えますから！」

宵太は呆れながら溜息を吐き、「相変わらず、変わらない後輩だ」と呟きながら着替えを始める。

「なあ、冷？」

宵太はTシャツを着ながら疑問に思ったことを聞いてみた。

「七士さんからの伝言さ、メールとか電話じゃだめだったのか？」

「いえ、単に僕の特技をお見せしたかっただけです。あとは、あわよくば木薙先輩の家に行けるかと思って」

「一人で来て平気なのか？」

「まだ昼間ですからね。夜が危ないらしいですよ」

「夜か……まるで、幽霊や妖怪みたいだな」

《幽霊》という言葉を自分で口にして、頭の中に自分の書いた小説を思い浮かべる宵太。
まさか、な。
そんな風に非日常的なことを考えながら、着替えを続けた。
「宵兄ー、起きたー？」
着替え終わったところで、姉を連れた黄泉が部屋の入口から覗き込んだ。
「あれ？黄泉は今日、学校があるだろう？」
「何言っているの、宵兄。今日は学校お休みだよ。記念日だからね」
「創立記念日って、今日だっけ？」
「違うよー。《宵兄がお休み記念日》なのだ」
「それは、サボりというんだよ。おい、夜凪。どうして、実の妹がサボタージュするのを許可した？」
それに、おろおろとする夜凪。こういうところは実に子供っぽい。
「情けない話じゃが、妹ちゃんの可愛さに負けたのじゃ……」
「僕も先輩の妹様の可愛さには負けました！」
「ありがとう、冷お兄ちゃん」

「ぐはっ……御柳先輩、今『お兄ちゃん』と呼ばれてしまいました……僕はもう死ねますよ……」

「……なんか、怒る気も失せるな」

宵太は溜息を吐きながら言った。

第五章　◇四頁◇

「みーやーなーぎー先輩ー！確かに僕は緊縛願望が有りますし、公開羞恥ですら受け入れられますが、さすがにこれは厳しいですよ」

「うるさいぞ。黙って歩くんだ」

「でも、両手が不自由な状態で、しかも上半身もぐるぐるに縛られていると、非常に歩きにくいんですよ」

「それは冷が悪い。自業自得の結果だろう？」

「僕は単に御柳先輩の妹様をぎゅうっと抱きしめようとしただけですよ」

「下心が有ると知っていて許すか！」

そう言うと、宵太は冷に繋がる紐をぐいっと引っ張った。冷は転ばないようにバランスを取ろうとしたが、失敗して転倒。危うくアスファルトに顔面を打ち付けそうになったが、何とか回避して仰向けになった。

「御柳先輩、もうこのまま引きずって木薙先輩の家までお願いしますよ」

「お、あんなところに宅配業者の車が。あれに縛れば早く移動できそうだな」

「ごめんなさい、ごめんなさい！自分で歩くので車に繋がないでください！今はたとえ小説や漫画、アニメのコメディでもそういうのは規制されがちなんですから！《良い子は真似しないでね》なんて表示を出しても、真似する子は真似するんですから！御柳先輩、聞いてくださいって！僕が必死に訴えていますよー！」

冷は必死に喋りながら、まるで活きの良い魚のようにもがいていた。宵太は意地悪そうに笑いながら「冗談だ」と言うと、縛っていた紐を解いた。

「危うくデッドレースに繰り出すところでしたよ。むしろ、地獄の門をノックしかけていましたね」

「なんだ、冷は地獄逝きなのか？」

「僕のような変態が天国に逝ってしまったら、天国なのに地獄絵図になりますよ」

「自覚しているんだな。それにしても、今のは別に上手くないぞ」

「いやー、さすがは御柳先輩だ。相変わらず手厳しいです」

「お前は相変わらず、変わらないよ」

紐を解かれ自由になった冷は、太陽が照り付けて暑いというのに、宵太に抱き着いた。

それを軽く受け流しながら歩いていると、不意に背後から声をかけられた。

「宵太くん」

声の方を振り返ると、誰もいなかった。不思議に思いながらも、宵太は正面を向こうとした。

「うわっ！」

「やっほ。宵太んくん」

宵太が正面を向くと、先程の声の主、柊遠馬が厚手のコートを着て立っていた。ここまでの道程の中で依奈とゆかりが遭遇したということだ。

「あれ？遠馬くんか？懐かしいな」

「覚えていてくれて嬉しいよ。あ、そうそう。聞きたいことがあるんだけれど、良いかな？」

「もちろん良いよ。僕に答えられることなら、ね」

「その前に御柳先輩」

すっ、と冷が腕を伸ばし間に入る感じになりながら、遠馬をじっと見つめながら聞いた。

「この方とは、どのようなご関係ですか？」

「遠馬くんは近馬の双子の兄だよ」

「柊先輩が双子だなんて初耳ですね。僕は変な勘違いをするところでした」

「……その内容は聞かないでおくよ」

今度はじろりと冷を見ていた遠馬が質問をした。

「キミは宵太んくんとは、どういう関係？」

「もちろん、恋人関係です」

「違うだろ！ただの先輩と後輩だ！」

「そう。先輩と後輩のラブストーリー」

「それは最高だな。しかし、男女の話だったらな！」

「俺がこの町を離れている間に、宵太んくんがそんなキャラになっていたとは」

「遠馬くんも信じるなよ！」

「嘘だよ。信じていないって、そんなこと。えーっと……後輩ってことは比名麦冷後輩くんかな？」

頭に手を当てながら、遠馬は記憶を探るように言った。うーん、と唸りながら頭を指先でとんとん、と数回叩いて言葉を繋げる。

「小さい頃に親を亡くして施設で育ったんだよね？高校生になると同時に一人暮らしを許され、実家へと戻った。あー、とその前に一度だけ施設から逃げ出したね？まあ、宵太んくんたちに保護されたらしいけれど、そこからの付き合いってわけだ。その金色のメッシ

ュは、一緒に住んでいる人の影響、だったかな？」

冷は驚きの表情を浮かべていた。宵太の方はたいしたリアクションも無く、「相変わらず、変わらないね」とだけ言った。

「突然驚かせて悪い。俺は人の情報を収集するのが趣味なんだ。嘘だけど。まあ、いろいろとキミたちのことは知っているよ。そういえば、さっきは綾杉依奈ちゃんとメイドのゆかりんさんにも会ったなあ。その時は宵太んくんを探していたから、挨拶もろくに出来なかったよ」

「御柳先輩」

冷は驚きの表情を浮かべたまま、宵太の方を振り返り聞いた。

「この方、柊先輩のお兄様はストーカーなのですか？」

「それは冷だ」

「確かに僕はそうですけれど、でも、ここまで詳しい情報を集めるなんて、簡単じゃないんですよ？」

「いろいろとツッコミたいけれど、遠馬くんはストーカーじゃないよ。一言で説明するなら……最強、かな？」

冷は難しい顔をしながら、渋々納得したようだった。

「で、宵太んくん。俺が聞きたいのは近馬の居場所なんだ。そろそろあいつも亡くならせてしまおうと思ってさ。嘘だけど。単純に挨拶をしようと思って」

「近馬なら真人のところだと思うよ。場所は知っているかな？」

「真人、真人……あー、叔父さんのところか。それは盲点だったなあ。他の場所を回ってしまったよ。叔父さんのところならコーヒーでも飲みながら、ゆっくり話せるな」

「遠馬くん、近馬のところに依奈がいると思うけれど、あんまりからかわないでやってくれよ。あいつは単純だからすぐに噛み付くから。比喩表現じゃなくて、本当に噛むからね」

「あい、了解。でも、宵太んくんはいつもからかうのに、それをだめだと言われたら、やりたくなっちゃうな。嘘だけど。まあ、とりあえず、近馬に挨拶したらこの町から消えるかもしれないけれど、俺のことは気にせずに日常を生きてくれ」

「うん。遠馬くんも無茶はしないようにね」

「もちろん、無茶はしないよ」

嘘だけど、と付け加えながら遠馬は、近馬と真人が居る喫茶店ホーリーへと向かって行った。

「柊先輩に似ているようで、全然別者ですね」

「と言うよりは別格なんだよ」

「別格、ですか。そうだ、御柳先輩。柊先輩のお兄様は何故この暑い中、厚手のコートを着ているんですか？」

「今度本人に会った時に直接聞きな」

宵太はそう言うと、恋人である芙和の家へ向かって行った。

第五章　◆五頁◆

「あれ？宵太と比名麦くん、急に家に来るなんてどうしたの？」

あの後も冷の暴走に付き合いながら進んだ宵太たちは、ようやく芙和の住む《芝刈神社》に着いた。母屋の方に向かおうとしたところで、境内を掃除する芙和に会った。

「み、御柳先輩……こ、これは……」

「比名麦くん、どうかしたの？」

「い、いえ……なんでもありませんよ」

冷は必死に鼻を押さえながら言った。芙和が巫女服姿で竹箒を持ちながら掃除をするというオプション付きの、冷の理想を超える姿だったので、冷は鼻血が出そうになるのを必死に堪えていた。

「ところで芙和はお手伝い中なのか？」

冷を不思議そうに眺める芙和に対して、見ればわかるようなことを宵太が聞いた。

「そうだよ。見ての通りね。ほら」

「ぶはあ！」

その場でくるりと芙和が回ると、とうとう冷は我慢できずに鼻血

を吹いた。宵太はそれをにやり顔で見ていた。つまり、狙ったということだ。

「ちょ、ちょっと比名麦くん、大丈夫？鼻血なんか出してどうしたの？」

「僕の容量をオーバーしただけなので、ご心配なく……それにしても、良いですね」

「とりあえず、冷はティッシュでも鼻に詰めて、おとなしくしていな。僕は芝爺さんに挨拶してくるから、芙和は掃除を続けていて良いよ」

「そうするけど、宵太はお祖父ちゃんに何か用なのかな？」

「いや、今日から泊まるにしても、芙和を家に連れていくにしても、芝爺さんには許可をもらわないといけないからね」

「え？え？何それ？どういうこと？」

急なお泊り発言に戸惑う芙和。宵太は母屋に向かう足を止めて、芙和の方を振り向き、「ああ、そうか」と言い出した。

「先に連絡しようと思っていたけど忘れていたよ。七士さんに言われて、まあ、正確には冷から伝え聞いたんだけれど、休校になっている間は、どちらかの家に一緒に居ろだってさ」

「宵太は……その、命令に従うの？」

「まあ、理由が何であれ、僕は芙和と一緒にいられるのなら満足だ

からね」

「な、何を言うの！ていうか、宵太が軽いキャラになっている気がするよ」

「……それは僕も気付いてはいたけれど、なんか後に引けなくなっちゃたんだよね」

「そんなの宵太らしくないから嫌だな」

「うん。まあ、元に戻るようには努力するよ。それでさ、芙和は泊まるのと泊まられるのは、どっちが良い？」

「そうだなあ……宵太の家に泊まりたい気持ちもあるし、家に来てもらいたい気持ちもあるんだよね。だから、どっちもっていうのははだめかな？」

「どっちも、か。うん、それにしよう」

宵太は頷くと母屋の方へ向かって行った。

「木薙先輩、お願いがあるのですが」

「何かな？」

「巫女服といえばお祓い！お祓いといえば巫女服！と、いうことで、是非その麗しい巫女服姿でお祓いをしてください！」

「えっと……えい」

芙和は少し考えた後、竹箒で冷のことを突いた。だいたい、芙和は巫女服を着てはいるが、ただの手伝いの為、そんなことは一切出来ない。というより、芝刈神社自体がそういうことをしていない。

「これは新しい感じのお祓いですね！蔑まされているようで、とても心地が良いです！」

それでも冷は満足そうなので、良いのかもしれない。

一方、その頃母屋の方では、宵太と芝刈が話していた。

「宵太くん、よく来たのう。とりあえず、一杯呑むか？」

「では、いただきます」

「なんじゃ、お主は呑むのか？未成年だとか言わぬのか？」

「僕はそんなに良い子ではないですからね。返事だけでも呑むようにしようかと思いまして」

「わっはっは、相変わらず、変わらぬのう。まあ、酒を出したら芙和のやつが怒るからの、茶の一杯くらいは付き合ってくれ」

「それならいつでも喜んで」

宵太はにっこりと笑いながら、芝刈の差し出す湯飲みを手に取る。受け取ったお茶には茶柱が立っていた。宵太は一口飲んでから、話し始めた。

「それで、本題なんですが」

「結婚なら許すぞ」

「いや、いきなりすぎますし、しかも許可しちゃうんですね！そりゃあ、いつかはしたいと思いますが、今日は違いますよ」

「いやあ、お主と話すと楽しいわい」

豪快に笑いながらお茶菓子をつまむ芝刈。宵太は一呼吸置いてから、改めて話し始めた。

「今日は、僕が泊まりに来ることに対しての許可と」

「許す」

「芙和を家に泊めることの許可を」

「許す」

「もらいたいと思い来ました」

「許す」

「……簡潔でとてもわかり易いお返事ですね。とても感謝します」

「お主たちの恋路を邪魔しても面白くないからのう。お主たちは好き合って付き合っているのじゃから、周りが野暮な口を出す必要は皆無じゃ。お主らが良くするか、悪くするかは自由じゃ。周りが下手に惑わせて、悪い方向にいってしまったら不本意であろう？じゃが、しかし、お主らが真剣に助言を乞うならば、儂らはそれに全身全霊全力を以って応えてやる。それをどう扱うのかも、お主ら次第

になるのじゃが、儂は信じておる。芙和を幸せにしてやってくれ。儂は喜んで嫁に出す」

「いや、ですから、今日は結婚のお話ではなく、お泊りの話しですからね？結婚の話はまた日を改めてから話したいと思っています」

「宵太くんよ」

「はい」

「お主が芙和と夫婦になるのは、もちろん喜ばしいことじゃ。しかし、儂は同時に心配でもある。お主は生き急いでおらぬか？いや、それとも、死に急いでいるのかもしれぬのう。芙和を想ってくれる気持ちに、嘘偽りは無いのじゃろうが、あまり答えを急ぐようなことはせんでくれ。やりたいこと、やるべきこと、やり遂げたいこと、やり遂げるべきことを、しっかりと満足するまでやった後、自分に嘘を吐かず、誤魔化さずに答えを出してくれよ」

一口お茶を啜り、わっはっはと豪快に笑いながら芝刈は宵太の肩を叩いた。

「儂は宵太くんを気に入っとるということじゃ」

「ありがとうございます。僕も芝爺さんのことが好きですよ」

「儂に惚れるなよ？わっはっは、まあ、今日は家に泊まっていくがよい。そういうことじゃ、芙和。夕食の用意は三人分じゃ」

と、芝刈は障子の外に向かって言うとすぐに開き、芙和が申し訳なさそうな顔でいた。

「我が孫ながら、盗み聞きとは感心できぬが、宵太くんよ、愛されとるのう」

そう、嬉しそうに呟いた。

第五章　◇六頁◇

「いやー、木薙先輩の巫女服姿は良かったな。写真を撮りたかったけれど、御柳先輩に怒られてしまうもんな」

冷は一人で家に向かいながら、独り言を言っていた。

軽くスキップをしながら歩いていると、見覚えのある銀髪の女性を見つけた。冷は手を振りながら、その人の名前を呼ぶ。

「お久しぶりです、斗乃さん」

「キミは……ああ、比名麦冷か。御柳宵太たちの後輩だよね？こんなところで何をしているのかな？」

「家に帰る途中ですよ。先程までは御柳先輩たちと一緒にいたんです」

「そうか。キミとボクが出会ったのは少ないのに、ボクのことを覚えていてくれて嬉しいよ。しかし残念だ。ボクは近々この辺りから姿を消す予定なんだ」

「どうしてですか？」

「そうだなあ……詳しくは話せないけれど、最近の通り魔事件に関係することで、ね」

「通り魔事件ですか……」

冷は少し考えて、また口を開く。

「先日、僕たちが通う高校のオーナーが、殺されてしまったんです。それも通り魔の仕業なんでしょうか？」

「確かなことは言えないけれど、可能性は有るかもね。ボクは探偵でも警察でもないから、捜査をするわけではないけれど――ボクが居なくなれば、その事件は解決したも同然さ」

「それは、どういう意味ですか？」

「言葉通りの意味だよ。それ以上の意味は含んでいない。それと、これは忠告なんだけれど、キミたちの日常を壊したくないとするのなら、下手に首を突っ込まない方が良い。好奇心や正義心で動いていると、身を滅ぼしてしまうからね。キミたちは、まだギリギリのところで日常の中に居るんだ。それ故に危険なんだけれど、決して非日常や奇異日常の中に足を踏み入れてはだめだ」

冷の頭にぽん、と手を置いて斗乃は言う。優しさが篭っている言葉だが、同時に強い言葉だった。

「ボクはこれで失礼する。もう、会わないかもしれないけれど、出来ればキミたちにはボクという存在を忘れないでいてほしいと思う。じゃあね、比名麦冷」

そう言うと、斗乃はバイクに跨がって走り去っていった。すぐに姿が見えなくなり、そこには排気の匂いだけが残っていた。

「不思議な人だ」

冷は静かに呟いて、家へと歩き出した。
冷が帰ると、エプロンを着た七士が迎えてくれた。
「今日は俺様のオリジナル料理シリーズだ。その名も、カレースープチャーハンピザ風味だ」
「結局、何の味なんですか？」
「んなもん知らねぇよ。てめぇで食って、てめぇで判断しろよ」
「わかりました。それでは、いただきます」
冷が目の前の物体をスプーンですくい、口の中に入れた。ゆっくりと咀嚼をして、味を確かめる。
「不思議な味だ。名前のどれにも当て嵌まらない。この味は……あれだ。ビビンバの味がする」
「で、美味いのか？」
「まあ、おいしいですよ」
「そうか。それなら良かった。これで俺様も食えるってわけだ」
「僕は毒味役ですか？」
「当たり前だ」
ここに御柳先輩が居れば、ツッコミまくりなんだろうな。
冷はそう思いながら、七士の言動を無視して、そそくさと食事を

終わらせた。そして、部屋に戻ろうとしたところで、七士に声をかけられた。

「おい、冷。今夜は美恵留のところに泊めてもらえ。天さんに迷惑をかけんなよ」

「わかりました。緋鳥先生は何処かに出掛けるんですか？」

「うるせぇ。早く行けよ」

「わかりましたよ。でも、帰って来たら教えてくださいね」

「あー、わかったわかった。わかったから早く行け」

言われるがままに、冷は部屋に戻っていった。七士は「まずい」と言いながら自分の作った料理を口に運んだ。

「美恵留はまだ起きているのかな？」

いろいろと事を済ませて、時刻は深夜二時過ぎ。部屋の明かりは点いていなかったが、窓は開いていたので構わず跳び移った。

「美恵留？起きてる？」

暗闇に呼び掛けながら、次第に目が慣れるのを待った。

しかし、目が慣れるより先に、冷は押し倒された。焦りながらも、冷は抜け出そうとする。が、しっかりと押さえ込まれている為に、身動きすら出来なかった。

「なーんちゃって。びっくりしたかい？」

その存在は冷から離れると、部屋の電気を点けた。急に明るくなった部屋に瞳の明暗順応が追い付かず、目を細める冷。なんとか、その人物を確かめながら、呆れたように呼びかけた。

「いきなり何をするんだ？美恵留」

その人物、天里美恵留を見ながら、先程のことを問う。それに対して美恵留は、楽しそうに笑いながら答えた。

「あんたを押し倒したらどういう反応をするのか見たくてねぇ。まあ、予想していた通り、何もおもしろくなかったけれどさ」

「美恵留じゃなかったらちゃんと興奮していたよ」

「襲われそうなのにかい？」

「当たり前だ。僕は相手が殺人鬼だろうが、絶世の美女だろうが、奇跡のロリ少女だろうが、狂ったゲイだろうが、僕の許容範囲であれば興奮するのさ」

「あたしは当て嵌まらないのかい？」

「美恵留はそういう対象から外れているからな。企画外だし」

「あたしも女の子として見てほしいもんだねぇ、まったく」

「何を言っているんだ？美恵留はちゃんと女の子だよ。胸も大きいし、腰も括れているし、お尻だって良い形をしているじゃないか。まあ、それが日々のトレーニングの賜物だとしてもさ。中身さえら

しくすれば、美恵留は女の子らしい女の子になるよ」

「セクハラだよ」

「僕は正直に言っただけだよ」

「だから、冷自体がセクハラなんだよ」

「僕の存在を全否定する気か！」

「まったく、あたし以外の女の子だったら、ドン引きしているよ。あたしだから平気なんだからねぇ」

「美恵留にツンデレは似合わないよ」

「それもそうだねぇ。ツンデレは木薙ちゃんが一番良いねぇ」

「その木薙先輩の巫女服姿を、見てきたよ。すごく良かった！思わず鼻血を吹いてしまった」

「あんた、自重しないと捕まるよ？」

「それで捕まるのなら本望だ」

いつもと変わらない会話をしながら、二人はいつの間にか眠りに落ちていった。

宵太と芙和も既に寝ていて、依奈と近馬はそれよりも早く寝ていた。

そして、夜明けに近付く時刻に、別の場所で人知れずに事は起きた。

それは、夜と朝の境、東の空が明るくなる明け方、あけぼの――
そして、東雲と呼ばれる時間帯だった。

第五章　◆七頁◆

朝方。

「キミは……緋鳥七士だっけ？」

夜明け。

「御柳宵太たちと親しくしている、保健室勤務兼スクールカウンセラー」

そして――東雲と呼ばれる時間。

「こんなところで何をしているのかな？」

「それはこっちのセリフだ。学校のオーナーを殺したのはてめぇだよな？」

「てめぇだなんて乱暴な呼び方はしないでほしいな。ボクには名前があるんだ。東雲斗乃だよ」

「あん？」

七士は不愉快そうに眉間にシワを寄せる。

「――嘘だけど」

それをにっこりと笑って返すのは、東雲斗乃――ではなく、柊遠

馬だった。にっこりとではなく、にったりと笑う遠馬。

「僕、俺、ボク、私、自分の呼び名なんてなんでも良いよね？自分の口調なんて無くても良いよね？個性なんて必要無いよね？そんなのがあったら誰かに利用されるだけだよ。《その人らしく》振る舞えば誰にでも出来ることだ。おかげでキミたちの中に混じるのは楽だったよ。成り済まし、成り切り、成り代わった」

「で、てめぇが成っている間、斗乃はどうしていたんだ？」

「そのことなら心配しなくても平気だよ。東雲斗乃なら何処かに旅立ったからね」

「そのこと、ってどういう意味だ？」

「あれれ？命の心配をしていたわけじゃないの？俺はてっきりそうだと思っていたけれど、もしかして違うのかな？」

首を傾げながら、さも意外という様子で聞き返す。その行為が気に食わなかったのか、七士は更に目付きを鋭くする。

「嘘吐きのてめぇを信用してねぇんだよ。別に斗乃を心配しているわけじゃねぇよ。だがな、斗乃が無事だっていうのは嘘なんだろ？」

「そんなわけないじゃないですか――嘘だけど」

遠馬はにったりと笑いながら、着ているコートの中から小型のナイフを取り出した。

「東雲斗乃は傷一つ無いですよ――嘘だけど。今頃元気に旅をして

いると思います――嘘だけど。むしろ、俺は一度も会ったことが無いよ――嘘だけど。僕は何も知らないよ――嘘だけど。私がこのナイフで人を傷付けたことはありませんから――嘘だけど」

言いながら次々と七士に斬り掛かっていく。それを紙一重で躱すことしか出来ない七士は、苛立ちを顔に表していた。

「キミ、あなたは本当にわかりやすいですね。自分に正直です。そんなところも比名麦冷と似ています」

「喋りながら人を殺すなんて、てめぇは危険すぎるぜ」

「あはは、ありがとうございます。褒め言葉として受け取らせていただきます」

「今度は冷の真似か？てめぇはオリジナルが無ぇのか？」

その問いに遠馬はあからさまに不思議そうな顔をした。しかし、ナイフを扱う手を止めようとはせずに、そして当たり前だと言うように答える。

「これがオリジナルだよ。僕には個性が無く、俺には個別が無く、私には個人が無い。近馬のようには生きられなかったんだ。だから両親を死なせてしまったんだよ」

「自分の欠落を親の責任にしたのか？子供の考えだな」

「まあ確かに当時は子供だったけれど、そうは考えなかった。それに欠落ではなく、欠陥と言った方が正しいよ。いや、欠乏かもしれない。そんなことはどうでも良いんだ。俺と近馬の両親はね、俺を、

僕を棄てようとした」

そこでお互いの動きは止まり、

「近馬の欠片だと言っていた。無かったものにしようとしていた。俺は最初から居ない、双子ではなく近馬だけにしようとしていた。僕は殺さ――棄てられそうになったから、両親を死なせた」

遠馬はにったりと笑ったまま、

「両親を死なせてしまったんだよ」

一筋の涙を流した。

「さあ。キミは、あなたは、この僕をどう裁くのかな？こんな俺を裁けるのかな？それとも私を救ってくれるのかな？」

「それならオーナー殺害の動機はなんだ？」

「あの人は近馬を退学に追い込もうとしていた。いわくつきの生徒なんか抱えたくないからね」

「おい、遠馬。てめぇは嘘吐きだけど、嘘が下手だよな。てめぇの言っていることは嘘だらけだ」

「何を言っているのかな？」

「つまり、だ。てめぇの両親はてめぇ、遠馬を棄てようとしたんじゃない。《近馬を棄てようとした》んだろ？あいつは欠陥や欠乏どころの話じゃねぇ。壊れているからな。周りの人間のおかげで保っ

ているが、近馬はいつ崩壊してもおかしくねぇんだ。だから親は棄てようとした。無かったものにしようとした。それをてめぇが守ったんだろ？防いだんだろ？」

「近馬は壊れてなんかいない！壊れているのは俺の方だ！平気で人を死なせて、それでも平気で生きている俺の方だ！近馬はただ生きているだけなのに、どうして大人たちはあいつを危険視するんだ！少し変わり者なだけで他と変わりなんて無いじゃないか！なのに、どうして近馬は殺されそうにならなきゃいけない！両親に殺されかけなきゃならないんだ！そんなことになるのなら俺があいつを守る！兄弟だ！双子だ！あいつのお兄ちゃんなんだ！いくらでも悪役になる！犯罪になろうと構わない！あいつを守れればそれで良いんだ！壊れていると言うのなら、俺が近馬の欠片になって補う！俺がどうなろうと、近馬が幸せならばそれで良いんだ！」

先程までとは打って変わって、感情的に叫ぶ遠馬。肩を震わせ、支離滅裂でも言葉をさらけ出した。七士に向けてなのか、自分に向けてなのか、それとも世界に向けての言葉なのかはわからないが、思い切り吐き出した。

「遠馬。てめぇ何様のつもりだ？近馬の欠片になるだと？てめぇが罪を重ねる度に、消息を絶つ度に心配するやつは誰だ？近馬の精神に負担を掛け続ける気か？」

「だから、俺は！」

「自殺しようと考えた、か？」

「……何故そう思う？」

「オーナー殺害の動機から考えて、近馬のマイナスになる自分は消えた方が良いと考えたんだろ？でも、それで救われるのはてめぇだけだ。てめぇが逃げれば近馬の負担はでかくなる。それが嫌なら向き合え、表立って近馬を守ってやれ。てめぇを理解するやつは近馬以外にも居るんだからよ」

「くっ……そ！なんでだよ……なんで知ったように言えるんだよ……俺が生きていれば近馬に迷惑がかかるのに！」

「死んでも罪は償えねぇからな。償いてぇなら生きて償え」

的確に思いを指摘された遠馬は混乱していた。地面に座り込んで俯き、うなだれ、何をすれば良いかもわからず、何をしたいのかもわからなくなってしまっていた。

第五章　◇八頁◇

「わからないワカラナイ。僕は俺はボクは私はどうすれば良い？近馬の為に何をすれば良い？迷惑な存在になるのなら、いっそ死んだ方が良いと思っていた。けれど、それは違う？じゃあ何が本当なの？ナニガホントウナノ？俺がやるべきことは何だ？近馬を守りたい。けれど、何をすれば良い？否定された、全否定された。僕は間違っていた？それならば正解は在るのか？私のしてきたことは近馬の邪魔をしていた？つまり、全てが無駄だったということなのか？ああ……アア……ああああアアあアアああアアああああああアあ！」

遠馬は苦悩しながらその場で暴れた。訳も分からずにただ自分を傷付けているだけ。電柱に身体をぶつけ、塀に頭を叩きつけ、地面に拳を振り下ろし、ナイフを脚に突き刺す。まるで痛みを感じていないように何度も自身を傷付ける。しかし、七士はそれを止めようともせずにただ眺めていた。じっと睨むように。そして、吐き捨てるように、ただ一言、叩きつけるように、言い放った。

「空回りだったんだよ」

それがまるでとどめになったかのように遠馬を貫いた。動きが止まり、涙でぐしゃぐしゃになった顔を更に歪ませた。

「誰もてめぇのしたことを望んじゃいねぇんだ。独り善がりで、独りぼっちで、ただてめぇだけの独り遊びだ。誰もてめぇに感謝なんてしねぇんだよ」

「は……はは……」

遠馬の口元が次第に緩み始め、

「あはは……はは……」

涙を流しながら、様々な感情が混同したような表情で、

「あはははははははははははははははははははははははははははははははは！」

狂ったように笑った。その場に倒れ込みながら、笑いながら、泣きながら、遠馬は気絶した。

「ちっ……精神がぶっ壊れちまったみてぇだな。仕方ねぇなあ。応急処置をして病院に運んでやるかな」

――そして一ヶ月半弱が過ぎた。

既に学生たちは夏休みを迎えていた。遊びに没頭したり、学力を上げたりと様々。その中で日本の文化には盆というものが存在する。ご先祖様を迎えるなど土地柄や家柄によって少しの違いはあるが、大切な行事に変わりはない。

だが、ここ。比名麦家ではそれよりも早くに大勢の人たちが集まっていた。

「早いものですね、先輩方。もう四十九日を迎えるんですから」

「無理するなよ、冷。お前また泣いていただろう？目が真っ赤だよ」

「すみません、御柳先輩……でも、未だに信じられないので……」

「そうだね。七士先生が亡くなるなんてね……」

本日、緋鳥七士の四十九日。

「芙和も泣いていたんですね。目が真っ赤です。そう言っているうちも真っ赤ですけど」

「綾杉、無理に笑わなくて良いんだ。泣きたいなら泣いて良いから。そんな表情は……つらいから」

近馬に言われると、依奈は声を押し殺しながら近馬の胸に顔を埋めて泣き出した。それにつられるように芙和も涙を流し、宵太が優しく拭う。

「先輩方……ありがとうございます。緋鳥先生の為にわざわざ来て下さって」

「当たり前だよ、冷。あれでも緋鳥は人気があったからねぇ。慕われていたんだよ。そいつが死んだ――いや、殺されたんだからねぇ」

あの日、遠馬を抱えて病院へと向かう七士の前に現れた人物がいた。その人物の名前は――東雲斗乃。彼女はこう言った。

「そうかそうか。柊遠馬は壊れちゃったんだね。せっかく僕が手助けしてあげたのに、まだ覚悟が足りなかったのかな？まあ、それは良いんだ。太刀守高校のオーナーさえ消してくれればそれで十分。と言ってもほぼボクがやったんだけれど。それでも彼には利用価値があった方だ。うん、満足だ。ところで緋鳥七士。キミにはさ死んでもらわなければならないんだ」

そして七士は抵抗する間もなく、一瞬で生命を断たれた。抱える遠馬と共に。

「もうそろそろ始まりますね。先輩方、こちらへどうぞ」

宵太たちは案内されるままに、慕っていた不良教諭を想うのだった。

――と、御柳宵太が読み終えたボクの小説を閉じる。ボクは無言で感想を待った。

「最後の話が重過ぎですよ、斗乃さん！しかも自分を犯人役にするなんて！」

「まあまあ落ち着いてくれよ、御柳宵太。キミたちの中から犯人を決めるなんて出来ないからさボクしか居なかったんだ」

「でも、それでも七士さんは死んでいるじゃないですか」

「彼は良いんだよ。ボクとは長い付き合いと言えなくもないからね」

「また曖昧な答えですか。まあ、でも他にもありますよ。これって日常と言うよりは、非日常ですよね？」

「いやいや、御柳宵太。それは違うとボクは思うんだ」

御柳宵太は納得のいかない表情を返してきた。言葉で聞き返してほしかったけど、まあ良いか。

「ボクたちが非日常だと思っても、周りの世界に影響する程ではな

いだろう？例えば、遠くの町で殺人事件が起きてもボクたちは変わらない。遠くの国で戦争があってもボクたちは変わらない。たとえ近くで起きてもボクたちは変わらないと思うんだ」

「どうしてですか？斗乃さんの小説みたいなことが起きれば僕たちは変わりますよ」

「いや、変わらないよ。だってそれが日常なんだからね」

「出ましたね。斗乃さんの屁理屈理論」

御柳宵太はやれやれと言う風に溜息を吐く。ボクがこういう話をする度にいつもこれだ。まともに相手してもらえないのは寂しいな。それでもボクは話し続けるけれど。

「ボクたちの日常なんて《慣れ》からくるものなんだよ。だからね——相変わらず、変わらない、いつでも、いつだって、いつであろうと、いつも通り。そして——非日常ですら繰り返せば日常になる、それがたとえ奇異日常だとしても。そういうものなのさ」

「斗乃さんは相変わらず変わらないですね。説得力が有るのか無いのか、よくわからない言葉ばかりですよ。僕は無いの方に一票ですけどね」

「ははは、良いんだよそれで。ボクの言葉に意味を求めてはいけないよ。それで、キミに頼まれたから書いたわけだけど、ボクの小説は気に入ったかな？」

御柳宵太は唸りながら考える。いや、考えている振りなのかもしれない。もしかしたら別のことを考えているかもしれない。他人の

考えはわからない。だから小説にすると個人の主観だけになる。でも実際の人はまるで違って面白い。

そして御柳宵太は笑いながらこう言った。

「相変わらず、変わらないですね」

～作者あとがき～

この度は『変わらぬ日常と人欠片』を読んで下さり、ありがとうございました。

なかなか行き先が見つからずに滅茶苦茶な内容に思えますが、これもこれで有りと思えなくもないのは私だけでしょうか？まあ、作者が有りと思っていても読者様方が無しと思えば無しなのでしょう。小説は読者様方それぞれの評価だと思うので。

かく言う私も一読者であるので、小説を読んでがっかりした経験もあります。しかし、同時に驚愕というか感心というか、その意外性に驚くことの方が多いです。作中で東雲斗乃が言う通り、『小説は個人の主観である』と思うのでいろいろな作品を読むことは、《いろいろな人を知ること》に繋がると思うのです。まあ、長く語っていますが、つまり小説がそこにあるなら、しかも手軽に気軽に読めるのなら読んだ方が良いと思うのです。

さて、本小説はジャンルに捕らわれない仕様となっており、様々なものが混ざっています。私自身ジャンルがわからずにいる程ですから、これも個人の自由で良いと思います。この小説はシリーズものというか、書きたくなったらまた書く予定なので、その時はよろしくお願いいたします。

長々としてしまいましたが、次回掲載予定の小説は既に思案済みですので、固まり次第掲載いたします。私の作者ページや検索で【かるら】と調べればわかると思うので、お待ちしていただけるとありがたいです。

それでは、お付き合いして下さった皆様、またいつの日かお会い致しましょう。

《変わらぬ日常と人欠片》完

作者～【かるら】～

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0136k/

変わらぬ日常と人欠片

2011年10月6日18時23分発行